

石川県埋蔵文化財情報

第 19 号

巻頭図版（杉野屋遺跡、加茂遺跡、末松遺跡、松山D遺跡）

平成19（2007）年度上半期の発掘調査から ……調査部長 湯尻 修平…（1）

発掘調査略報

杉野屋遺跡 ……（3）

加茂遺跡 ……（5）

金沢城跡 ……（7）

三日市A遺跡 ……（8）

末松遺跡 ……（9）

松山D遺跡 ……（11）

水田丸遺跡 ……（13）

平成19（2007）年度上半期の遺物整理作業 ……（14）

環日本海交流史研究集会の記録

「日本海域における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—」

はじめに ……所長 谷内尾晋司…（19）

発表概要 日本海域における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—（九州地方） ……菅波 正人…（20）

山陰地方における古代祭祀と木製祭祀具 ……松尾 充晶…（23）

袴狭遺跡群と兵庫県北部の木製祭祀具 ……中村 弘…（26）

加賀における古代祭祀—木製祭祀具を中心として— ……向井 裕知…（29）

越中国における古代の祭祀 ……堀沢 祐一…（32）

越後国の律令祭祀—木製祭祀具を中心にして— ……水澤 幸一…（36）

出羽国域における古代祭祀—木製祭祀具を中心として— ……伊藤 武士…（39）

日本海域における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—

「東北地方（米代川流域～津軽）」 ……木村 淳一…（44）

討論と展望 ……大西 顕…（50）

資料紹介

白江梯川遺跡の琴とかごについて—資料提示と問題提起—

……………久田正弘・中川律子・本田秀生・佐々木由香…（53）

2008年3月

財団法人 石川県埋蔵文化財センター



杉野屋遺跡 調査区遠景（北西から）



加茂遺跡 調査区全景（第1面：北から）



末松遺跡 調査区全景（北から）



松山 D 遺跡 円墳完掘状況（北から）

平成19（2007）年度上半期の発掘調査から

調査部長 湯尻 修平

平成19（2007）年度は、年度当初に17件40,855㎡の発掘調査を実施することで計画を立案した。ここ数年、当センターが受託する土木工事等に伴う事前の記録保存のための緊急調査は減少傾向にあり、財団設立から10年目を迎えて最も低い調査面積となった。本県においても公共工事等が減少傾向にあることから今後ともこの傾向はしばらく続くものとみられている。県教育委員会との協議により年度途中に追加した調査もあるが、今年度の実績は最終的に19件41,035㎡となった。

本書では実施した20件の調査遺跡のうち4月～9月の上半期に行った7遺跡の概要を掲載した。

宝達志水町の杉野屋遺跡は吉崎川改修に関係して河川が拡幅される兩岸を調査した。吉崎川の旧流路により削平された箇所もあったが、A・B区南半で調査された幅約10m、深さ2mの奈良・平安時代の河道跡からは多くの土師器や須恵器が出土し、墨書土器も多く含まれていた。河底から土器とともに出土した長さ約2.5m、径0.9mの巨大なケヤキの加工木は類例をみないものであった。根元を切断し建築部材や容器の材料を得ようとしたものか、斧で楔形の加工痕がある。古代の木工技術を窺い知るうえで大切な資料となろう。

河北縦断道路整備に伴う津幡町加茂遺跡の調査は、17・18年と継続して3年目となった。今回の調査は道路予定地内に計画している横断水路と遺構面の高さや遺構状態の把握を目的に実施した。調査の結果遺構面は2面あり、堀立柱建物などの遺構密度が極めて高い場所にあたることが判明したため、今後、文化財課が土木担当課と保存協議を進めることとなっている。

金沢城跡の調査は旧県庁跡地利用計画に関係した調査である。県庁が移転した跡の建物利用は前面を保存し、背後を別の建物に利用する基本計画が策定されている。これまでの確認調査で旧県庁の建物周辺には江戸時代の番所や米倉跡や中世、古代の遺跡が確認されていたが、制約があったため、遺構面確定を目的とした詳しい調査を行うこととなった。中庭にトレンチを設定して調査を行った結果、江戸後期、江戸前期、江戸初期～中世、古代の各遺構面が把握され、明年度の発掘調査に備えることとなった。

野々市町末松遺跡では、平成14年度調査でも確認された直径約15mの円に巡る周溝状遺構が確認された。前回調査と同様、時期を確定できる出土品はなかったが、溝が古墳終末期の竪穴に切られており、弥生～古墳時代の墳墓周溝とみる手懸かりが得られた。また、調査区を南北に縦断する幅約1mの平安時代の溝が確認されたが、人工的に開削された条里に関係した遺構とみることにもできる。野々市町三日市A遺跡は昨年度からの継続調査であったが、調査した区域は耕地整理などにより削平を受けた場所であったため、遺構、遺物ともに希薄であった。

加賀市松山D遺跡は、国道8号加賀拡幅事業に係る調査で、弥生時代から中世の集落遺跡であったが、過去に墳丘が削平されて失われた円墳の周溝2基が確認された。幅2m程度の浅い周溝からは供献された須恵器の小型壺や甕などが出土しており、須恵質の埴輪片も数片採集されている。古墳時代前期から後期まで続く分校・松山古墳群の新たなグループとして存在が明らかとなった意義は大きい。

平成19年度上半期の発掘調査遺跡位置図



調査担当課	関係機関		事業名	遺跡名	所在地	予定面積 (㎡)
調査1課	国土交通省	金沢河川国道事務所	一般国道470号能越自動車道(七尾水見道路)	七尾城跡	七尾市古城町他	8,160
		金沢河川国道事務所	一般国道8号改築(加賀拡幅)	分校C遺跡	加賀市分校町	970
		金沢河川国道事務所	一般国道8号改築(加賀拡幅)	松山D遺跡	加賀市松山町	2,030
調査2課	鉄道・運輸機構	鉄道建設本部大坂支社	北陸新幹線建設	二日市イシバチ遺跡	野々市町二日市町	1,900
		鉄道建設本部大坂支社	北陸新幹線建設	元菊町遺跡	金沢市三社町	1,650
	農林水産部	農業基盤課	県営ほ場整備 野々江	野々江本江寺遺跡	珠洲市野々江町	165
	土木部	河川課	広域基幹河川改修安原川	三日市A遺跡	野々市町三日市	530
		河川課	広域基幹河川改修安原川	二日市イシバチ遺跡	野々市町二日市町	1,240
	総務部	総務課	石川県立大学大学院棟建築	末松遺跡	野々市町末松	1,600
調査3課	土木部	道路建設課	一般国道305号 国道改築(海側幹線)	畝田・寺中遺跡他2遺跡1ほか遺跡	金沢市畝田西・畝田西	2,400
		道路建設課	緊急地方道路整備 (主) 山中伊切線	水田丸遺跡	加賀市水田丸町	450
		道路建設課	いしかわ交流幹線軸道路整備 (主) 高松津幡線(河北縦断道路)	加茂遺跡	津幡町加茂	500
		道路建設課	国道改築 一般国道415号	太田ツツミダ遺跡他2遺跡	羽咋市太田町	2,600
		河川課	広域基幹河川改修吉崎川	杉野屋遺跡	宝達志水町杉野屋	2,300
調査4課	土木部	道路建設課	緊急地方道路整備 (街路) (都) 金沢鶴来線・国道改築 一般国道305号	五歩市遺跡	白山市五歩市町	12,400
		都市計画課	緊急街路整備 (都) 春日通り線	飯田町遺跡	珠洲市飯田町	1,360
	企画振興部	企画課	都心地区整備推進	金沢城跡	金沢市広坂	600
総計		17件				40,855

平成19年度発掘調査計画(当初)

すぎのや 杉野屋遺跡

所在地 羽咋郡宝達志水町杉野屋地内
調査面積 2,300㎡

調査期間 平成19年4月12日～同年8月17日
調査担当 澤辺利明 中本武志



遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・奈良・平安時代の集落跡であり、掘立柱建物、土坑、溝、河道等が確認された。
- ・河道底からは墨書土器を含む多量の須恵器・土師器とともに、加工中途とみられる大型の木製品が出土。当時の製材技術を窺い知ることのできる資料として貴重。また、周辺に木材加工場の存在も推測される。
- ・河道内からは縄文時代前期や弥生時代後期～古墳時代の土器も出土。周辺に該期の集落の存在が窺われる。

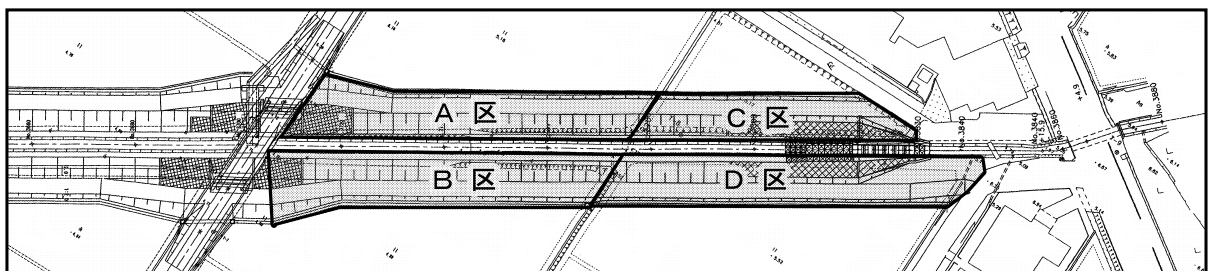
杉野屋地区は能登半島の付け根に位置する宝達志水町の北端に所在しており、羽咋市に接する。

発掘調査は二級河川吉崎川改修工事に伴うもので、調査地は宝達丘陵の小谷を下ってきた吉崎川が低地に流れ出す場所にあたる。周辺には杉野屋専光寺遺跡や二口かみあれた遺跡をはじめ、弥生時代から平安時代にかけての遺跡が多数知られており、近年、道路改良やほ場整備に伴い多くの発掘調査が実施されている地域である。

吉崎川兩岸に設定された調査区は4区に分けており、A区北半で平安時代の溝や小穴を、A・B区南半で奈良・平安時代の河道を、D区では奈良あるいは平安時代の掘立柱建物3棟以上や、土坑、溝等を確認した。B区南半やC区では吉崎川旧流路により削平された箇所が多くを占めた。

検出遺構のうち、掘立柱建物はいずれも調査区外にのびるもので、2間×2間以上。また、建物に接して堀かともみられる柱穴列も存在した。A・B区南半で検出された幅約10m、深さ約2mの河道からは多量の須恵器、土師器が出土し、中には「得女」や「山」、「西」等の墨書土器が30数点含まれた。これらの文字は周辺の遺跡からも出土しており、関連が注目されるものである。河道底からはこれら土器とともに、長さ約2.5m、最大径約0.9mを測る大型の加工木が検出された。ケヤキ根本付近であり、上半はくさびによる断ち割りや堅斧による加工痕をもち、下半は未加工部分を残す。容器や建築部材等を得るための加工中途の材とみられ、古代の製材技術を窺い知ることのできる貴重な資料であるとともに、周辺に木材加工場等の存在を推測させるものである。また、この河道からは奈良・平安時代の土器のほか、縄文時代前期や弥生時代後期～古墳時代の土器も出土し、周辺に各時期の集落の分布することが窺われる。

(澤辺利明)



調査区配置図 (1/1,500)



遺跡遠景（南から）



調査区全景（俯瞰）



A 区北半完掘状況（北から）



A 区河道内大型加工木出土状況（南東から）



A 区河道内土器出土状況



大型加工木



D 区完掘状況（北から）



D 区完掘状況（南東から）

加茂遺跡

所在地 河北郡津幡町加茂地内

調査期間

平成19年6月12日～同年8月17日

調査面積 500㎡

調査担当

土屋宣雄 宮川勝次



遺跡位置図 (S=1/25,000)

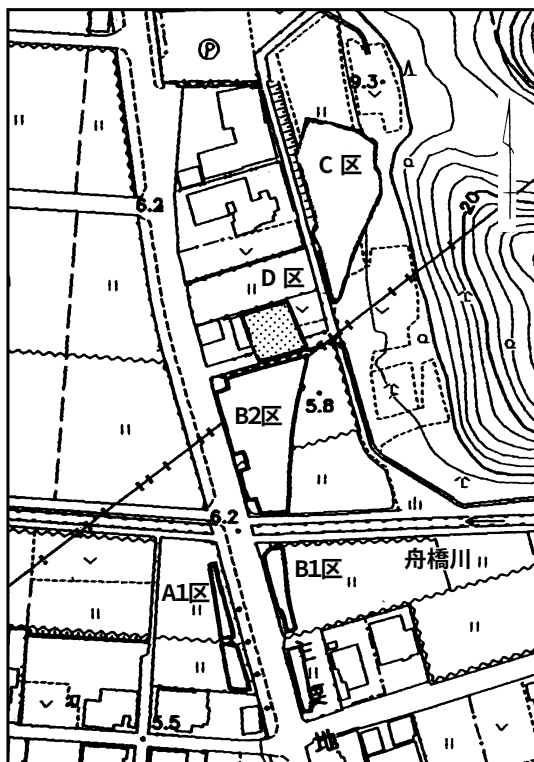
調査成果の要点

- ・ 2面の遺構検出面において調査し、主に弥生時代から古代にかけての集落跡を確認した。
- ・ 弥生時代終末期及び古墳時代では、溝や土坑等を検出した。
- ・ 古代では、遺構密度が高く掘立柱建物・土坑・溝等を検出した。

加茂遺跡は、津幡町の西部の河北潟東域にあたる沖積地から丘陵端部に立地し、今回は、いしかわ広域交流幹線軸道路整備事業主要地方道高松津幡線（河北縦断道路）の工事を原因として調査を実施した。同事業に係る調査は、平成17年度（A・B区）及び同18年度（C区）に続くもので、今回の調査区（D区）は、過年度調査区の間にあたり、舟橋川の右岸域に位置する。

調査は、2面の遺構検出面にて行い、主に弥生時代から古代の集落跡を確認した。第1面は現地表より約0.6m下の標高5m程度を測り、灰褐色粘質土をベースとし、古代を中心とした遺構が検出され、第2面は、これより十数cm下の黄褐色粘質土の地山土をベースとするもので、古代の遺構の他、弥生時代終末期及び古墳時代後期の溝が数条検出された。特に古代では、遺構密度が高く掘立柱建物・土坑・溝等を検出し、土師器や須恵器等が出土した。建物は桁行3間×梁間2間規模のものを5棟以上確認しており、平安時代前期を中心とし、主軸方向等により2時期程度の時間幅を想定している。また、柱穴には、柱根や礎板といった部材が遺存しているものも十数穴確認された。

なお、今回確認された建物群は、平成17年度調査（B2区）の大溝（SD1）北側で桁行4間程度を想定している建物群及び平成18年度調査（C区）の総柱2×2間以上の倉庫等の建物群とともに、加茂遺跡北東域における建物群の主要構成域にあたるものと考えられる。（土屋宣雄）



調査区位置図 (S=1/2,500)



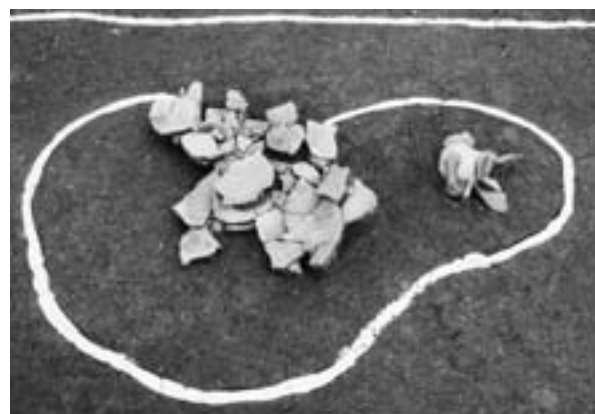
調査区全景（第2面：東から（河北潟方向を望む））



第1面完掘状況



第2面完掘状況



遺物出土状況



柱根出土状況

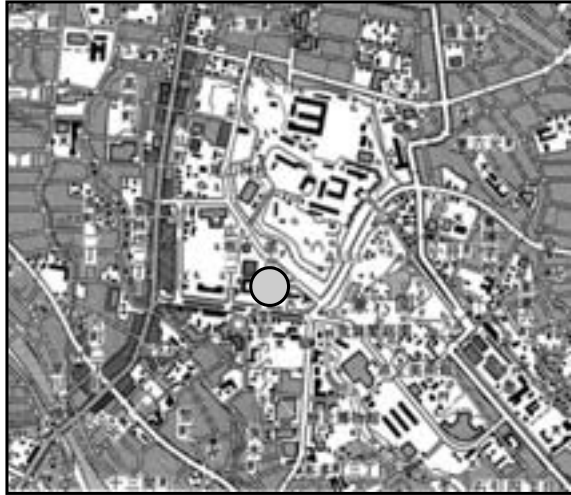
金 沢 城 跡 （ 県 庁 跡 地 ）

所 在 地 金沢市広坂2丁目地内

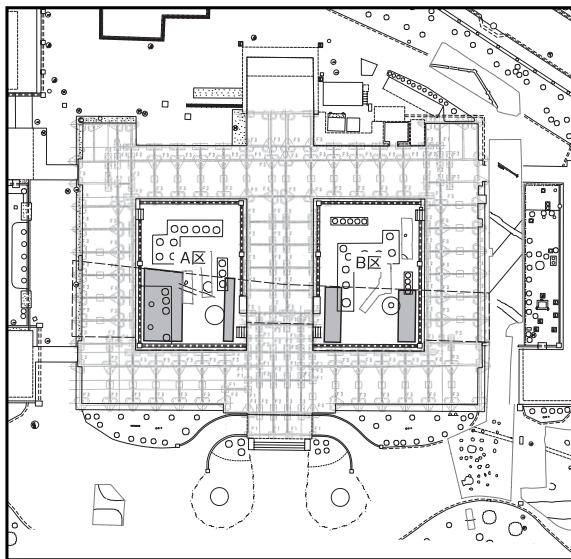
調査面積 600㎡

調査期間 平成19年5月7日～同年6月29日

調査担当 林 大智 森 由佳



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図 (S=1/1,500)

金沢城跡は金沢市街地を流れる犀川と浅野川に挟まれた小立野台地の先端に築かれた平山城で、加賀藩前田氏累代の居城として著名である。

発掘調査は都心地区整備推進事業として行われる旧県庁舎北側部分の解体と同南ブロック整備等工事を調査原因とし、庁舎が残存する平成19(2007)年度には中庭部分を対象に600㎡の調査を実施した。

県庁跡地の周辺は、絵図や文献等の研究成果により江戸時代前期頃から「堂形」と呼ばれる加賀藩の蔵屋敷地となっていたことが判明している。

このことを裏付けるように、県庁跡地周辺で実施された既往の調査では、堂形入口部の番所及びその付属施設、米蔵の基礎と考えられる大規模な礎石、そして江戸時代前期の整地層からは焼土と共に多数の炭化米などが確認されている。

今回の調査では、江戸時代前期、江戸時代初期～中世、古代の遺構面を確認した。

大規模な盛土等により造成された江戸時代前期遺構面では、大型礎石、土坑等の遺構を検出した。この礎石は既往の調査で確認された礎石との位置関係等から、米蔵の基礎であった可能性が高い。

また、古代の遺構面では竪穴建物や畝溝等の遺構を確認し、調査地の南側に近接する「広坂廃寺」とほぼ同時期の集落跡が県庁跡地付近まで拡がることが明らかとなった。 (林 大智)



A区 大型礎石検出状況



A区 古代面完掘状況

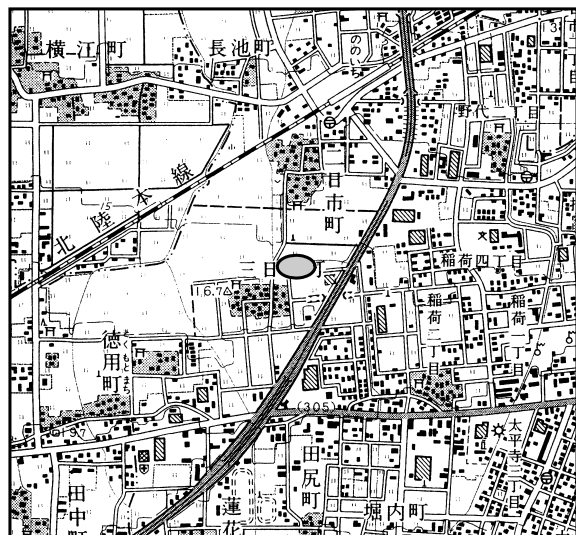
三日市 A 遺 跡

所 在 地 石川郡野々市町三日市町地内

調査期間 平成19年8月20日～同年9月18日

調査面積 490m²

調査担当 安中哲徳 山下陽介



遺跡位置図 (S=1/25,000)

三日市 A 遺跡は、野々市町北西部の水田中に位置し、手取扇状地の扇中央部と扇端部の挟間に立地する弥生時代～中世までの集落遺跡である。

近年、野々市町の区画整理事業に伴う発掘調査が町教育委員会により継続的に行われており、掘立柱建物や竪穴状遺構、井戸、畑の畝溝などのほか、古代北陸道も確認されている。

県の調査は、広域基幹改修事業安原川を原因とし、昨年度は、中世の掘立柱建物や区画溝が確認され、土師器や珠洲焼、鉄滓などが出土している。

今年度の調査区は、国道8号線方面から西側方向に流れる馬場川（郷用水）を挟み、町教育委員会の調査区と隣接しており、川に沿った東西方向に横長なものとなっている。

調査の結果、遺跡の上面は後世の耕地整理により大きく削平されていたが、奈良・平安時代頃の東西方向や南北方向に延びる浅い溝、中世以降と考えられる土坑、小穴のほか、馬場川の旧流路などが検出され、土師器や須恵器、陶磁器などの遺物が出土した。東西方向に延びる溝は、以前確認された古代北陸道の道路側溝延長部分に当たる可能性も考えられたが、今回の狭長な調査区内だけでは判断がつかなかった。

河川改修事業に伴う発掘調査は、今後も行われる予定であり、町の調査成果とともに遺跡の位置づけを行っていく必要がある。（安中哲徳）



調査区全景（南から）



遺跡遠景（南東から）



調査区の完掘状況（東から）

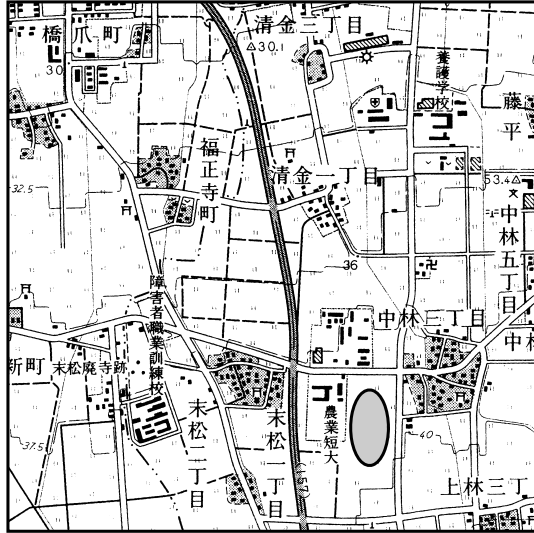


土坑の完掘状況（東から）

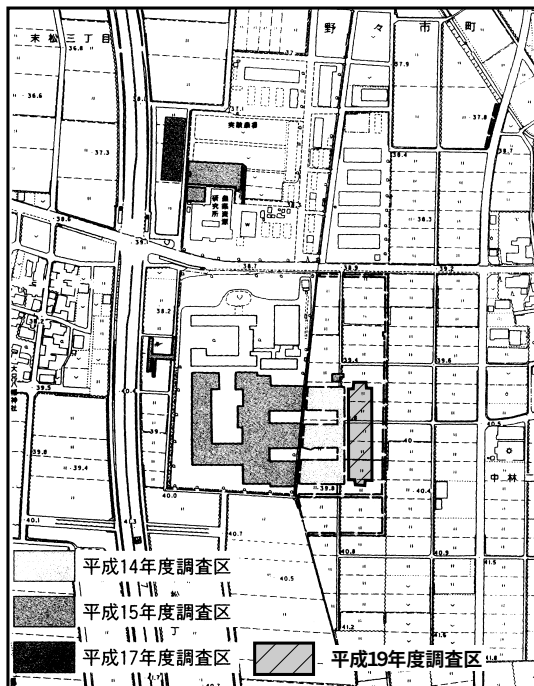
末松遺跡

所在地 石川郡野々市中林2丁目地内
調査面積 2,300㎡

調査期間 平成19年4月24日～同年8月24日
調査担当 安中哲徳 山下陽介



遺跡位置図 (S=1/25,000)



調査区位置図

調査成果の要点

- ・遺跡は、手取川扇状地の扇央部に立地。
- ・古墳時代終末期の竪穴状遺構に切られる円形の周溝状遺構を検出。
- ・古代・中世の集落跡を確認。
- ・古代の灌漑用排水路、畑の畝溝などを検出。
- ・土師器や須恵器、打製石鏃などが出土。

末松遺跡は、野々市中林南部に位置する石川県立大学の敷地とその周辺に所在し、手取川扇状地の扇央部に立地する集落遺跡である。

過去にも鶴来バイパス建設や県営ほ場整備関連事業に伴う発掘調査が行われ、平成14年度からは、県立大学整備工事関連の調査が行われている。

これまでの発掘調査により、7世紀後半から10世紀半ばにかけての竪穴建物や掘立柱建物、土坑のほか、古代の道と畑が計画的に配置されていたことが確認されている。

今年度の調査は、石川県立大学大学院棟建設を原因とし、現校舎東側部分が対象となった。

調査の結果、遺構の多くは標高約38～39m代の遺構面で確認し、調査区北側では直径約15mの円形に巡る周溝状遺構を検出した。遺物の出土が無く、遺構の時期は不明であるが、溝は7世紀頃の須恵器が出土した竪穴状遺構に切られており、弥生時代から古墳時代にかけての墳墓周溝の可能性が高いと考えている。後世の削平により墳丘盛土は確認されていない。

ほかにも調査区北側を中心に、古代の掘立柱建物柱穴や道路側溝と考えられる溝、畑の畝溝、土

坑、中世以降の集石状遺構などを確認し、土師器や須恵器、珠洲焼、打製石鏃などの遺物が出土した。

特に、南北方向約100mの調査区を縦断して見つかった、上幅約2～2.5m、深さ約0.6～0.8mの人工的に逆台形に掘られた溝からは、平安時代の土師器皿が数枚重なった状態で出土した。調査中は溝の覆土に石が多く混じっていることから掘削に手間と時間がかかったが、当時の人々は礫層の地面を掘り抜いている場所も多くあり、大変な労力であったと思われる。この溝は、古代の灌漑用排水路と考えているが、条里溝の可能性も視野に入れながら今後の整理を行っていききたい。(安中哲徳)



調査区北側完掘状況（南西から）



調査区南側完掘状況（北西から）



周溝状遺構完掘状況（西から）



竪穴状遺構完掘状況（南東から）



集石状土坑検出状況（東から）



溝の掘削作業風景（北から）



土師器皿出土状況（西から）



溝完掘状況（南から）

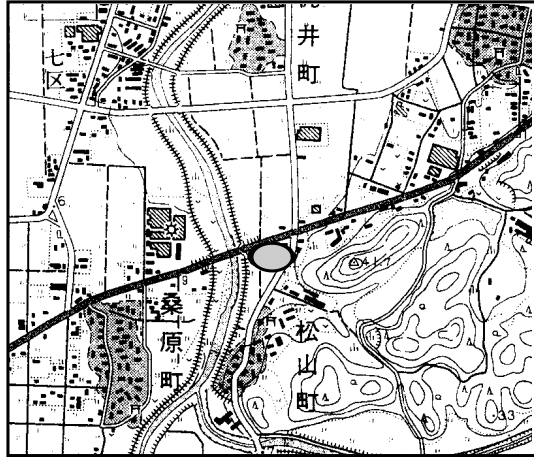
松 山 D 遺 跡

所 在 地 加賀市松山町地内

調査期間 平成19年4月20日～同年8月8日

調査面積 2,030㎡

調査担当 夷藤 明 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

- ・遺跡は加賀市北東部を北流する動橋川右岸に立地する。
- ・弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の遺構・遺物を確認した。
- ・弥生時代では掘立柱建物・土坑・溝、古墳時代では円墳、平安時代では掘立柱建物・土坑、中世では溝を検出した。
- ・東から西へと地形の高い所から低い所へと遺跡が広がっていく状況を確認できた。

遺跡は加賀市北東部を北流する動橋川右岸に立地し、国道8号の松山交差点の近くに位置する。周辺の遺跡では、遺跡南東部の丘陵上にある松山古墳群・松山城跡・松山焼窯跡や、「米」と書かれた多量の墨書土器が出土した松山C遺跡などがある。

調査区東半部を中心に弥生時代の掘立柱建物・土坑・溝を検出した。掘立柱建物は10棟程度確認し、1間×1間や1間×2間の規模のものを主体としている。プランの重なりから建て替えの行われていた可能性が高い。土坑からは土器が多量に出土しており、個体のまとまりが不明確であることから廃棄土坑の性格を考えている。溝は南北に伸び、北に流路を向け、溝底で砂質土の堆積を確認した。後期の甕・高杯などが出土している。

調査区中央部で円墳を2基検出した。円墳の主体部は削平されており、周溝のみが残っていた。規模はいずれも径12mほどで、6世紀後半から7世紀前半にかけての須恵器が出土した。円墳1の溝底からは完形の小型壺が1点出土しており、円墳2から西に20m離れた地点では須恵質の円筒埴輪片が2点出土している。

調査区中央部から西端部で平安時代の掘立柱建物・土坑を検出した。掘立柱建物は1間×5間の規模を1棟確認している。上層から須恵器が出土したが、埋土はしまりの弱い灰褐色系の砂質土で他の遺構の埋土と比べて新しい印象を受けることから、さらに時期の下る可能性がある。土坑には2m×1.5mの隅丸長方形を呈する焼土坑があり、底面が平坦に整えられていることから墓の可能性もある。他には土師器・須恵器が多量に出土した不整形な浅い土坑を確認した。

調査区西端部で中世の溝を検出した。溝の西側には規則的な杭列の痕跡が確認でき、加工した杭や割られた石が一ヶ所にまとまって廃棄されていた。

以上のことから、動橋川右岸において弥生時代から中世にかけて連続して遺跡が形成されていたことが明らかとなり、地形の高い所から低い所へと遺跡が広がっていく状況を確認できた。

(谷内明央)



弥生時代の溝（南から）



弥生土器出土状況（東から）



円墳1（西から）



須恵器出土状況（東から）



円墳2（北東から）



須恵器出土状況（東から）



平安時代の土坑（北から）



中世の溝（北東から）

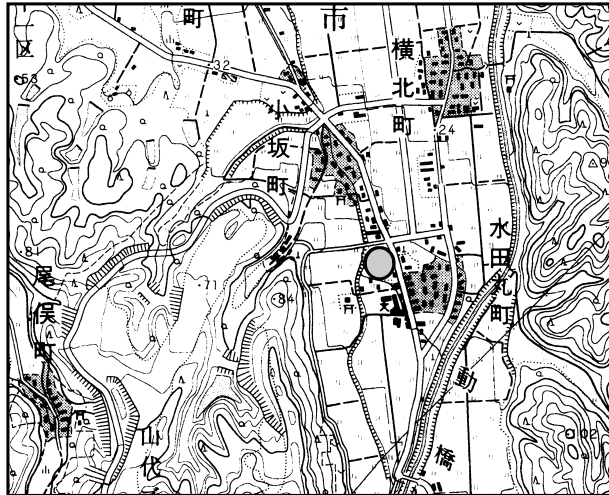
水田丸遺跡

所在地 加賀市水田丸町地内

調査面積 450m²

調査期間 平成19年5月1日～同年6月8日

調査担当 土屋宣雄 宮川勝次



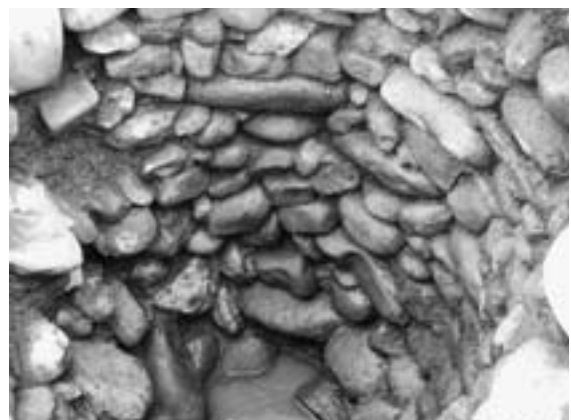
遺跡位置図 (S=1/25,000)



完掘状況 (南から)



井戸跡



井戸跡内部

水田丸遺跡は加賀市の南東部、水田丸町地内に所在し、市内を流れる動橋川中流域左岸に位置する。今回の調査は主要地方道山中伊切線緊急地方道路整備事業に係り、昨年度に引き続き実施したものであり、14～16世紀代の遺構・遺物を確認した。

遺構は2×2間以上規模と考えられる掘立柱建物や井戸跡、竪穴状遺構などを主に確認した。井戸跡は6基を数え、そのうち5基は素掘りもしくは井戸側の残欠と思われる石が認められるものであり、残る1基は石組の遺存が良く、規模は直径70cm、深さ2m以上である。使用されている自然石は長さ10～40cmを測り、最上部に大型の石を配置し、その下方は横長の石を要所に置いて、その上下に方形や円形の石の平坦面を内側にむけた状態で、整然と組まれている。遺物は越前焼、加賀焼、珠洲焼の甕、播鉢類が圧倒的に多く、なかでも越前、加賀焼が多数を占めており、その中心は15・16世紀代である。また、土師器皿（灯明痕が認められるものもある）、青磁、古銭、石臼、フイゴの羽口、鉄滓も出土している。

(宮川勝次)

平成19（2007）年度上半期の遺物整理作業

第1班

上半期は、作業期間の短い大川遺跡（小松市、平成18年度調査）の遺構図トレース作業を終えてから、白江梯川遺跡（小松市、平成14年度調査）の整理作業に入った。

白江梯川遺跡では、はじめに土器および石器の記名・分類・接合作業および実測・トレースの作業を行った。その後は、木器の整理作業に移り、小型から大型まで約2,000点の基本計測と作業用の写真撮影を行ったが、作業にかかわる収納箱の出し入れ、木器の種類分けなど、重くて細かい作業には、予想以上の労力を要した。実際には1ヶ月間の作業となったが、精神的には2～3ヶ月を要したような思いがあった。その中には小型の農具、大型の船形製品など物珍しい遺物もあり、保存の状態も良いことから、工具による加工痕の残る資料もかなり含まれていた。

つづく実測では、大型製品を1/2縮尺で実測をするという、私にとっては初めての方法で行うこととなり、慣れるまでには大変な作業となった。大型の船形製品を実測した事が無い私にとって、大変プラスになったと感じている。（林かおる）

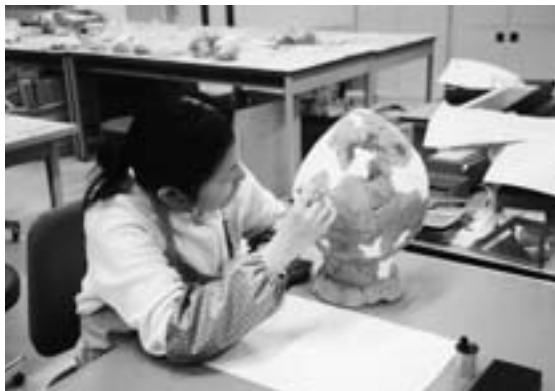


写真1 土器の実測作業



写真2 木器実測前の洗浄

第2班

この上半期では、飯田町遺跡（珠洲市、平成16年度調査）の木器実測から開始したが、井戸側に使用された木桶は、梓板とタガの朽ち方が激しく、その組み立てに苦勞したことから実測に手間を要した。

続く栄町遺跡（七尾市、平成16・17年度調査）の整理作業では、完形の耳皿を見ることができた。古代の須恵器を中心にして、弥生土器や木器などを実測したが、製塩土器の底部片には、内面整形の刷毛痕が強く残る土器が多く、強い興味を抱かせる資料であった。

次の若緑ヒラノ遺跡（かほく市、平成18年度調査）では、八日市新保式を中心とした縄文土器が多く、山形三叉文やI字状文が見られ、鳥形の須恵器片も大変珍しく感じられるものであった。

（山口 桂）



写真3 須恵器の実測

第3班

上半期は、国分遺跡(七尾市、平成8～11年調査)の記名・分類・接合から、出土品の実測・トレース作業を経て、遺構図トレースまでの作業を実施した。続いて、太田A遺跡(羽咋市、平成15・18年度調査)の記名作業から、実測・トレース・遺構図トレースまでの整理を行い、続いて、金沢城跡(金沢市、平成16年度調査)の記名・分類・接合までの整理作業を行った。

国分遺跡では、古墳時代の大型の甕や壺、高坏などの破片が大量にあり、久々に接合作業に力が入った。金沢城跡では、城内に位置した東照宮に葺かれていたとみられる石瓦の接合作業には、時間と根気を要した。
(松田智恵子)



写真4 国分遺跡の接合作業



写真5 金沢城跡の石瓦整理

第4班

上半期では、水田丸遺跡(加賀市、平成18年度調査)、宿神社前遺跡(珠洲市、平成18年度調査)の記名・分類・接合作業および実測・トレース作業、七尾城跡(七尾市、平成18年度調査)の記名・分類・接合作業を行った。

水田丸遺跡と宿神社前遺跡は、ともに出土品の点数が少なく短期間の作業となったが、宿神社前遺跡は少ない中にも、縄文土器から古代の土師器や須恵器、中世の珠洲焼に漆器、唐津焼や石器など、その製品構成は大変バラエティーに富んだ遺跡であった。

七尾城跡は、戦国時代の城下町ということで、大量の土師器皿に陶磁器類の製品、金属加工の埴塙や甕の羽口などを分類・接合したが、短期間の作業とすることから、他の整理班でも同時期に並行して行ったため、接合作業においては、二班が入り混じって陶片を探す風景もみられ、混雑した作業となった。とくに染物の容器とみられる越前焼の大甕では、大量の破片からの接合・復元となり、個体数の確定や陶片の移動など、重さも加わって、その接合作業は大変なものであった。

(西川朗聖)



写真6 七尾城跡の接合作業



写真7 七尾城跡の分類作業

第5班

平成19年度の上半期は、粟津小学校遺跡（珠洲市、平成17年度調査）の2～4区の分類、接合、実測作業を行った。12～13世紀の土師器皿が多く出土していたが、小皿に混ざって大きな台付きの灯明皿（灯明台カ）もみられ、高坏の脚部を思わせるように、中央部に穴の空いている土器もあり、器台なのか高坏なのか判断に苦しむ製品もあった。珠洲焼の製品では、鉢が多く有り、そのなかでも珍しい出土品として分銅形があった。2点出土していたが、いずれも欠損部分が多くて、全形が不明となった事が残念だった。

また大きな珪藻土の泥岩ブロックは、井戸側に使用された7点があり、実測に入る前には、表面に付着しているカビを落とす作業から始まった。屋外へ運び出し、マスクをかけてアルコールを吹き付ける除菌作業は大変だった。遺物をカビから守る何か良い方法は、無いだろうかと考えてしまった。

なお、5月8日から約2週間、中川A遺跡（羽咋市、平成16・17年度調査）、太田ニシカワダ遺跡、太田ツツミダ遺跡（羽咋市、平成17年度調査）の実測作業を行った。古代の遺物が多かった。また、8月からは、金沢城跡の玉泉院丸跡、河北門跡（金沢市、平成16～18年度）の記名作業に入った。記名した整理箱335箱の中身は、大量の瓦類で、重い箱を毎日のように動かすのも大変な作業であった。

（黒田和子）



写真8 石器の除菌作業

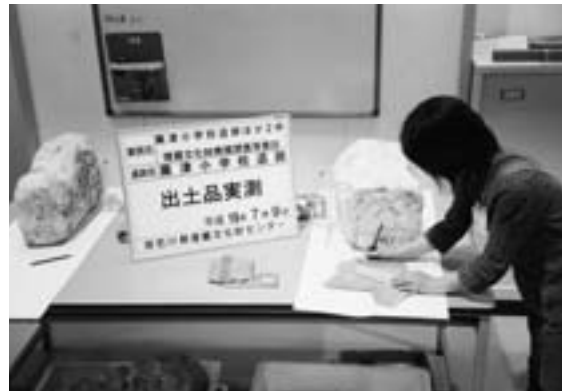


写真9 石器の実測作業

第6班

平成19年度の上半期は、七尾城跡（七尾市、平成17年度調査）の記名、分類、接合の作業から着手した。ほぼ同時期に三班による整理作業を進行したことから、各班入り乱れ（？）で、広範な出土品を対象とする接合作業となった。

戦国時代の城下町の遺構から、土師器や陶磁器類、土製品等の他、鍛冶屋と鋳物関連の存在を裏付ける轆の羽口、鉄滓、埴塼が多量に出土していた。とくに溶けた金が付着した埴塼の出土や、茶の湯の隆盛に伴い、珍重された中国天目と和物との価格差などを考えると、この地域での経済力の大きさが実感できた。

次に金沢城跡（金沢市、平成17年度調査）は、その殆どが瓦の分類・接合とその実測作業で、良く似た破片が多く、予想より接合の成果を上げることは出来なかった。

上半期の最後は、竹生野フルヤシキ遺跡（宝達志水町、昭和62年度調査）で、古代の浅い溝と中世の遺構や包含層からの出土品が主であった。16世紀前半に造られた石臼は、掘り面の高い使用頻度のため、形が崩れてしまった挽木孔があり、数回の目立ての痕も残っていて、激しく使われてきた石臼の「働きぶり」を図面に表現した。

（新谷由子）



写真10 七尾城跡の接合作業



写真11 金沢城跡の分類作業

第7班

上半期は、七尾城跡（七尾市 平成17年度調査）の遺物40箱の記名・分類・接合と、木器の実測・トレース作業を行った。遺物は土師器、中近世の陶磁器が大半を占め、中でもサイコロ型の土製品の多さと炭化米の出土が、印象的であった。木器は、木簡・絵馬等、特に金箔貼り板材は水から出さず、動かさず、触れずに実測図を作成するという特筆すべきものであった。

5月半ばより製塩遺跡の大谷中学校東遺跡（珠洲市、平成18年度調査）の整理作業に入ったが、小さい破片がぎっしりと詰まったパンケース63箱の記名作業に、予想以上の時間を費やし苦戦した。製塩土器を中心に古代の土師器、須恵器が出土していた。製塩土器の大半が棒状尖底で、平底形態はほとんど見られず、下層では倒盃型の底部片が出土していた。製塩土器は、体部の器壁が非常に薄いため、接合に困難を要した。普通、製塩土器の接合は形になりにくいと言われているが、この遺跡に関しては、もう少し接合の時間が欲しいという個人的な思いが強く残った。



写真12 木製農具の実測

次の、国分遺跡・国分B遺跡（七尾市、平成16年度調査）の整理作業に入った。小鍛冶による鉄滓が多く、土製カマドの個体数の多さも目立ったが、形になる物は数点であった。また小片で、ややもすれば見逃してしまいそうな感じで、製塩土器の破片も見られた。

本遺跡の整理作業は下半期も続き、少人数で欠員等も生じたが、班員の頑張りで上半期を予定通り進める事ができ感謝している。（馬場正子）

復元班

上半期の復元は、7遺跡程度の作業である。全般的には小型品が多く、中型、大型などは数が少なくなってきた。器種は、カメ、ツボ、高坏、甗、土師皿など多種多様であった。口縁から底部までの破片があっても、接合していくと接点のない場合もある。そのような時は、実測図を参照しながら、推定される高さや大きさに作っていくこともある。毎日が接着剤と石膏との戦いである。

（前田すみ子）

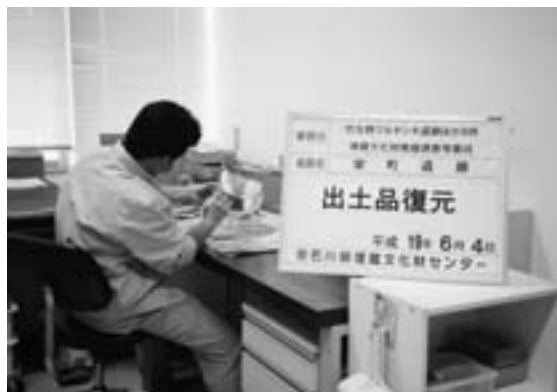


写真13 栄町遺跡の復元



写真14 白江梯川遺跡の復元

洗浄班

上半期では、七尾城跡（七尾市、平成18年度調査）、竹生野フルヤシキ遺跡（宝達志水町、昭和62年度調査）、畝田・寺中遺跡（金沢市、平成18年度調査）、金沢城跡（金沢市、平成18・19年度調査）など、全部で4遺跡の洗浄・乾燥作業を行った。

七尾城跡の出土品は、珠洲焼大甕の破片がかなり多かったほか、陶磁器、埴塼、土師器皿などもあった。竹生野フルヤシキ遺跡は、砂層からの出土であったために、土が落ちやすく順調に作業が進んだ。しかし、次の畝田・寺中遺跡では90箱の大量の土器と大小8点の井戸枠の洗浄を行ったが、かなり大変であった。それは、形が保たれたまま出土した曲物の洗浄は初めての経験で、その上、現場で取り上げてから洗浄作業に入るまでに付着した土が乾燥し、カビが発生していたためである。水をかけて土を緩ませ、少しずつ竹串で起こしてブラシで洗っていくのだが、土を取り除くことで、巻きつけてあるタガの結束部分が緩み、ずれ落ちる。カビの発生範囲もかなり広く、曲物の形を保ちながらの作業はかなり困難であった。しかしながら、とても貴重な体験でもあった。また、金沢城跡では、瓦の洗浄が大半であったが、同時期に二つの城跡の作業を行ったことも印象深いものとなった。

（竹内秋子）



写真15 土器類の洗浄



写真16 木製品の洗浄

環日本海交流史研究集会の記録

「日本海域における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—」

はじめに

所長 谷内尾 晋司

石川県は、日本列島日本海沿岸のほぼ中央部に位置することから、古くから海を媒介とした東西交流の場、結節点としての役割を果たして参りました。また、日本海沿海域各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次でおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、沿海域各地の調査機関の皆様呼びかけ、平成12年度より、「交流史研究集会」を開催しているところであります。また、平成19年度年度は「古代のまつり」を事業の柱とした各種の講座や体験学習など実施しているところであり、今回の研究集会は「日本海域における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—」をテーマに開催しました。

奈良・平安時代を中心とした古代の祭祀は、律令の規定によって定められているものが多く、都を中心に共通の祭祀体系が存在したと考えられていますが、一方、地方における祭祀については、まだまだ不明な点が多いのが現状であります。こうした中、兵庫県の袴狭遺跡、石川県の小島西遺跡、富山県の北高木遺跡、秋田県俵田遺跡など、近年日本海域において、木製祭祀具を主体とした祭祀遺物を多数出土する遺跡が相次いで調査され、各地域での多様な祭祀の様相が明らかにされつつあります。

こうした状況をふまえ、今回の集会は、日本海側の遺跡で発見されている木製祭祀具を中心に、祭祀遺物の出土状況や祭祀の場、祭祀の在り方などの地域的特色を比較し、その実態や本質を考える場となればと考え、開催いたしました。九州は福岡市教育委員会の菅波正人さん、山陰は島根県埋蔵文化財センターの松尾充晶さん、兵庫県立博物館の中村 弘さん、北陸は石川県埋蔵文化財センターの大西 顕さん、金沢市埋蔵文化財センターの向井裕知さん、富山市埋蔵文化財センターの堀沢祐一さん、胎内市教育委員会の水澤幸一さん、東北は秋田城跡調査事務所の伊藤武士さん、青森市市教育委員会の木村淳一さんにお越し、各地域の状況についてご報告いただきました。

国府、郡衙をはじめとした官衙遺跡での祭祀、寺院・神社など宗教関連遺跡での祭祀、官道沿いや水上交通の要衝（駅・津など）、境界域での祭祀、集落での祭祀など、様々な場での祭祀について、これらに用いられた遺物を中心にして討議されました。地域的特色や共通性など、多岐にわたる問題や課題について、相互理解を深めることが出来たことは大変有意義でありました。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年1回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地での域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。

日本海域における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として—（九州地方）

菅波 正人（福岡市教育委員会）

1. はじめに

九州地方の古代の祭祀については、宗像市沖ノ島祭祀遺跡や太宰府市宝満山祭祀遺跡などが知られるが、官衙周辺での祭祀の様相が分かる例は多くない。本報告では九州地方の古代の木製祭祀具について、大宰府及びその周辺地域での事例を中心に概観していきたい。

2. 事例報告

1) 大宰府政庁とその周辺

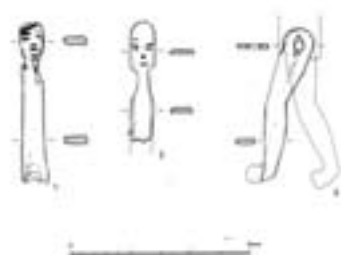
大宰府政庁が位置する場所は、周囲を大野城、基肆城といった山城で囲み、博多湾に面した平野側には水城を築き、外敵からの侵入を防ぐものであった。さて、大宰府において、木製祭祀具の出土例は政庁南門の前面で若干のまとまりが見られる。政庁前面西側の不丁官衙地区と呼ばれる場所で検出された南北溝 SD2340では、8世紀前半の人形が出土している。また、この溝に平行する南北溝 SD320では8世紀後半の斎串、刀形、琴柱形、陽物形の木製品が出土している。この場所は水城にある東西2つの門のうち、東門を貫ける官道との合流部分にあたり、これらの木製祭祀具は官道を通じて入る穢れ等を祓う儀式で使用されたものと考えられる。大宰府においては木製祭祀具の出土例は多くないが、その形態や出土する場所には平城京や平安京などに共通性が認められる。

大宰府からは水城の東門から貫けるルート（大宰府路）と西門から貫けるルート（壱岐、対馬路）の二つの官道が延びている。その内、東門から貫ける官道の最初の駅となる久爾駅の推定地付近にあたる高畑遺跡では8世紀前半から10世紀の遺構から人形、斎串、舟形、鳥形、刀形、陽物形、絵馬の他、人面墨書土器等が出土している。大宰府周辺では人面墨書土器はこの地域に集中しており、福岡市井相田遺跡、大野城市仲島遺跡等で出土している。また、大宰府より北西に流れる御笠川の右岸にあたる、雀居遺跡や下月隈C遺跡でも8世紀～9世紀の人形や鳥形、斎串等が多数出土しており、この川の流域に祭祀の場があったと考えられる。これらは水城の外側の位置する官道や河川に隣接する遺跡で、大宰府に入る穢れ等を祓う祭祀の場所であったと推測される。

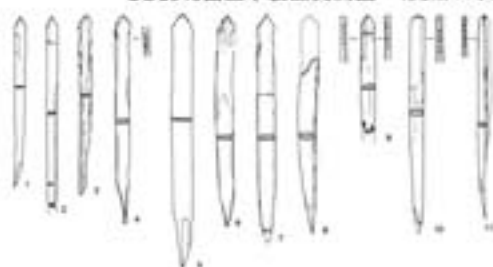
元岡・桑原遺跡群は福岡市の西端にあたり、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯にある。ここでは祭祀に関わる木簡と関連遺物が出土した。「解除」銘の木簡に記された「人方、馬方、弓、矢、酒、米」等の品目は大祓の祓具にも共通する一方で、「水船、五色物、赤玉、立志玉、栗木、□木」等は都城の祓具にないものも含まれる。また、20次調査で出土した人形、弓、矢、舟形等は「解除」銘木簡にも見られるものであるが、丸木材を使用した舟形に見られる特徴は地方色が強いものである。木簡との関連を含めて、非常に興味深い。一方、「道塞」銘木簡は道の祭祀に関わるものと考えられ、博多湾に面した地理的状况から外国使節の来着を意識し、疫病等の侵入を防ぐための祭祀に使用された可能性が推測される。

3. おわりに

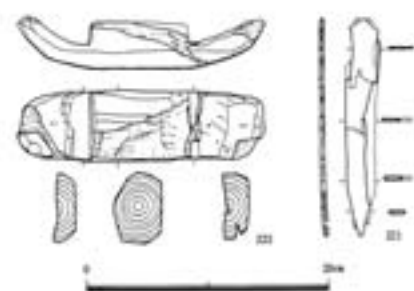
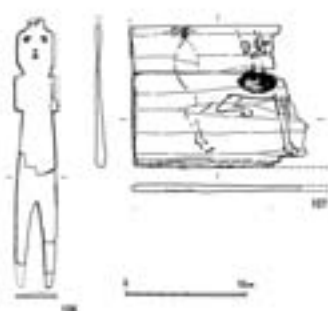
本報告では大宰府とその周辺地域の事例を見てきた。大宰府においては、政庁や水城の内側に入る前の官道沿いや河川といった場所で、人形や斎串、人面墨書土器を使用した祭祀を行う状況は平城京や平安京に共通するものと言えよう。一方、元岡・桑原遺跡でみられる木簡や木製祭祀具の様相は律令祭祀に共通するものと地方色の強いものが混在する状況にあり、大宰府とは異なる様相を窺うことができる。このことは地方への律令祭祀の展開を考える上で興味深い。



SD2340出土木製品実測図 (史跡85次)

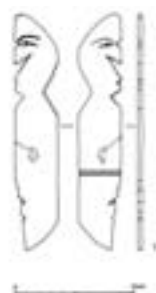


SD320出土木製品実測図 (史跡14次)

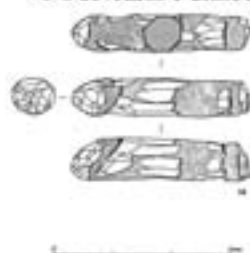


(福岡市井相田1次)

大宰府周辺出土の木製祭祀具



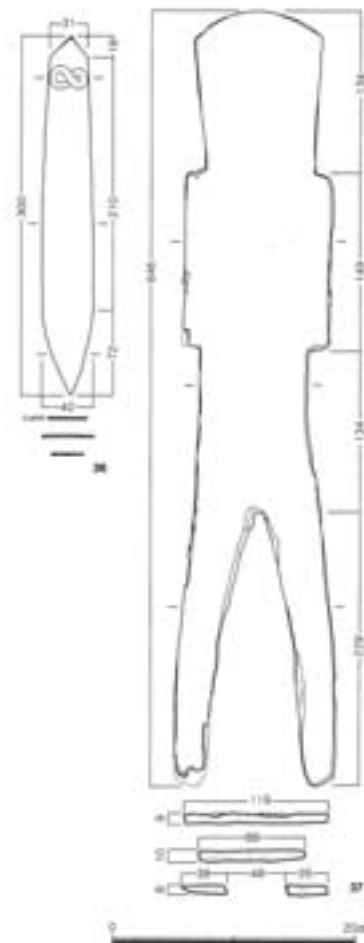
SD2340出土木製品実測図 (史跡87、90次)



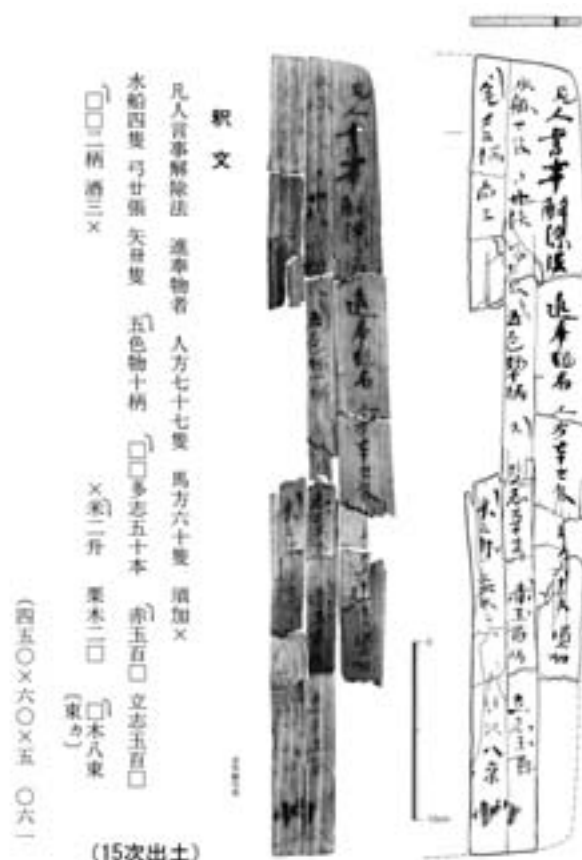
SD320出土木製品実測図 (史跡76次)

大宰府出土の木製祭祀具

(福岡市高畑17次)



(福岡市雀居12次)



(15次出土)



元岡・桑原遺跡出土木簡



元岡・桑原遺跡20次調査出土木製祭祀具

山陰地方における古代祭祀と木製祭祀具

松尾 充晶（鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

1. 山陰地方の概況

薄板状をなす定型的な木製祭祀具（特に形代類）について、山陰地方（鳥取県・島根県）の出土数は多くなく、かつ分布に地域的偏在が認められる。組成が人形・馬形など多種からなり、かつ複数一括廃棄されるという使用形態を示す出土事例は、山陰でも東側の因幡～伯耆東部地域にほぼ限られる。これらの地域においても、国衙の関与を示す資料などは現状で認められず、在地有力氏族層の介在により受容されていることがうかがえるものの、その使用状況は極めて限定的である。一方、伯耆西部以西および隠岐では、形代類が多種多量に使用されたことを示す事例は皆無であり、特に調査遺跡が比較的多い出雲では（遺存環境の制約ではなく）祭祀具の地域的な特質を反映している可能性がある。

2. 定型的な律令祭祀具を受容する地域（因幡～伯耆東部）

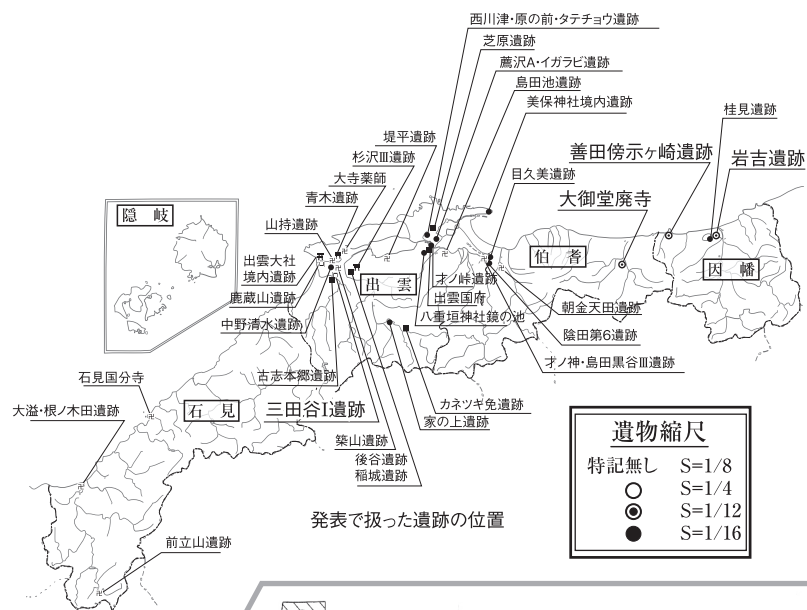
山陰を代表する初期寺院である大御堂廃寺（鳥取県倉吉市）では、8世紀中頃以前とされる一括資料が出土している。これは山陰地方における形代使用祭祀の出現時期に近い事例とみられ、いくつかの視点から注目される。1点は私寺建立の主体者となる有力氏族層周辺においてこうした定型的な祭祀が専有されていること、もう1点は木製形代を用いる祭祀の齋行が仏教施設でおこなわれており、混然とした思想構造の実態がうかがえること、さらにその年代が都城における律令期祭祀遺物の展開期にあたり、国家的祭祀体系の地方への拡散結果と理解しうること、などである。なお、因幡では善田傍々崎遺跡、岩吉遺跡（いずれも鳥取市）のように、多種多量の木製祭祀具がまとまって出土する遺跡が知られる。9世紀前半を中心とする岩吉遺跡では公的機能の存在を示す木簡や墨書土器などを伴って出土しており、おそらく郡レベルの地方官衙（関連）遺跡を拠点として、木製祭祀具を多量に使用する律令祭祀（祓除か？）が因幡地域に展開する様相を示す事例とみることができる。

3. 地域性を有し木製祭祀具の希薄な地域（伯耆西部以西、特に出雲）

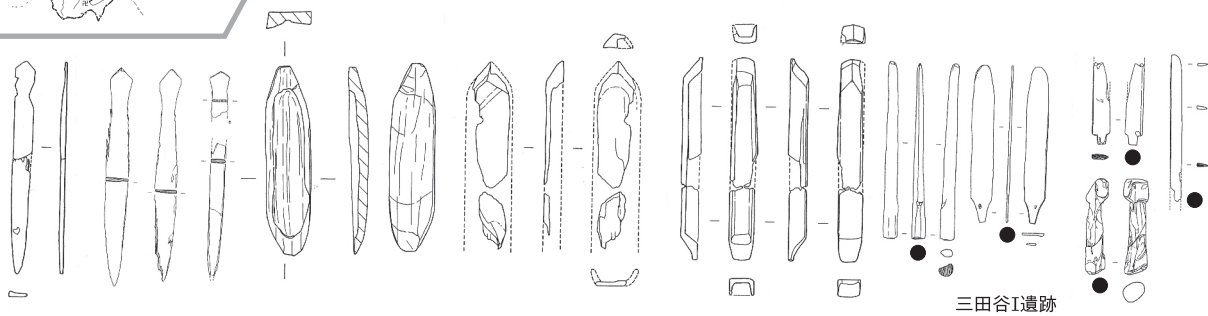
地方出土の律令期祭祀遺物には、都城での構成と共通点が多い一方で、地域によっては欠如するものや独自のものもみられる。広域な傾向について例をとれば、山陰地方は墨書人面土器や絵馬がほぼ皆無の地域（の一部）である。さらに小さな地域性として、伯耆西部以西では人形・馬形に代表される木製形代の使用が希薄である。特に出雲では、低湿地を含む平野部の遺跡調査事例が一定数あるにも関わらず（立体的な舟形が相対的に多い傾向はあるものの）、多量一括使用の事例が無い。出雲は官社制の進展、神社の建築化が早い時期に進んだ地域とみられており、令制国成立以後においても地域の神祇祭祀に出雲国造が強い影響を与えた。こうした在地での祭祀体系の強弱が、国衙等を介した律令的祭祀の浸透度合いに影響し、ひいては祭祀具・祓具の構成にも反映する場合があると考えられる。

4. 木製祭祀具の用途に関して

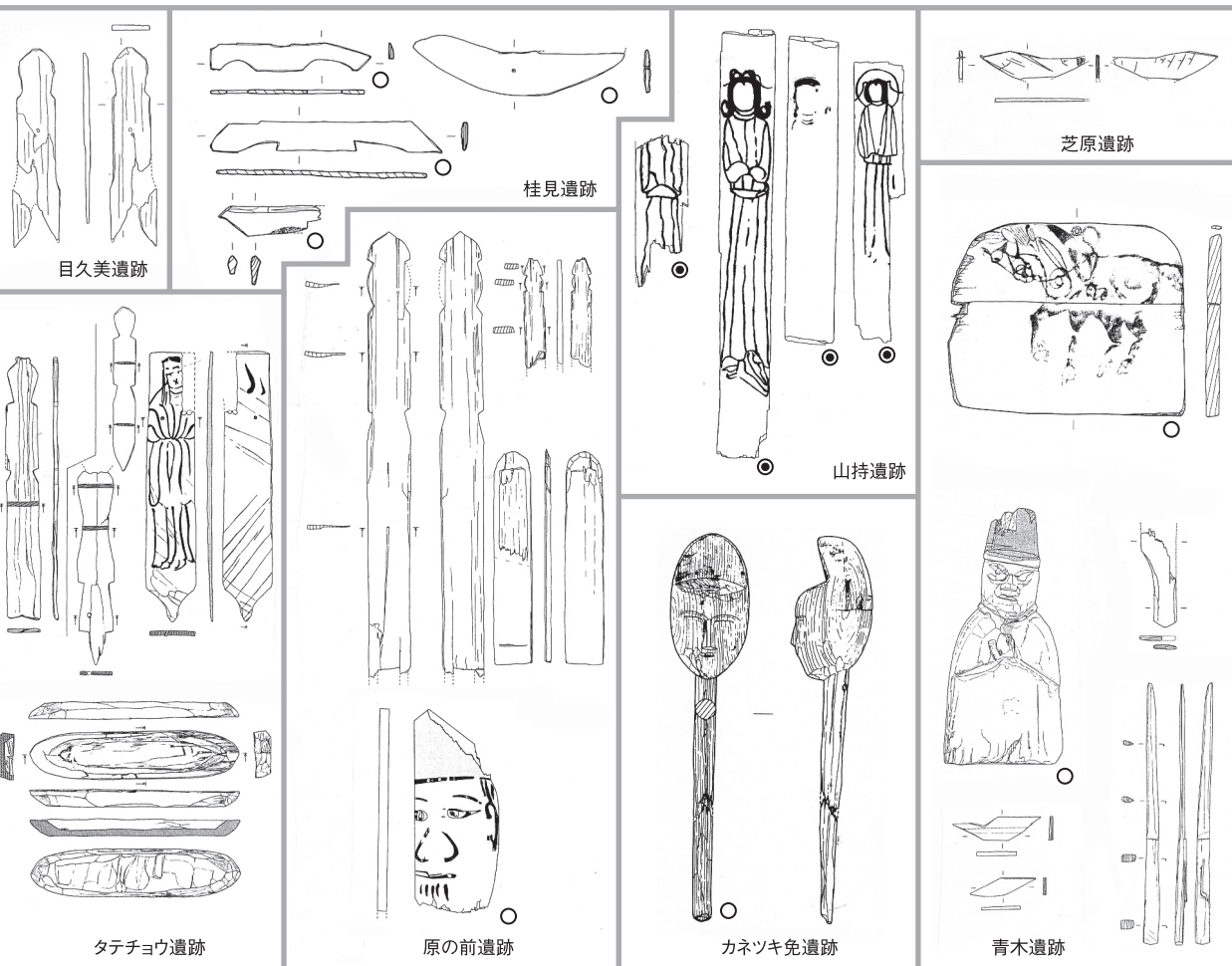
木製祭祀具の用途は必ずしもハラエに限定されない。その実例として、出雲国府で確認された8世紀中葉の祭祀土坑（大舎原地区5号土坑）が重要である。ここでは刀形・斎串がシカ頭骨や果実といった供物とともに土坑内に献ぜられていた。この祭祀の内容は儒教祭儀のひとつである「釈奠」である可能性が指摘されていて、その当否は置くとしても用途はハラエでない可能性が高い。木製祭祀具は廃棄原位置をとどめて出土することの少ない遺物であるが、ひとつの出土状況が端的に使用形態、ひいては用途と儀礼行為の内容を示す場合がある。それが小島西遺跡が重要たる所以でもある。

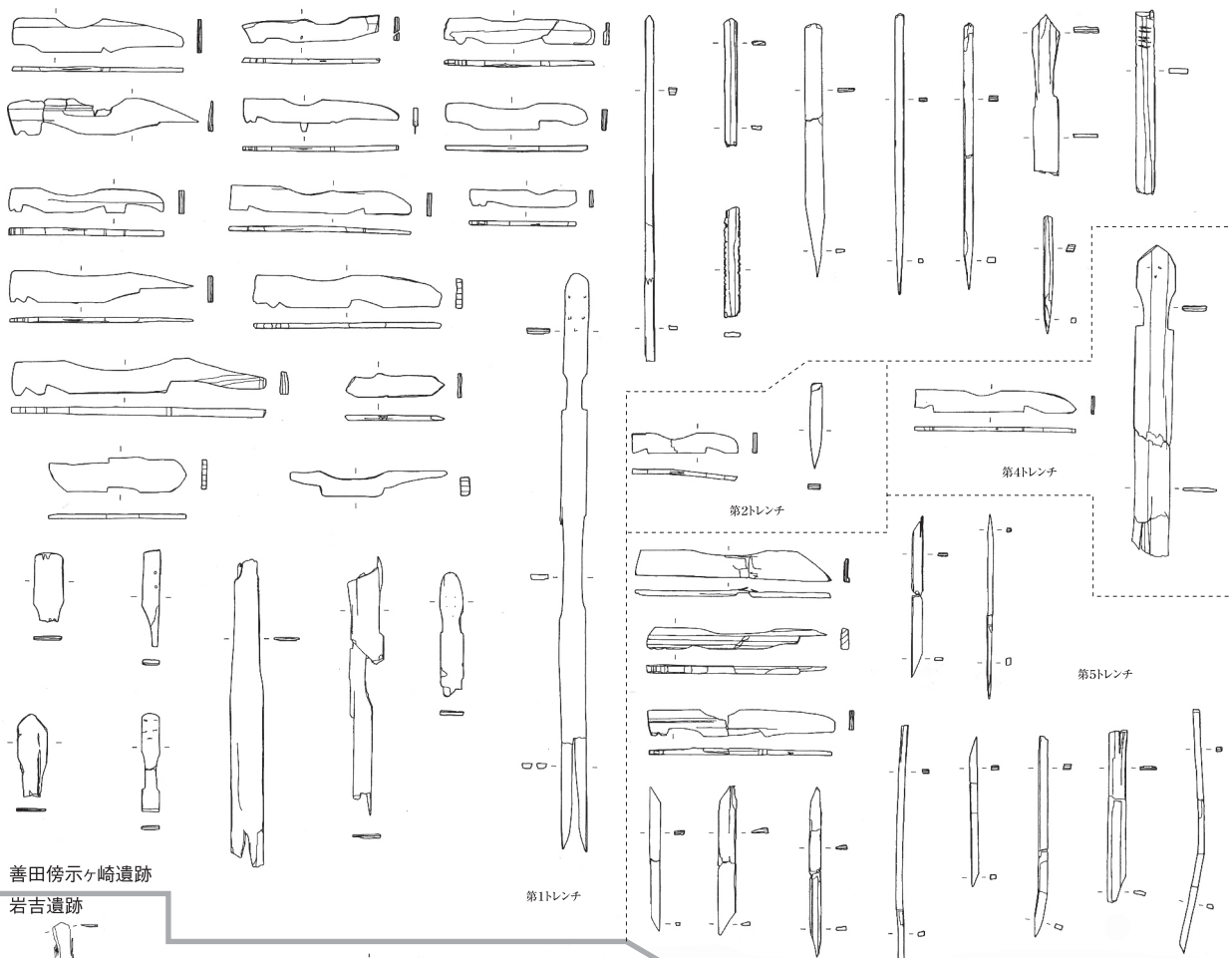


大御堂廃寺

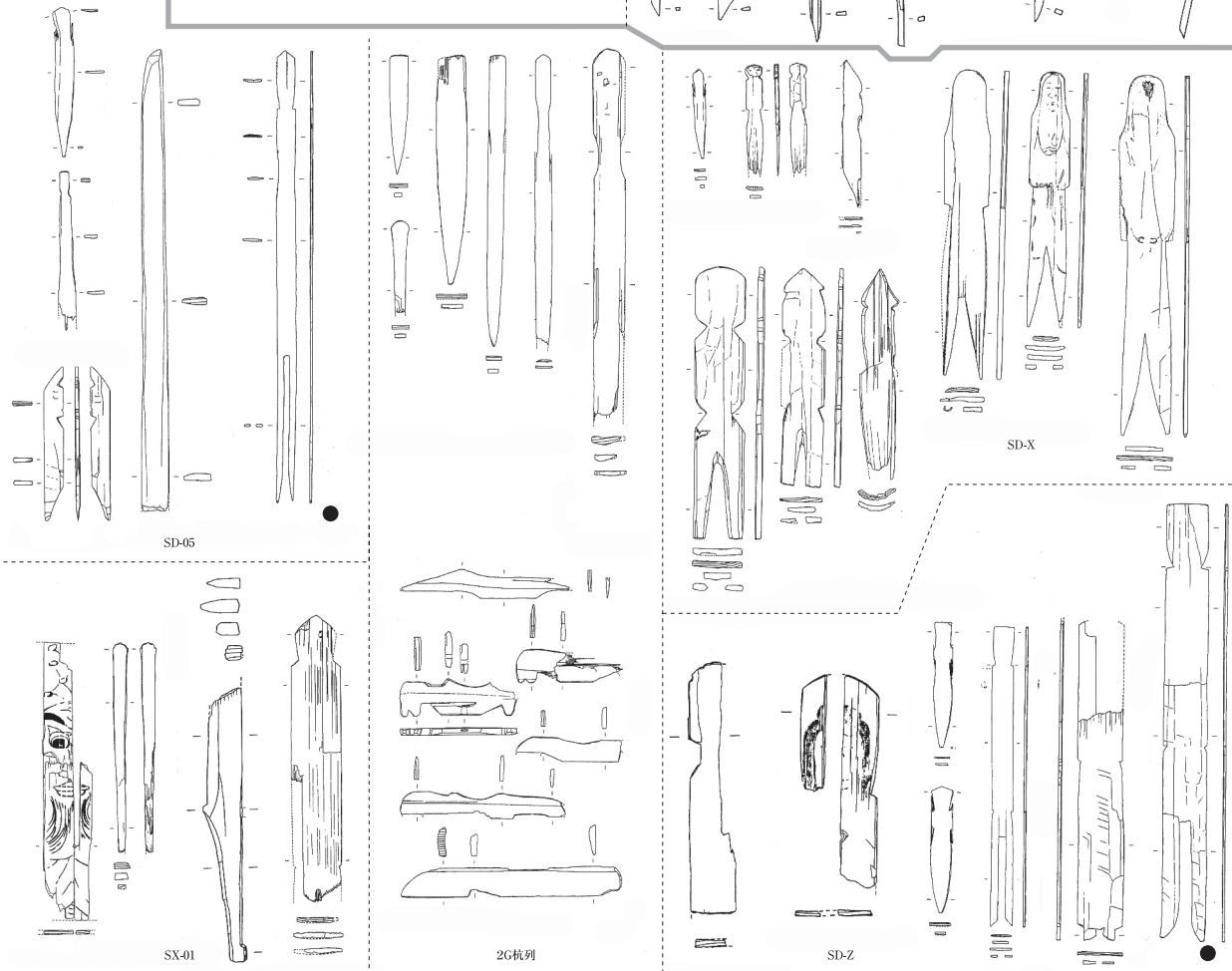


三田谷I遺跡





善田傍示ヶ崎遺跡
岩吉遺跡



袴狭遺跡群と兵庫県北部の木製祭祀具

中村 弘（兵庫県立考古博物館）

1. 遺跡概観

但馬地方において、律令期の木製祭祀具が出土した遺跡は17遺跡にのぼる。ほとんどが数点から数十点未満の出土数であるが、中には10,000点以上が出土した遺跡もある。遺跡の種類には国府・郡衙推定地およびその関連施設、寺があるが、性格が不明な遺跡からも点数が少ないが出土している。国府推定地である深田・カナゲ田遺跡や郡衙推定地では、中心部の状況が明らかではなく、周辺の湿地帯や、谷間をさかのぼった上流からの出土例が多い。寺では、国分寺の寺域を画する溝や、古代寺院からも出土している。

2. 袴狭遺跡群と木製祭祀具

但馬地方で最も多くの木製祭祀具が出土しているのが袴狭遺跡群で、形状のわかるものだけでも10,000点を超える木製祭祀具が出土している。他の出土品には木簡、墨書土器のほか、銅印、帯金具、石帯、銅鈴、銅鏡などがあり、出石郡衙および移転前の但馬国府であるという説もある。

砂入遺跡では、7世紀後半から8世紀前半の流路から大量の木製祭祀具が出土しており、袴狭遺跡群でもっとも古い。その後、8世紀後半から10世紀前半には杭や枝で敷き詰められた道路状の遺構が湿地に作られており、木製祭祀具がその上部の土坑や周辺からも大量に出土している。道路状遺構の長さは少なくとも70m以上に及び、どこまで延びるかは確認できていない。

袴狭遺跡では、8世紀中頃から9世紀初頭に掘立柱建物が検出されているが、調査区の制限もあり、整然とした建物群として復元されるには至っていない。主に木簡の検討から移転する以前の但馬国府（第一次国府）に関連する施設との説がある。9世紀前半から10世紀には礎石建物群が検出されており、出石郡衙関連施設と考えられている。荒木遺跡では7世紀末から8世紀前半の掘立柱建物が検出されており、袴狭遺跡以前の出石郡衙関連施設と考えられているが、木製祭祀具は出土していない。

次に、木製祭祀具であるが、もっとも豊富に出土している袴狭遺跡群では、以下のような木製祭祀具の型式変化が看守される。①組成の簡素化（舟、刀、剣、鋤や不明の形代が減少し、消滅する）、②人形の増加（斎串、馬形に比べて人形の割合が増える）、③規格化（人形、馬形、斎串の形が規格化する）、④写実化（人形、馬形が写実的になる）、⑤長大化（1.5～3倍のものが出てきて、多様化する）。

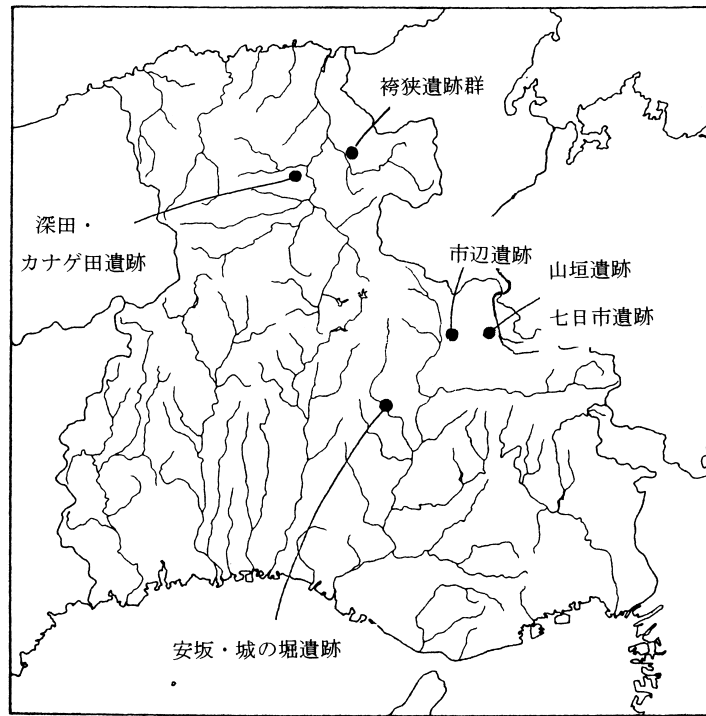
また出土場所では、上記の道路状遺構の他、ほとんどが水田土壌および溝からの出土で、中には柱穴に同一製作者による人形がまとまって置かれているものや、土坑、井戸内から出土したものもある。

3. 兵庫県北部での木製祭祀具

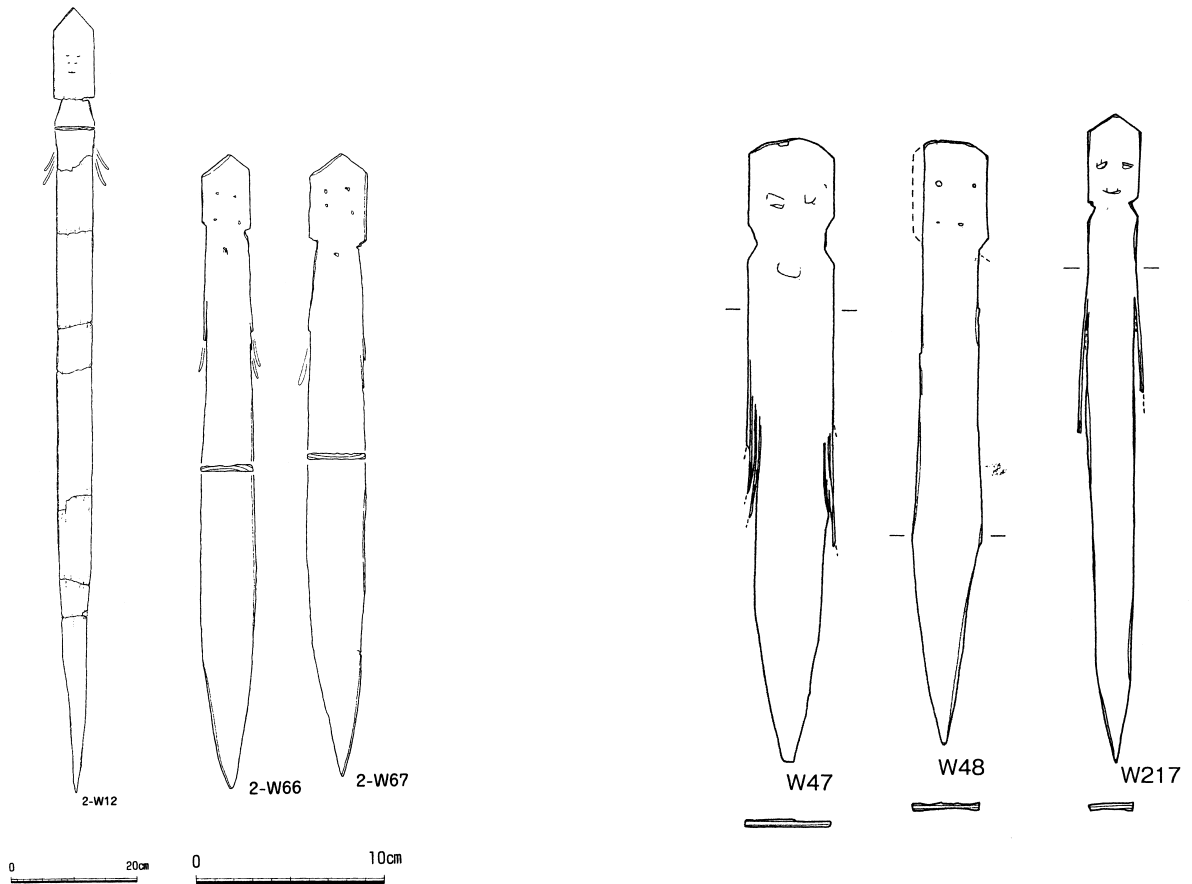
兵庫県北部の丹波に位置する市辺遺跡（氷上郡衙関連）では、二本足の人形に混じって一本足の人形が出土している。この型式は播磨北部の安坂・城の堀遺跡（多可郡衙関連）でまとまって出土しており、加古川上流域の特徴といえるのかもしれない。一方、同じ氷上郡内にあるものの、低い分水嶺をはさみ、日本海へ流れる由良川流域に位置する山垣遺跡・七日市遺跡（氷上郡衙の支所関連）では2本足の人形のみが確認されているので、8世紀から9世紀段階では、同じ郡の役所であっても木製祭祀具自体は地域性を反映するような形で製作、運搬されていた可能性が考えられる。

<参考文献> 渡辺昇「兵庫県の律令祭祀遺跡について」『兵庫県の歴史』28、1992年

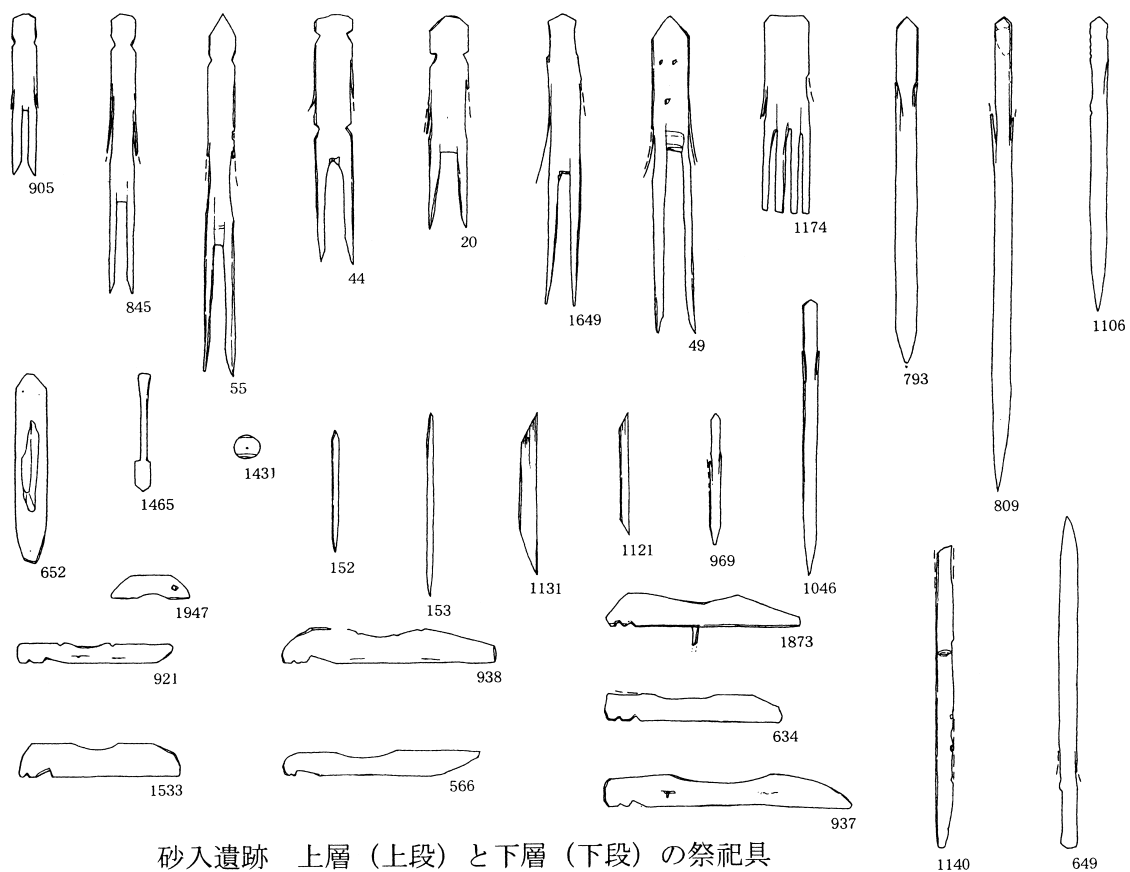
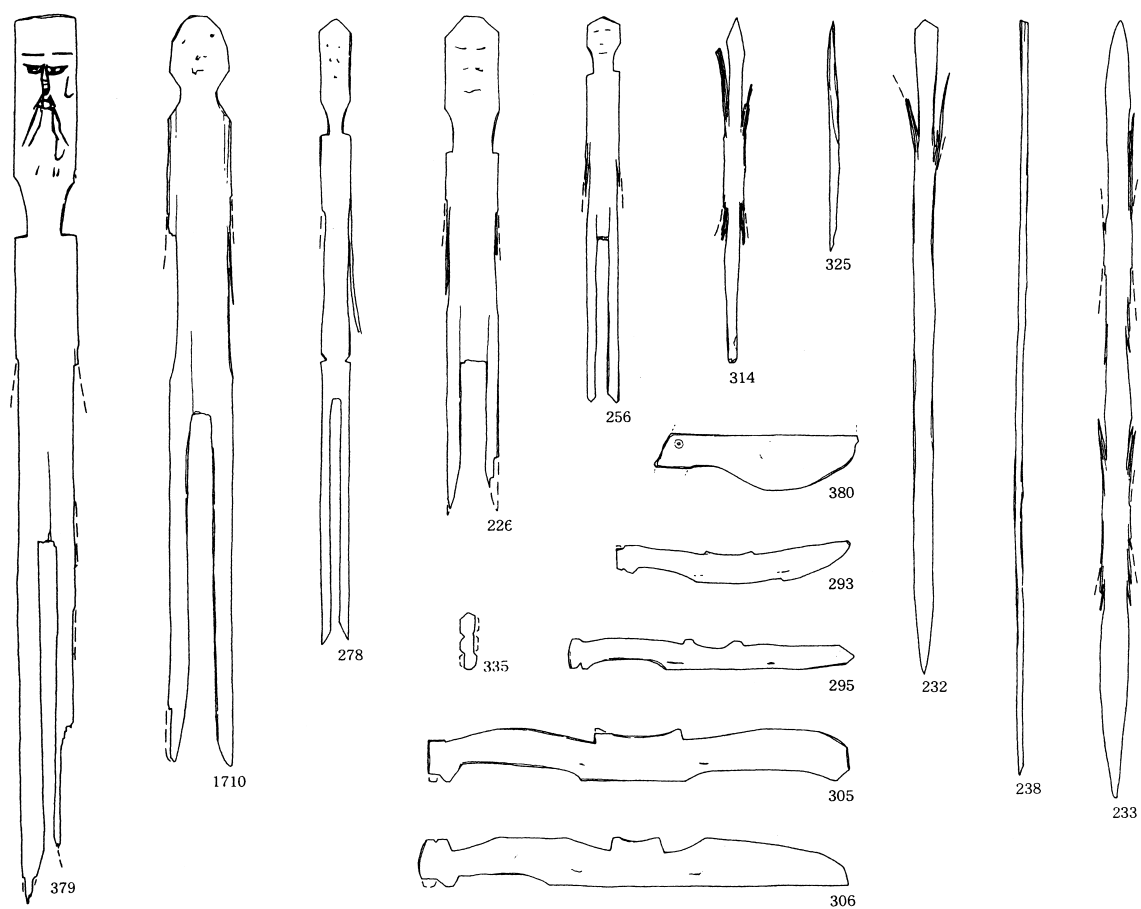
図は各報告書より転載



関係遺跡位置図



一本足の人形（左：安坂・城の堀遺跡／北播磨、右：市辺遺跡／丹波）



砂入遺跡 上層（上段）と下層（下段）の祭祀具

加賀における古代祭祀—木製祭祀具を中心として—

向井 裕知（金沢市埋蔵文化財センター）

加賀においては北加賀で木製祭祀具の出土が際だっており、中でも人形や馬形などが多く出土している金沢市内の4遺跡について取り上げ、その出土状況等についてみていきたい。

まず8世紀中頃～9世紀代を主体とする上荒屋遺跡は、東大寺領横江荘との関係が指摘されている古代荘園遺跡で、推定荘家建物跡に隣接する河川跡から大量の墨書土器を含む土器・陶磁器や木簡などと共に斎串や人形、馬形などの木製祭祀具が出土している。荘家建物は9世紀初頭から前葉にかけて河川に沿って西から東に移転するが、それに伴い川への遺物廃棄位置も動く傾向にあり、出土地点から大凡の年代推定が可能である。その出土状況から荘家の隣接河岸にその時期の祓所を想定することが可能であり、同時に人形の撫で肩タイプから怒り肩タイプへの変遷が指摘できる。

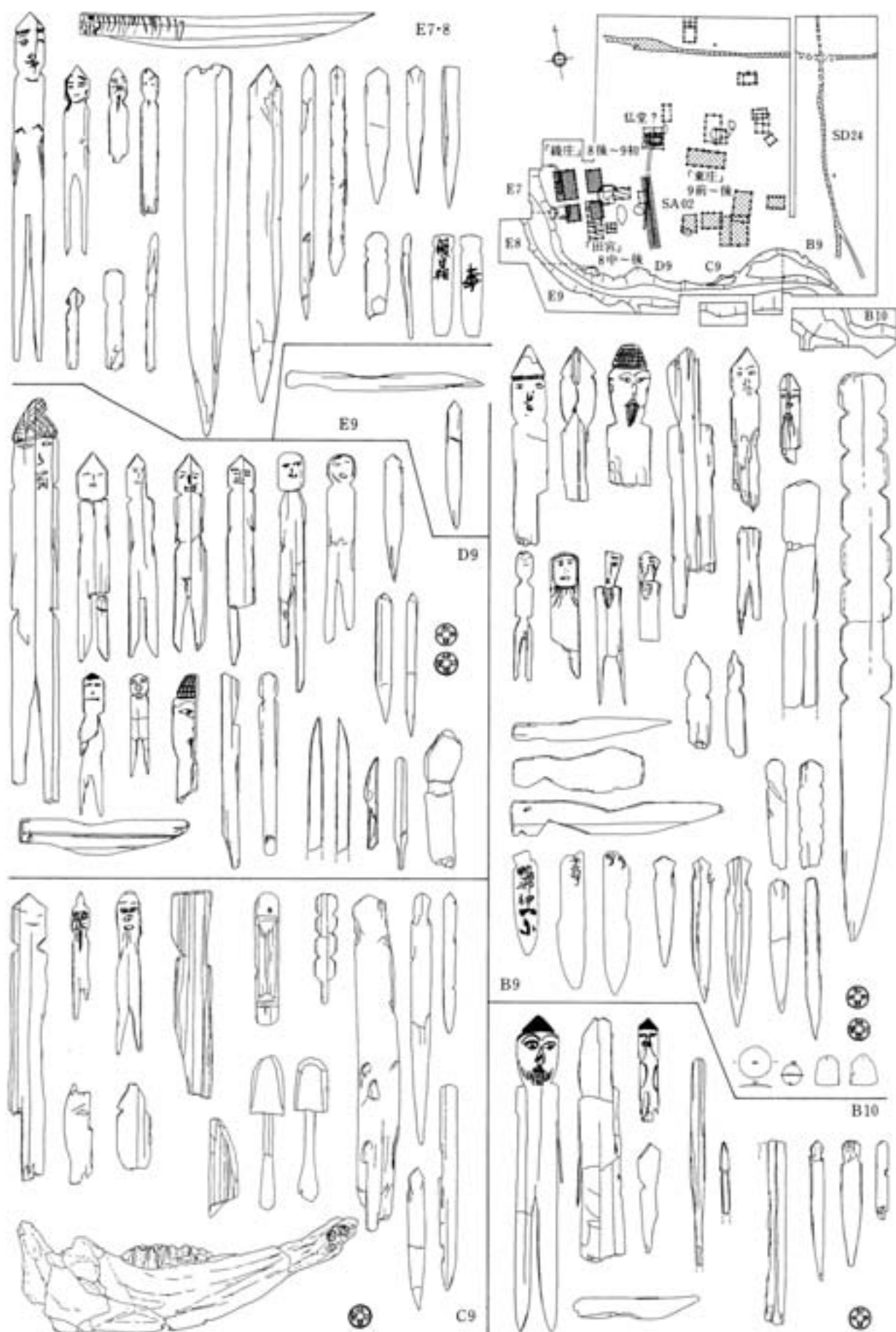
上荒屋遺跡の近隣に所在する福増カワラケダ遺跡は、9世紀を主体とし、白山市横江庄遺跡・庄家推定地（以下庄家推定地）に隣接する。河川跡から木製祭祀具が大量に出土しているが、主に庄家推定地の所在する東岸から出土しているので、その祓所に該当する可能性が指摘できる。出土状況から2対もしくは3対の人形の組み合わせが想定できるが、それらと船形・馬形といった交通や運搬に関係した形代との組み合わせも想定可能である。また、長さ722mmという特大型人形の存在も特筆できる。なお、人面・墨書土器が出土しているが、木製祭祀具とは出土位置が異なっているため、使用の場（祭祀）の違いが想定でき、それぞれを用いる祭祀行為は直接的には連携しない可能性が高い。

官衙関連遺跡とされる9世紀主体の戸水大西遺跡では、河川跡から木製祭祀具が出土しているが、その出土状況から2ヶ所の祓所が想定されている。また、人形と斎串では集中地点が異なる場所があり、やはりそれぞれの使用の場（祭祀）の違いを示しているものと考えられる。なお、人形は撫で肩が少なく、怒り肩となるタイプが多いために、同タイプが9世紀代の特徴を示すものと考えられる。

同じく官衙関連遺跡とされ、9世紀主体の磯部カンダ遺跡では、胴体部に「阿閉東吉」・「丈マ阿古女」・「□□道□」といった人名墨書をもち、かつ頭部には木釘を打ち込んだ人形が出土している。

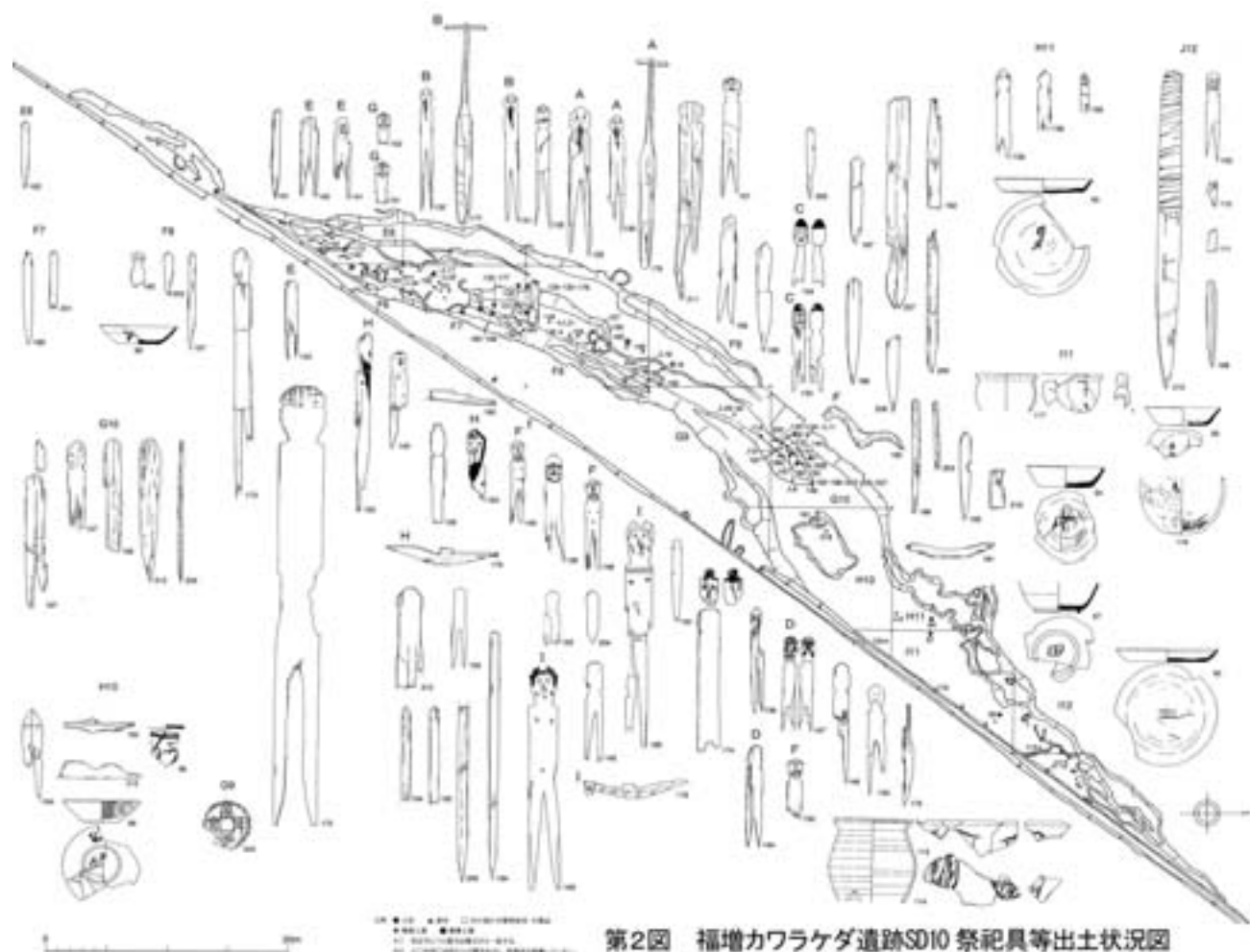
以上が木製祭祀具、特に多く出土している遺跡の概略である。これらの遺跡は荘園遺跡や官衙関連遺跡であるが、それぞれ採用する木製祭祀具にはその量や種類に差異が認められる。そして、そのような格上の遺跡においても、木製祭祀具を用いた律令祭祀の痕跡が希薄な場合が多く、むしろ大量の祭祀具を用いる遺跡は限定されている。調査範囲が「祓所」に及んでいないということも当然考えられるが、畝田西・東遺跡群といった官衙関連遺跡の大規模調査についても人形の出土は少ない。また、用いられる祭祀具についても遺跡間で組成が異なることから、律令祭祀の受容は画一的ではなく、取捨選択が行われていたものと考えられる。

遺跡名	遺構	年 代	斎 串	人 形	馬 形	鳥 形	舟 形	刀 形	剣 形	鏃 形	鋤 形	陽 物	斎 串 ?	形 代 ?	備 考
磯 部 カ ン ダ 遺 跡	SD 16	9・10 c	52	20	1	1	2								
戸 水 大 西 遺 跡	SD 30	9 c	87	31	2		4	1		1					
上 荒 屋 遺 跡	SD 40	8 c 後半～10 c	105	41	4		1	4	1	1	2	1	62	7	
中 屋 サ ワ 遺 跡	SD 30	8 c 後半～10 c	6		2		1	1						2	
	SD 66	8 c 後半～10 c		5									1		
	SD 75	8 c 後半～10 c	1	6											
福増カワラケダ遺跡	SD 10	8 c 末～9 c	31	46	5				1					4	
	SD 60	8 c 末～9 c	1												報告書未掲載
横 江 荘 遺 跡	テニスコート地区	8 c 末～9 c 前半	1	3				1					1	1	福増カ・SD 10 と同じ川



第1図 上荒屋遺跡 祭祀・信仰関連遺物出土状況図(遺構:S=1/2,000、遺物:S=1/6)

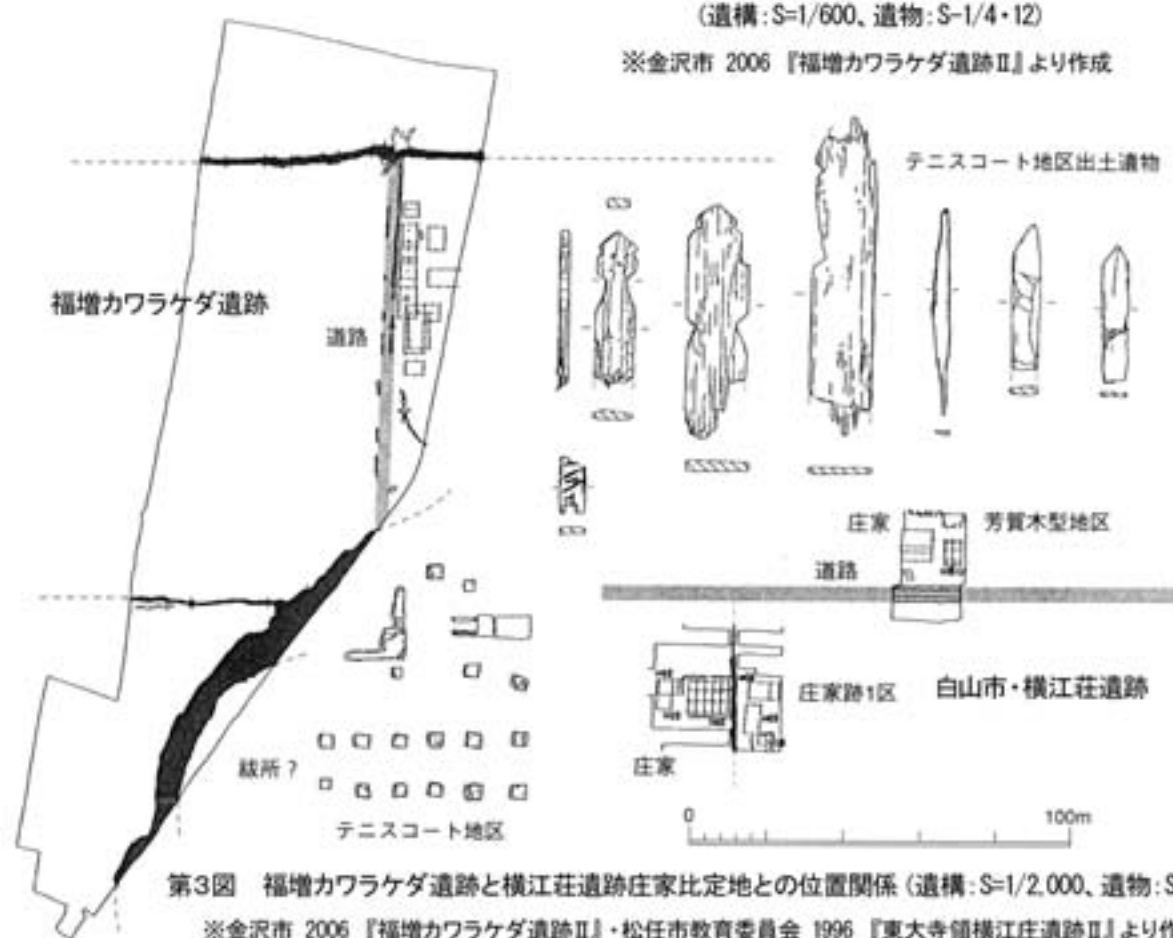
※金沢市 2000 『上荒屋遺跡IV』より転載



第2図 福増カワケダ遺跡SD10 祭祀具等出土状況図

(遺構:S=1/600、遺物:S=1/4・12)

※金沢市 2006 『福増カワケダ遺跡Ⅱ』より作成



第3図 福増カワケダ遺跡と横江荘遺跡庄家比定地との位置関係 (遺構:S=1/2,000、遺物:S=1/6)

※金沢市 2006 『福増カワケダ遺跡Ⅱ』・松任市教育委員会 1996 『東大寺領横江庄遺跡Ⅱ』より作成

越中国における古代の祭祀

堀沢 祐一（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

1. 越中国の律令祭祀具出土遺跡と祭祀具の内容（図1・表1）

越中国では18遺跡から、人面墨書土器や木製祭祀具が出土している。古代越中国には4郡が置かれ、各郡での様相は図1・表1のとおりである^①。

2. 越中国の律令祭祀具出土遺跡と官衙遺跡の関係（図1）（堀沢2003）

（1）祭祀具のセット関係^② 人面墨書土器と斎串や人形などの木製祭祀具が共伴する祭祀パターンA型と木製祭祀具のみが出土する祭祀パターンB型に分けられる。さらに、B型は斎串のみ出土のB-(a)型と斎串に他の木製祭祀具伴うB-(b)型に分けることができる。

（2）祭祀パターンA型と官衙遺跡の関係 祭祀パターンA型は、豊田大塚・中吉原遺跡（旧称：豊田大塚遺跡。平成15年7月名称変更した）、南太閤山Ⅰ遺跡、北高木遺跡（北高木遺跡と荒畑遺跡は、隣接するため1遺跡とする。）、埴生南遺跡の4遺跡がある。現在のところ各郡で1ヶ所ずつ所在している。これら付近には、国府や郡家と比定される遺跡があり、以下ようになる。

越中国府 越中国府と北高木遺跡（越中国府の祭祀場）

新川郡 米田大覚遺跡（新川郡家）と豊田大塚・中吉原遺跡（新川郡家の祭祀場）

婦負郡 婦負郡家は富山市西二俣に比定される。候補の遺跡は黒河尺目遺跡になる（藤田2002）。
南太閤山Ⅰ遺跡（婦負郡家の祭祀場）

射水郡 射水郡家は越中国府付近に比定される。北高木遺跡は射水郡家の祭祀場でもあるのか^③。

礪波郡 道林寺遺跡（礪波郡家）と埴生南遺跡（礪波郡家の祭祀場）

国府や郡家に関連する祭祀場では、人面墨書土器と木製祭祀具のセットで使用すると考えられる。

（3）祭祀パターンB型と官衙遺跡の関係 祭祀パターンB型は、13遺跡である。郡家・郷・駅家・津（河川交通）などに比定される遺跡が多い。米田大覚遺跡は新川郡家、水橋荒町・辻ヶ堂遺跡は水橋駅家、じょうべのま遺跡は佐味駅家関連、麻生谷遺跡は川人駅家、辻遺跡は郷関連、東木津遺跡は布師郷関連、桜町遺跡は長岡郷関連、中保B遺跡は津（河川交通）とされる。郡家・郷・駅家・津（河川交通）などでは、木製祭祀具のみを使用すると考えられる。

その他の遺跡も出土遺物をみると官衙に関連した遺跡と考えられる。遺跡の内容については、今後の課題としたい。

斎串のみ出土のB-(a)型は、井戸や掘立柱建物の柱穴などにみられ、井戸や建物に伴う祭祀が想定される。

3. 越中国の祭祀具の問題点

（1）下部が尖るタイプ（一本足）の人形について 下部が尖る人形・一本足の人形は、越中国以外では、兵庫県中町安坂・城の堀遺跡（播磨国）、同県丹波市市辺遺跡（丹波国）、大阪府寝屋川市讃良郡条理遺跡（河内国）、静岡県静岡市神谷原・元宮川遺跡（駿河国）で出土している^④。

現在のところ他国では1遺跡のみの出土であるが、越中国では、豊田大塚・中吉原遺跡など3遺跡で出土がみられ、「一本足タイプ」の人形は越中国の特徴とされるのではないだろうか。9世紀後半～10世紀初頭が主体と考えられる。このタイプの人形の時期や使用方法などについては、今後の課題である。

(2) 顔がない人面墨書土器について 人面墨書土器が出土している南太閤山Ⅰ遺跡と北高木遺跡では、人面墨書土器とともに、おそらく顔が描かれない人面墨書土器が相伴している。

南太閤山Ⅰ遺跡では、都城で人面墨書土器に使用される祭祀用土器（壺B）を模倣したと考えられる土器が1点出土している（図3-3）。ただし、土器の外表面はヘラケズリしており、調整方法は都城とは違い、在地の方法で行われる。岸本雅敏氏は「人面用土器模倣形態」の在地土器で、人面墨書土器とともに祓えの祭祀に使用したものとしてよいとしている（岸本1985）。

北高木遺跡では、人面墨書土器に使用される土器とほぼ同じ器形で、顔がない土器がある（図3-4）。また、花ノ木C遺跡では、人面墨書土器は出土していないが、人形と斎串とともにほぼ完形品の土師器の長胴甕と小型甕、須恵器の杯が出土している。これらについては同時に溝に投げ込まれたと考えられる（富山市教育委員会2004）。

このように、「顔のある人面墨書土器」と「顔のない人面墨書土器」が同時に祭祀に使われたと考えられ、都城で行われたとされる「顔のない人面墨書土器」による祭祀行為は、越中国でも行われた可能性が高いと考えられる。

他の遺跡で、木製祭祀具のみで人面墨書土器が伴わない遺跡でも、完形品の土師器甕類などは「顔のない人面墨書土器」と考えられるのではないだろうか。

(3) 赤田Ⅰ遺跡の祭祀について 本遺跡では、溝から多種の木製祭祀具とともに、土師器の椀と皿、黒色土器、緑釉陶器などが出土している。完形品に近い土師器の椀は約300点ある。椀は口径と器高の関係より、2つのグループに分けられる。Ⅰ類が口径12~14cm、器高4~6cm、Ⅱ類が口径15~18cm、器高5~6cmで、Ⅰ類が圧倒的に多い。溝から出土した土師器の約86%は椀が占める。さらに、土師器には高台のある皿と高台のない皿がある。土師器の甕類は1~2点で、須恵器はほぼ完形品の長頸壺（2点）、頸のない双耳瓶（1点）などがある。

また、緑釉陶器は12点あり、報告書では、口縁部を意図的に打ち欠いて、この部分に燈芯を置いて、祭祀儀礼における灯火具として用いられ、祭祀が執り行われた後、木製品や他の土器と伴に溝に廃棄したとしている（小杉町教育委員会2003）。

大量の土師器の椀や皿などは木製祭祀具と共に祭祀に使用された後、投げ込まれたのか、投げ込むこと自体が祭祀行為なのか、祭祀の内容や祭祀の主体者などについては、今後の課題としたい。

注① 脱稿後、高岡市石名瀬A遺跡から人面墨書土器、斎串、人形などが出土していることを知った。それについては、本報告の図1・表1には記載していない。

② 平成19（2007）年10月28日、高岡市下佐野遺跡の現地説明会で人面墨書土器の破片が展示されていた。現在のところ遺跡の詳細が不明なので、この分類には含めていない。注①で書いたように石名瀬A遺跡についても同様である。石名瀬A遺跡の人面墨書土器は、平成20（2008）年3月8~16日に開催された第8回高岡市埋蔵文化財展「万葉の時代」に展示されていた。

また、高岡市下佐野遺跡・石名瀬A遺跡を含めた越中国の祭祀パターンについては、若干の再考を行った。この点については、2008年4月発行の『信濃』第60号第4号に「古代越中国の律令祭祀について」として報告した。

ただし、下佐野遺跡と石名瀬A遺跡は現在整理中であり、あくまでも筆者が遺物を実見させていただいた感想を報告している。

③ 下佐野遺跡と石名瀬A遺跡は隣接しており、注①と②で書いたように人面墨書土器や人形などが出土している。両遺跡の年代や他の出土遺物などについて検証する必要があるが、これらを一体的な遺跡とすると、射水郡家に関連する祭祀場として考えられるのではないだろうか。

④ 発表時に、中村弘氏の資料により市辺遺跡で一本足の人形が出土していることを知った。また、他の2遺跡については、発表後に確認した。

<主な参考文献>

- 大島町教育委員会 1995『富山県大島町北高木遺跡発掘調査報告書』
岸本雅敏 1985「Ⅳまとめ3人面墨書土器について」『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査報告概要(3) 南太閤山Ⅰ遺跡』
高岡市教育委員会 2001『石塚遺跡・東木津遺跡調査報告』
富山県小杉町教育委員会 2003『赤田Ⅰ遺跡発掘調査報告』
富山県教育委員会 1985『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査報告概要(3) 南太閤山Ⅰ遺跡』
富山市教育委員会 1998『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』
富山市教育委員会埋蔵文化財センター 2004『富山市の遺跡物語 所報No.5』
藤田富士夫 2002「古代婦負郡の「郷」擬定と枋谷南遺跡の位置」『枋谷南遺跡発掘調査報告書』富山市教育委員会
堀沢祐一 2003「越中国の律令祭祀具と官衙遺跡」『続文化財学論集』

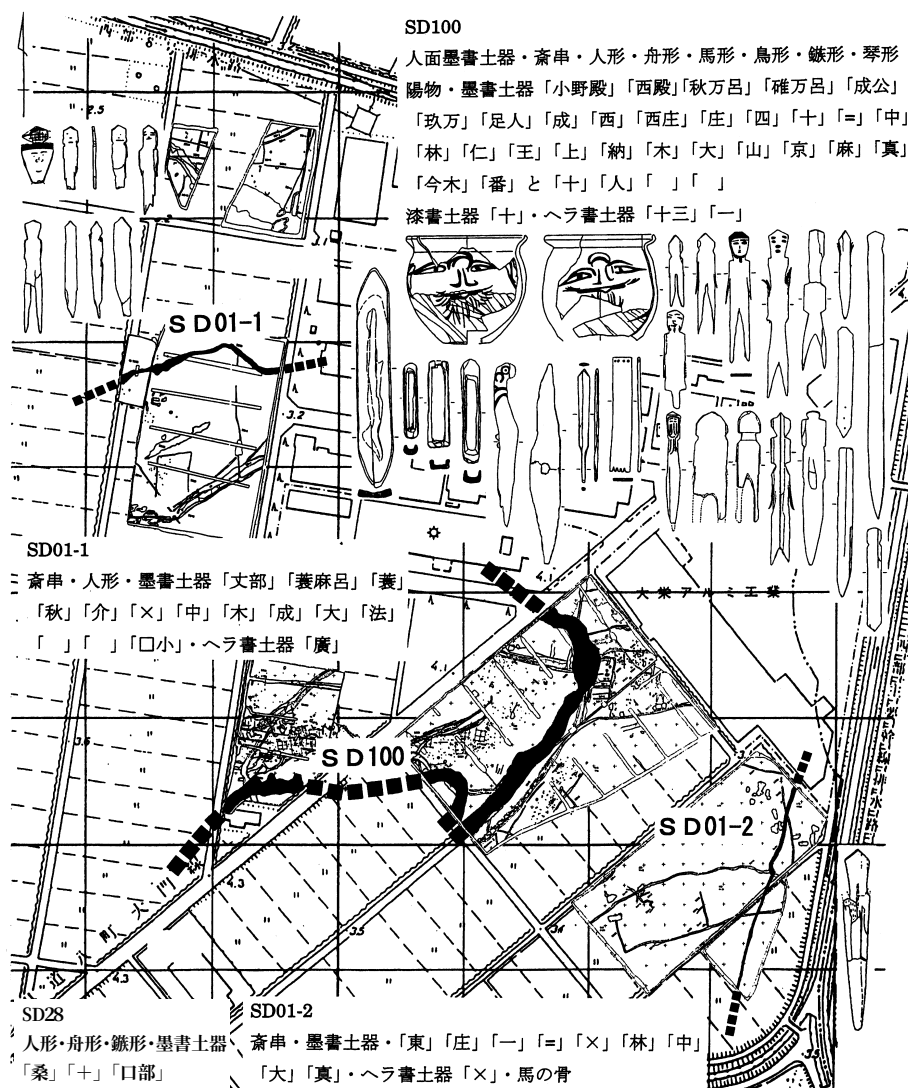


図2 北高木遺跡律令祭祀具出土位置図(遺構図は1:3000、遺物は1:9)
大島町教育委員会1995に加筆

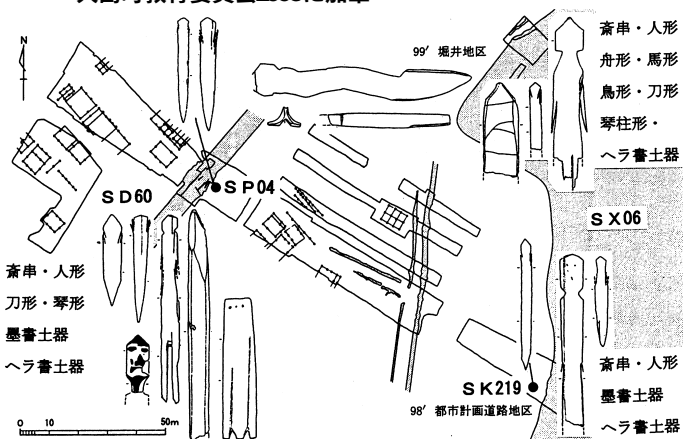


図4 東木津遺跡律令祭祀具出土位置図(遺物は1:9)
高岡市教育委員会2001に加筆

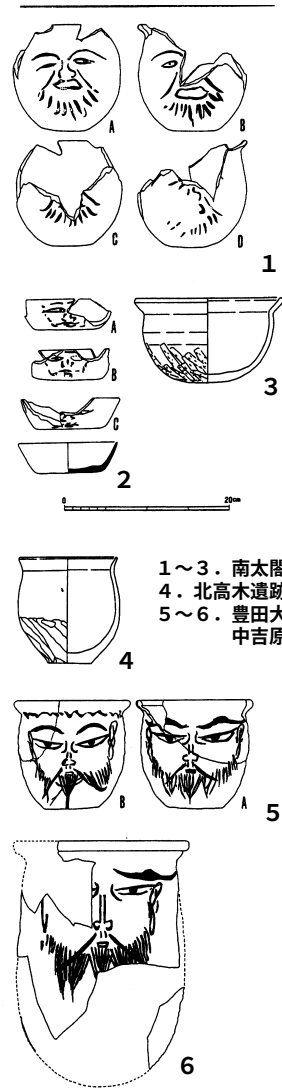


図3 越中国の主な人面
墨書土器など(1:9)

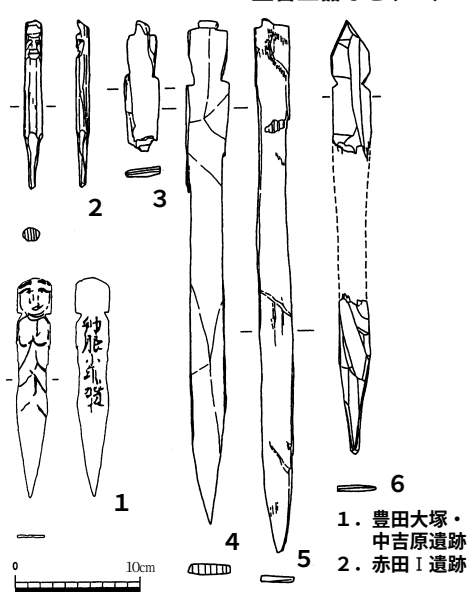


図5 一本足の人形(1:6)

越後国の律令祭祀—木製祭祀具を中心にして—

水澤 幸一（胎内市教育委員会）

1. 清水（しうつ）瀉水系遺跡群

今回主に対象としたのは、原越後といえる越国北端の旧国府所在地沼垂郡の北端にあたる清水瀉周辺の地域である。この一帯の地理的状況は、清水瀉の北方5kmを西流する胎内川が阿賀野川・信濃川河口以北の分水嶺であり、以南の水流は海岸砂丘に阻まれ、すべて沼垂へと集まる。したがって巨大な沼湖が点在していたのであり、交通の基本は内水面にあったと考えられる。

2. 祭祀具の種類と時期（表）

水辺の祭祀を明瞭に意味する遺物として、人形・馬形・船形をはじめとする形代類や斎串、箸状木製品、人面墨書土器などがあげられる。ここでは、加えてその可能性があると考え筆者が考える火鑽板、付木、独桙、櫛、檜扇、琴柱、糸巻、弓、鋤鎌、そして盤を加えて、一覧表を作成した。

形代には、人形、馬形、鳥形、舟形、刀形などがあり、馬形が最も多い。馬形は、鞍の有無で二分され、両者とも8～9世紀を通じて存在するが、鞍を持たないもののほうが多い。鳥形は、屋敷2次や蔵ノ坪遺跡等で出土しているが、8世紀代のものが多く、外に比してやや古い時期に限られる可能性がある。人形は、複数点数がまとまって用いられる場合が多い。

斎串は、上部に刻みを対に入れるものが通有であるが、上下対反対方向のタイプが緒立Cや曾根、船戸川崎遺跡で例があり、古い段階に認められるようである。なお大きさには、大小があるが、全長10cm前後の小型のものは9世紀中葉以降にみられるようになる。なお、箸状木製品は斎串と同じくほとんどの遺跡から認められ、最も基本的な祭祀具である。なお、火鑽板や付木・焼痕のある棒状製品などは、多数認められ、神事に火を用いていたと考えられる。

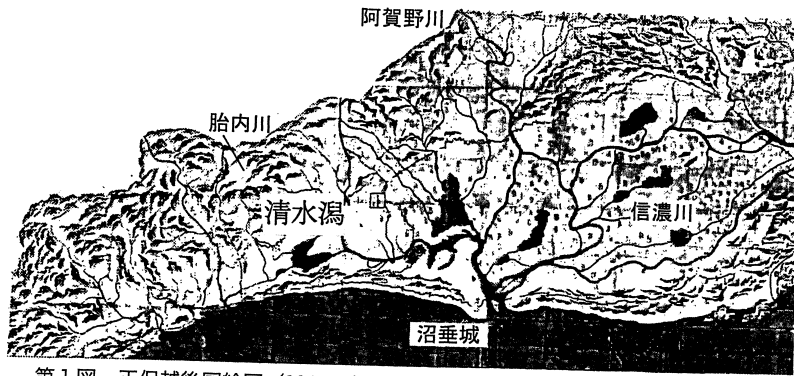
弓は、多くの遺跡からの出土が認められ、すべて白木であることから、祭祀具と考えられる。特に屋敷遺跡からは、大小2張が完形で出土しており注目される。

人面墨書土器は、船戸桜田2次と緒立Cのみで認められており、前者の場合、川底に正位で置かれた状態で出土した。船戸桜田は8世紀後半代の土師器小甕、緒立Cは9世紀前半代の土師器長甕・小甕が用いられている。

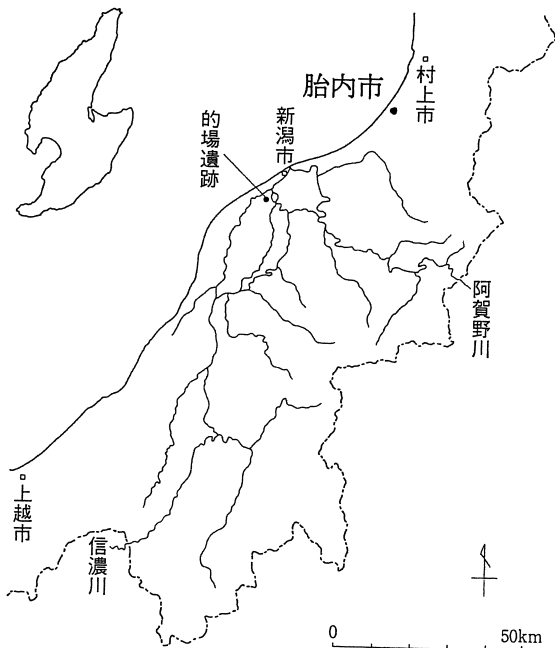
漆塗り製品を含む挽物類は、官衙的な遺跡から170点以上出土している。焼印は、舟戸川水系の船戸桜田遺跡・船戸川崎遺跡・青田遺跡に限られており、無台盤・有台盤に押されるものが多いが、蓋及び曲物に押されているものもある。最も多くの器種が出揃うのが9世紀中葉頃で、この時期に器種の再編が行われた可能性が高い。

3. 越後国の律令祭祀

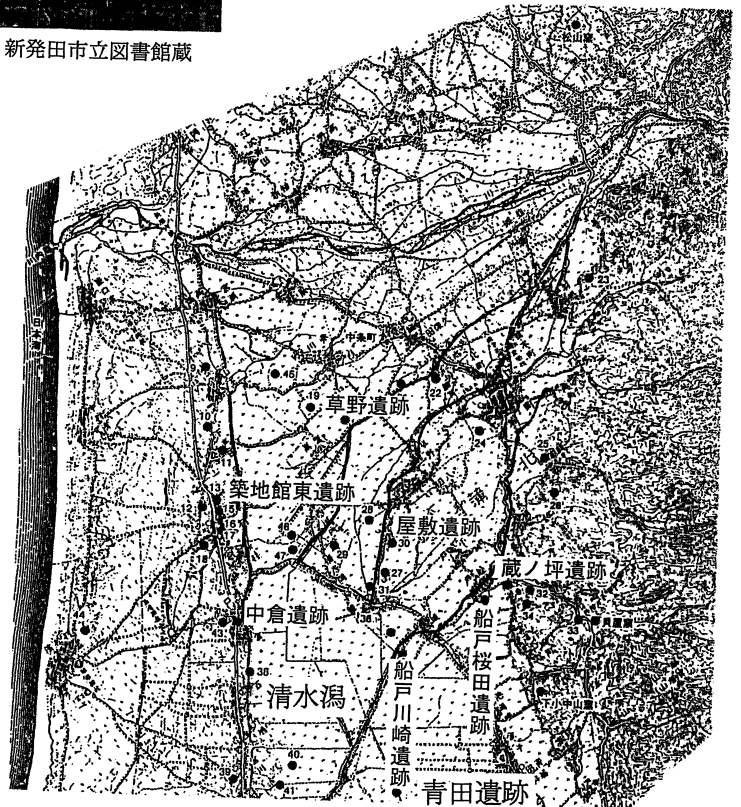
これらの遺跡群を時間軸にのせると、草野、屋敷、築地館東遺跡がやや古くから成立した官衙的な遺跡であるが、8世紀後半に入る頃から遺跡群全体の質的向上がみられ、それがピークに達するのが9世紀中葉を前後する時期である。これは上にふれた挽物類の多様化の時期とも一致しており、北陸では一郡一黨的体制が変質を迎える時期である。そして越後国北辺においては、この段階以降の遺跡内容が充実してくる時期でもある。それに歩調を合わせて、木製祭祀具を用いた祭祀の在り方も多様化していくのである。



第1図 正保越後国絵図（1647，部分，河川名等を加筆）新発田市立図書館蔵



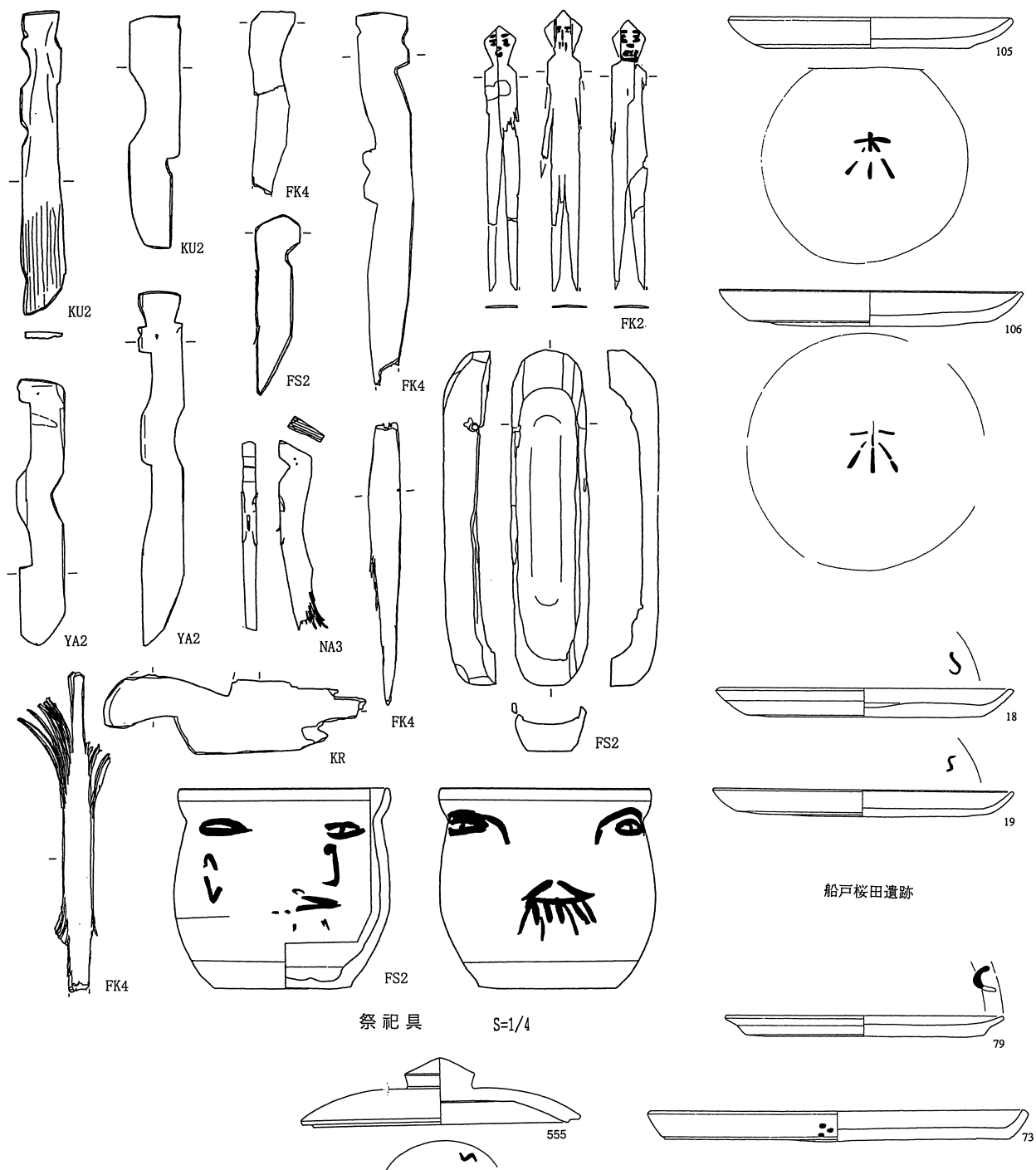
第5図 的場遺跡の位置 信濃川・阿賀野川水系のうち、海への放水路は除いた



第2図 古代遺跡分布図

越後の木製祭祀具一覧

遺跡名	時期	人形	馬形	鳥形	舟形	刀形	弓	斎串	箸状	火鑽	付木	独楽	櫛	櫓扇	琴柱	糸巻	鋤鍬	盤類	土器	その他
堂前	7後	○						○											×	
築地館東	8-9前					○	○		○								○	○	△	スタンプ
草野	8前		○	○					○		○						○	○	○	鋸形
屋敷	8前-中		○			○	○	○	○	○	○						○	○	○	槍形
蔵ノ坪	8-9C			○					○	○		○				○		○	○	人面墨書
船戸桜田	8-10初		○		○			○	○	○	○		○	○		○		焼印	○	陽物形
船戸川崎	8-10初	○		○				○	○	○	○	○					○	○	○	曲物焼印
青田	9-10初		○					○	○	○	○						○	○	○	
中倉	8-9前		○					○	○		○			○				○	○	
菅根	8-9C				○	○	○	○	○	○	○					○	○	○	○	
発久	8-9C					○	○	○	○	○	○		○			○		○	○	
緒立C	8半-9			○				○	○	○					○				○	人面墨書
的場	8-10前	○	○		○	○		○	○			○	○	○	○	○		○	○	
越前	8後-10初				○		○	○		○							○	○	○	



船戸桜田遺跡

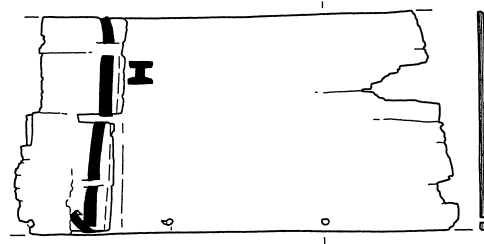
祭祀具

S=1/4

分類	木 地 製 品																				漆 器													
	無 台 盤						有 台 盤										蓋	稜	無台杯	皿	小碗	鉢	鉢	大鉢	無台盤	有台盤	皿	杯	碗					
	I	II	III	IV	V	VI	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	I	II	III	碗	有台杯	無台杯	有台杯	無台杯	有台杯	無台杯	有台杯	無台杯	有台杯	無台杯	I	II	I	II
時期																																		
Ⅲ 1																																		
Ⅲ 2																																		
Ⅳ 1																																		
Ⅳ 2																																		
Ⅳ 3																																		
V 1																																		
V 2																																		
Ⅵ 1																																		
Ⅵ 2																																		
Ⅵ 3																																		

第7図 挽物消長表

船戸川崎遺跡6次調査



出羽国域における古代祭祀—木製祭祀具を中心として—

伊藤 武士（秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所）

古代出羽国域における祭祀遺構と遺物については、奈良期から平安期にかけて、仏教・律令祭祀・道教・陰陽道に関連するもの等があり、多様性が認められる。今回は木製祭祀具を中心として、古代祭祀の様相について報告し、出羽国域における変遷と地域性等についてまとめることとする。

出羽国域における奈良・平安期の木製祭祀具出土遺跡としては、17遺跡が出羽国域のほぼ全域にわたり把握されている。大半が、城柵遺跡や官衙が存在し、国郡制が施行された律令国家の支配地域に分布している。遺跡の性格は、城柵遺跡が2遺跡、官衙及び官衙関連遺跡とされる遺跡が12遺跡、祭祀遺跡が3遺跡であり、「官」＝律令体制と密接なつながりをもつ遺跡で出土している。

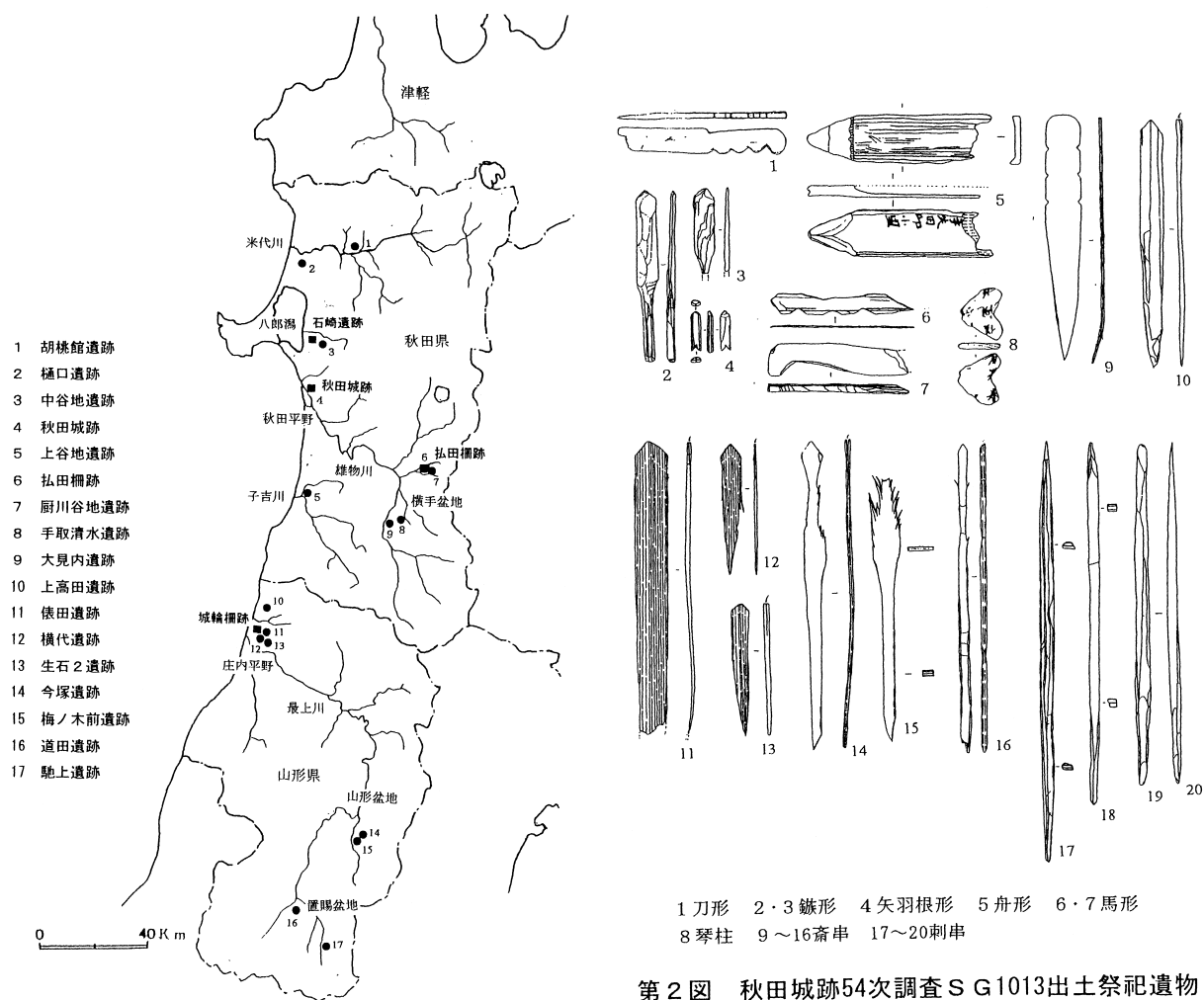
出土遺跡は、時期的に①8世紀末～9世紀第1四半期段階（秋田城跡 SG1013・中谷地遺跡・払田柵跡・横代遺跡・道伝遺跡）、②9世紀第2～第3四半期段階（秋田城跡 SG463・払田柵跡・俵田遺跡・生石2遺跡・手取清水遺跡・今塚遺跡・上高田遺跡）、③9世紀第4四半期～10世紀第1四半期段階（厨川谷地遺跡・大見内遺跡・上谷地遺跡・胡桃館遺跡）、④10世紀第2四半期～段階（樋口遺跡）の4段階に大別される。それらの遺跡では、施設内の一面または隣接する水辺、小河川や湿地、溝跡等が木製祭祀具を用いた祭祀の場として選定・利用されている。大規模な城柵や国府は「祓所」として専用に祭祀の場を設けていたと考えられる。それらの場所で形代類や人面墨書土器を用いて行われた祭祀行為としては主に「祓」の祭祀等が想定される。また、水辺の土坑から出土する事例については、地鎮のための祭祀が想定されている。

出羽国域には8世紀末頃に形代類等の木製祭祀具を中心に城柵・官衙に律令的「祓」の祭祀が導入され、その後9世紀代を通じ、郡衙以下の官衙及びその周辺に拡大浸透していったと考えられる。9世紀中葉までには人形などの形代類や斎串と人面墨書土器によるセットが成立しており、それらのセットによる祭祀は国府と城柵やその周辺に限られている。祭祀遺物のうち、細長い棒状の斎串（刺串）、「目」墨書土器、長胴甕の人面墨書土器等は出羽における地域的特徴を示す可能性がある。また、形代類を用いる「祓」の祭祀が盛行する9世紀中葉段階では、祭祀具の構成に木器類や須恵器貯蔵具類を伴うという特徴が指摘され、以後も地域性として残る。また、9世紀中葉以降は、呪符木簡や墨書土器などに示されるように、陰陽道による祭祀の拡大・浸透が認められる。

形代類については、9世紀後半以降、時期が下るに従い簡略化と小型化進み、種類が減少していく傾向がある。9世紀第4四半期以降になると、木製祭祀遺物とのセット関係から人面墨書土器が欠落する。一方で木器類は残りさらに多様な木製品が加わる。また、燈明皿や墨書土器とのセット関係が目立ち、黒色化させた土器片との特殊なセットも関係も認められる。木製祭祀遺物の構成自体からは、斎串以外の形代類が欠落していく。全体的に祭祀形態や祭祀遺物の構成が多様化し、律令的祭祀から陰陽道の影響を反映した多様な祭祀形態へ変化し、地域性がさらに強まる。

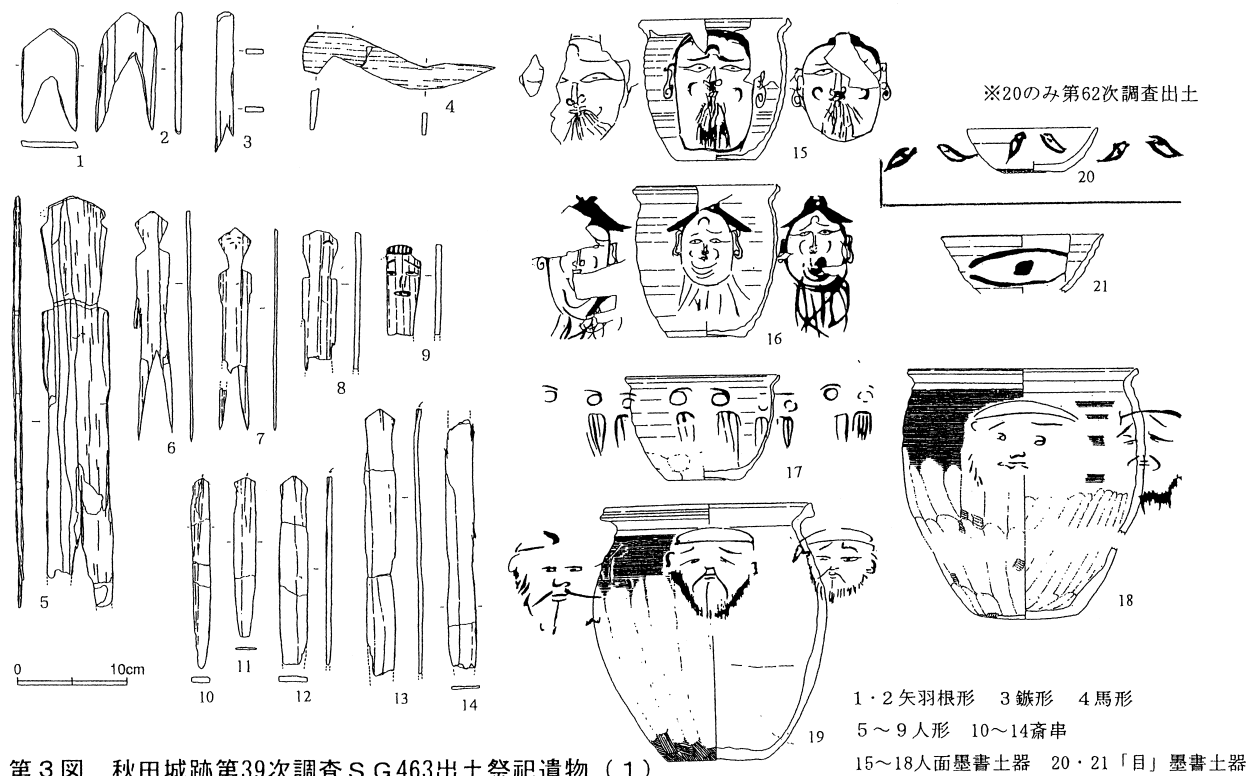
祭祀行為の背景について、出羽国の地域的事情として、9世紀代の大地震や噴火等の天災を契機として祭祀が盛行したとする考察や指摘がある。出羽国には嘉祥3年に全国に先駆け、陰陽師が派遣配置されており、陰陽道による祭祀が、国衙をはじめとする「官」において執り行われていたと考えられる。9世紀中葉以降の祭祀の動向と変化には、それらの背景が関係している可能性がある。

その他の祭祀遺物の様相として、絵馬、呪符木簡、墨書罽、胞衣壺、土製勾玉の出土が認められる。

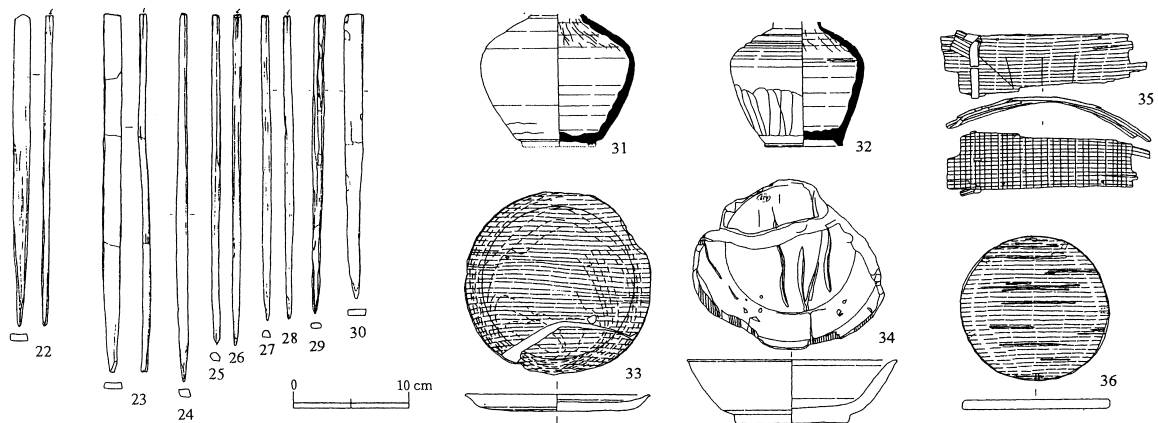


第2図 秋田城跡54次調査S G 1013出土祭祀遺物

第1図 出羽国域古代木製祭祀遺物出土遺跡位置図

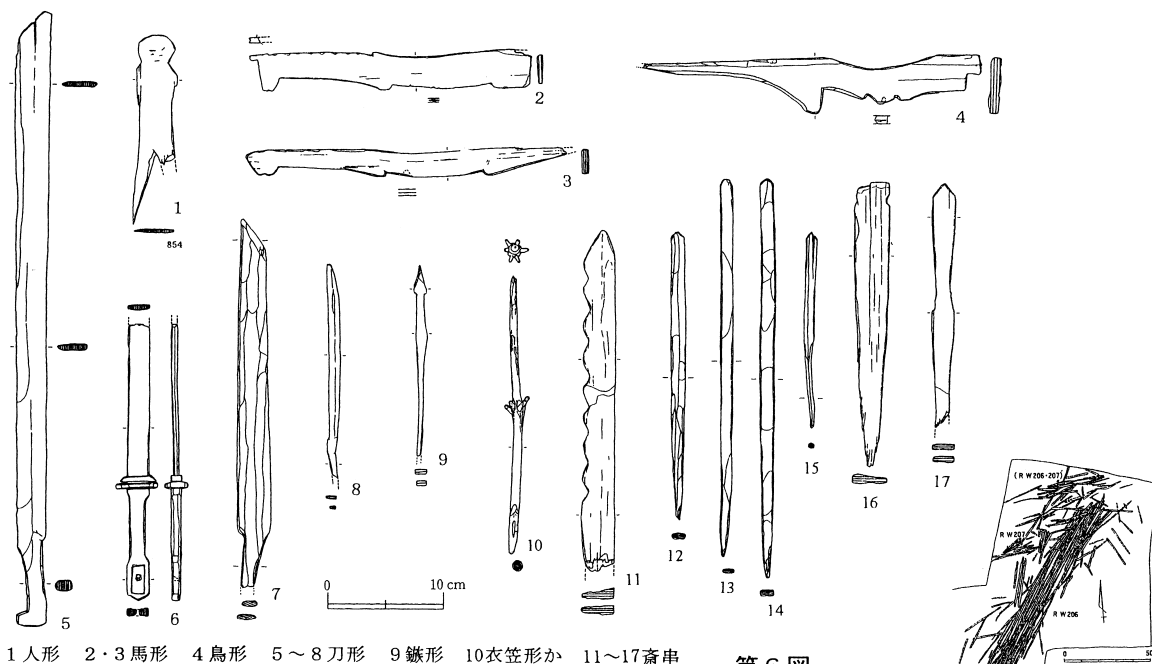


第3図 秋田城跡第39次調査S G 463出土祭祀遺物（1）



22~28斎串 29・30刺串 31・32須恵器長頸壺 33木器皿 34木器碗 35・36曲物

第4図 秋田城跡第39次調査S G463出土祭祀遺物(2)



1人形 2・3馬形 4鳥形 5~8刀形 9鎌形 10衣笠形か 11~17斎串

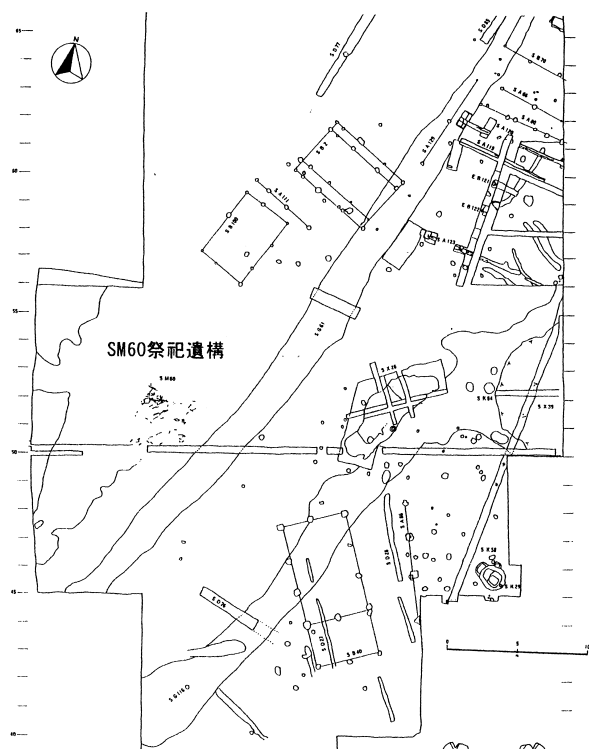
第5図 中谷地遺跡出土祭祀遺物

第6図 横代遺跡斎串一括出土状況

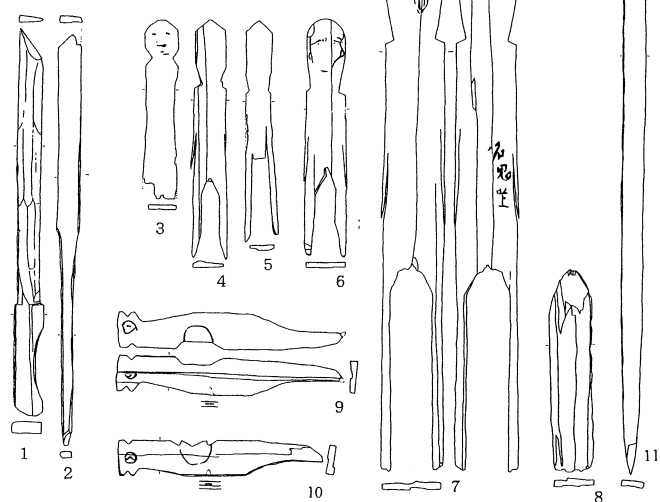


1人面墨書土器 2土師器小型甕 3~15斎串 16天秤棒状木柄 17墨書土器

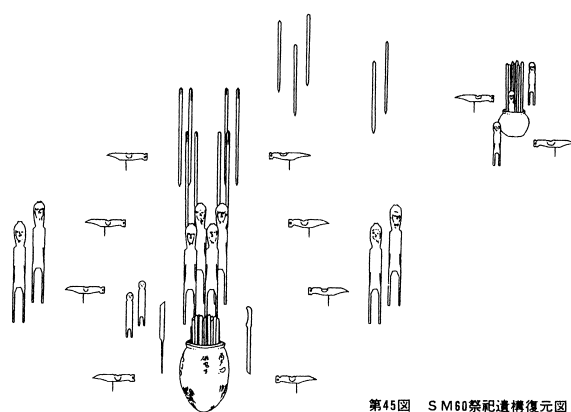
第7図 横代遺跡出土祭祀遺物



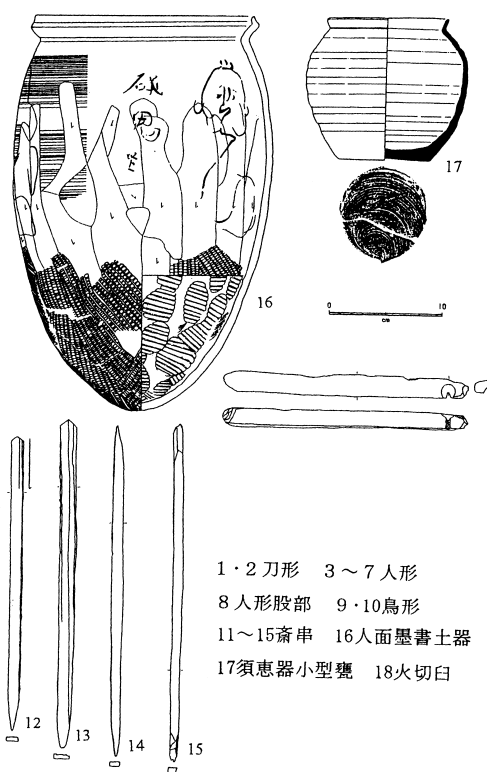
第8図 俵田遺跡遺構配置図



第9図 俵田遺跡SM60祭祀遺構復元図

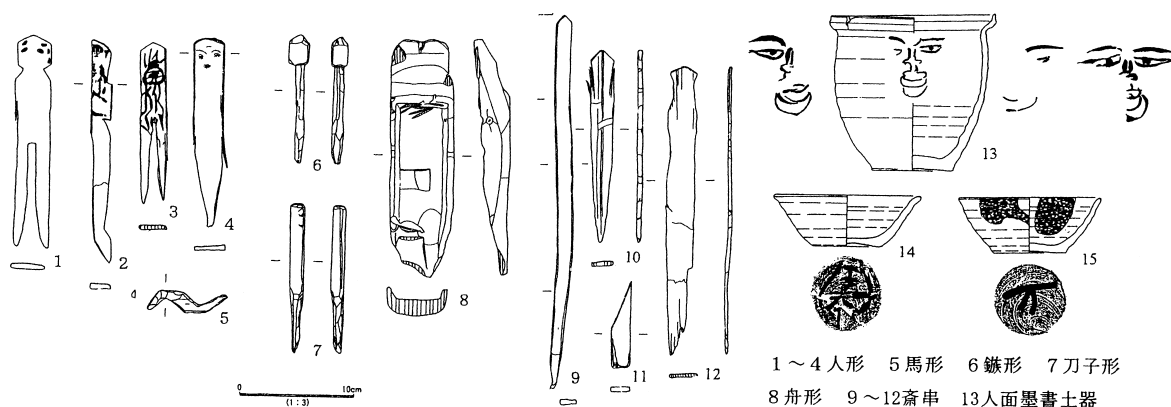


第45図 SM60祭祀遺構復元図



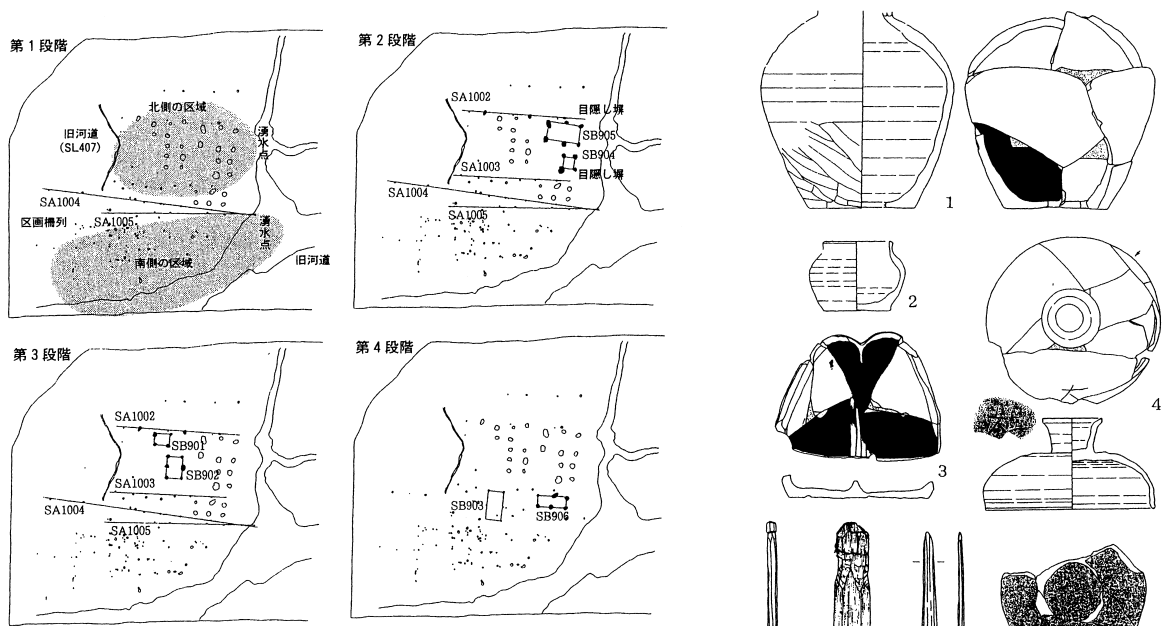
1・2 刀形 3～7 人形
8 人形股部 9・10 鳥形
11～15 斎串 16 人面墨書土器
17 須恵器小型甕 18 火切白

第10図 俵田遺跡出土祭祀遺物

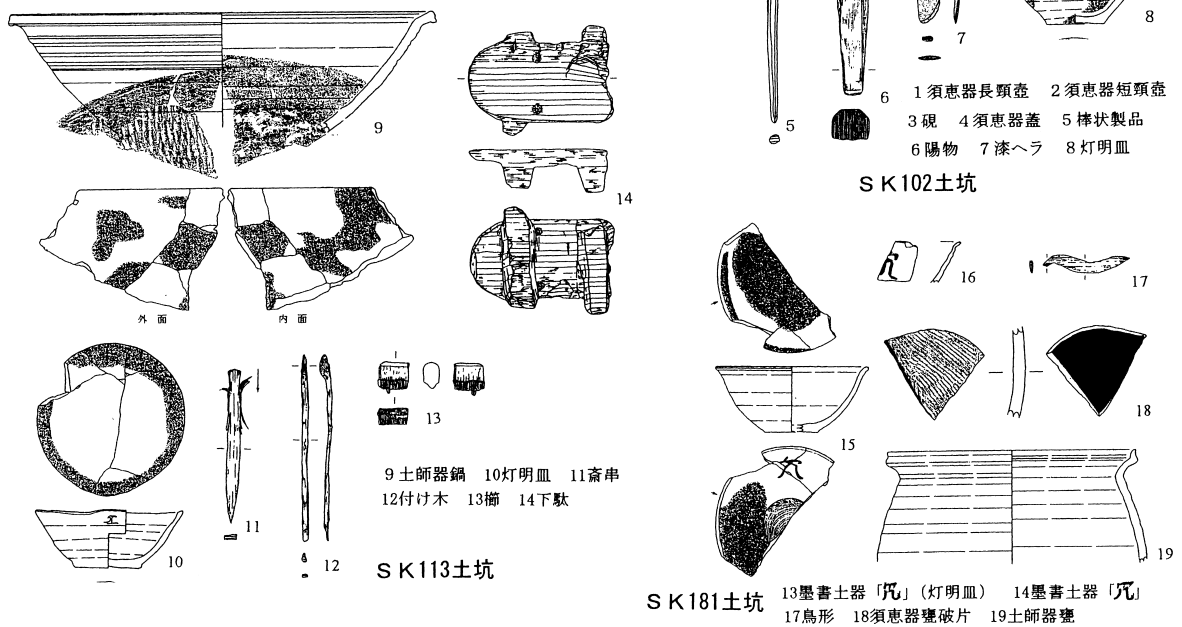


1～4 人形 5 馬形 6 鏃形 7 刀子形
8 舟形 9～12 斎串 13 人面墨書土器
14 墨書土器「秦」 15 墨書土器「万」

第11図 上高田遺跡出土祭祀遺物

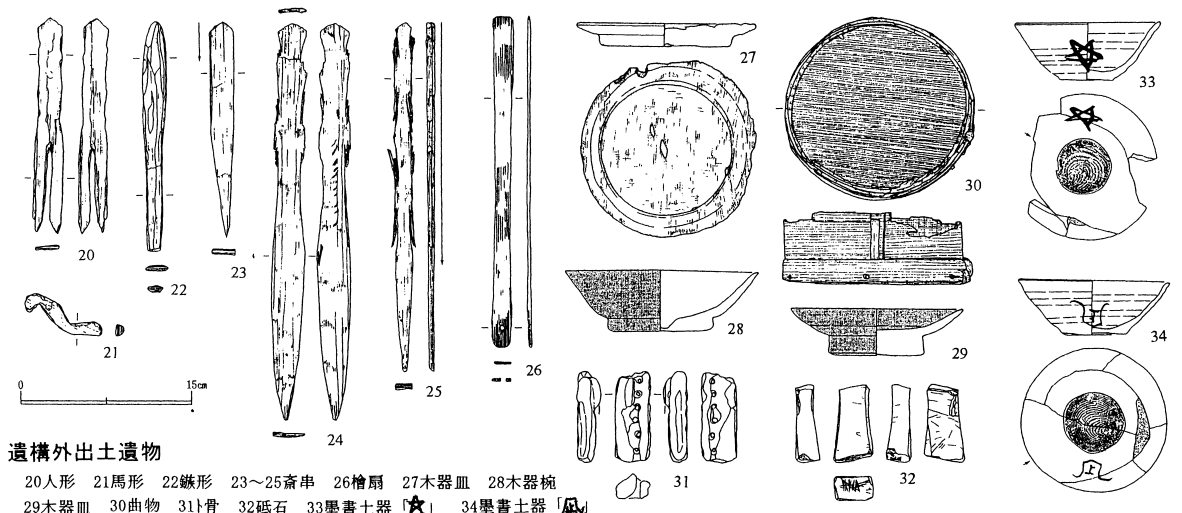


第12図 厨川谷地遺跡遺構変遷図



SK102土坑

SK181土坑



遺構外出土遺物

20人形 21馬形 22鎌形 23~25斎串 26櫛 27木器皿 28木器碗
29木器皿 30曲物 31骨 32砥石 33墨書土器「★」 34墨書土器「鳳」

第13図 厨川谷地遺跡出土祭祀遺物

日本海域における古代の祭祀—木製祭祀具を中心として— 「東北地方（米代川流域～津軽）」

木村 淳一（青森市教育委員会）

現在の秋田県北部から青森県にかけて北緯40度以北のエリアは古代においては郡制が未施行のいわゆる蝦夷と呼ばれる人々の居住する地域であった。国家の直接的支配が及ばなかったこの地域の様相は国家側から見た場合、辺境の地域としての様相ということになる。

対象とした地域で木製祭祀具の出土した遺跡は、現在のところ11遺跡（米代川流域3、津軽地方8）で、他地域より時期的に下った9世紀後半以降の遺跡からの出土例しか見受けられない状況にある。背景には①蝦夷勢力の地域であること②史料上の記録はあるが、考古学の資料上この地域では8世紀以前の遺跡の確認事例が少ないこと③木製遺物の残存が望めない丘陵上の調査事例が多く、沖積地での調査事例の少ないことなどが挙げられる。

元慶二年（878）に秋田城で起きた元慶の乱以前に秋田城の苛政に苦しんだ人民が奥地に逃亡したという記述が『日本三大実録』元慶三年三月二日壬辰条等に記載されているが、それに対応するかのよう考古学的な資料では米代川流域及び津軽地方では集落数が序々に増え、元慶の乱後には集落数の急激な増加と須恵器窯の操業や製鉄が行なわれるようになる。集落内でも耳皿や土鈴の出土など律令的な祭祀要素を持つ遺物の出土が見られている。木製祭祀具の出土する9世紀後半～10世紀初頭の遺跡は、人口の流入に伴う集落の増加と各種生産体制の整備の段階に伴う祭祀形態の情報流入の可能性がある。ただし、その様相は青森市近野遺跡や野木（1）遺跡などのように、谷地形の水場遺構などから大量の簀状木製品とともに圭頭状の斎串が少量出土する程度で、祭祀が絶対的に国家側の勢力が担い手となったと言い切れるような状況にはない。

米代川河口付近の「能代営」擬定地の能代市大館遺跡周辺に位置する樋口遺跡では、10世紀第2四半期併行の土師器食膳具とともに桧扇や斎串・鏃形等がまとめて廃棄されている。周辺には大館遺跡以外にも約1.8km東方に緑釉陶器や石帯（巡方）が出土した鴨巣Ⅰ・Ⅱ遺跡など国家側の影響が考えられる集落が所在している。ただし、樋口遺跡の木製祭祀具のセット関係から見てみると図7-52に見られるような脚部の作りが短いタイプが遺構外から出土している程度で、明確な人形が伴わず律令的な祭祀形態から欠落している要素が認められる。

10世紀後半以降の壕・濠をめぐらす集落の出現期以降の集落からも木製祭祀具が出土する事例があるが、近年までその事例はごく少量の断片的な状況であった。青森市新田（1）遺跡ならびに新田（2）遺跡の発掘調査の調査結果により量的な成果が得られ、その様相の一部が垣間見えることとなった。10世紀後半～11世紀という時期的には律令期よりかなり下った段階にありながら、桧扇、物忌札、斎串、馬形、刀形、鏃形、陽物などの木製遺物が溝跡を中心に出土した。それ以外に仏教系の木製遺物や馬の頭蓋骨等が出土している。また、緑釉陶器や石帯（巡方）なども出土しており、国家側の遺物の流入は認められる。しかしながら、人形については樋口遺跡同様明確な形状のものが存在せず欠落した要素が認められる。

米代川・津軽地域とも①9世紀後半～10世紀前半②10世紀後半～11世紀代という二つの時期区分のまとまりが抽出可能で、刀形や鏃形などの武器形の出土が目立つなど類似した傾向がある。また、欠落する要素がいずれの地域にも認められることから、時代的に下ったという要素以外に蝦夷勢力の地域ということもあり、祭祀の担い手がどのような勢力であったかが問題となるであろう。

表1 木製祭祀具出土遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	遺跡の時代	種別・点数	出土遺構種別	遺構内の共伴遺物	遺構の年代
1	石上神社遺跡	青森県つがる市	平安, 近世	斎串 2点 馬形 1点	溝跡, 遺構外 溝跡	土師器, 擦文土器, 獣骨 土師器, 擦文土器, 獣骨	10C後～11C 10C後～11C
2	中別所館（奈昆館）遺跡	青森県弘前市	縄文, 平安, 中・近世	斎串 1点	井戸跡	土師器, 木器碗	平安(他の平安時代の遺構からは10C後～11Cの遺物が出土)
3a	新田(1)遺跡	青森県青森市	縄文, 平安, 中・近世	斎串 12点 物忌札 1点 刀形 7点 鍬形 14点 陽物 1点 馬形 24点 鳥形 6点 蛇形 1点 男性神像 2点(大・小)	溝跡 溝跡 溝跡 溝跡 溝跡 溝跡 溝跡 井戸跡, 溝跡	土師器, 須恵器, 擦文土器, 獣骨等 土師器, 木器碗(「西」刻書) 土師器, 須恵器, 擦文土器, 獣骨等 土師器, 須恵器, 擦文土器, 獣骨等 土師器, 須恵器, 擦文土器 土師器, 須恵器, 擦文土器 土師器, 須恵器, 擦文土器 大: 土師器 小: 土師器, 須恵器, 擦文土器等	10C後～11C 10C後～11C 10C後～11C 10C後～11C 10C後～11C 10C後～11C 10C後～11C 10C後～11C
				仏像手(未製品) 火炎光背 水瓶(未製品) 塔身	井戸跡 溝跡 井戸跡 溝跡	土師器, 木器碗, 木器碗(未製品) 土師器, 塔身 土師器, 仏像手, 木器碗, 木器碗(未製品) 土師器等	11C 前 11C 11C 前 11C
3b	新田(2)遺跡	青森県青森市	縄文, 平安, 中・近世	馬形 2点	溝跡	土師器等	11C
4	近野遺跡	青森県青森市	縄文, 弥生, 平安	斎串 2点	谷	土師器, 須恵器, 木製品(箸主体)	10C 前
5	細越遺跡	青森県青森市	縄文, 平安, 中・近世	斎串 2点	溝跡	土師器	10C 前
6	野木(1)遺跡	青森県青森市	縄文, 弥生, 平安	斎串 3点	水場遺構	土師器, 須恵器, 木器碗, 箸状木製品	9C後～10C中
7	宮元遺跡	青森県青森市浪岡	縄文, 弥生, 平安	斎串? 2点	溝跡	土師器, (須恵器)	10C後～11C
8	樋口遺跡	秋田県能代市	平安	斎串 51点 鍬形 4点 人形? 3点	捨場, 溝跡, 遺構外 捨場 捨場, 遺構外	土師器 土師器 土師器	10C 第2 四半期 10C 第2 四半期 10C 第2 四半期
9	胡桃館遺跡	秋田県北秋田市	平安	斎串? 5点 馬形? 1点	トレンチ等 トレンチ	須恵器 須恵器	9C後～10C初 9C後～10C初
10	地藏岱遺跡	秋田県北秋田市森吉	旧石器, 縄文, 平安, 中世	斎串, 刀形, 刀子形等	水場遺構, 溝跡	土師器	10C 後半, 中世

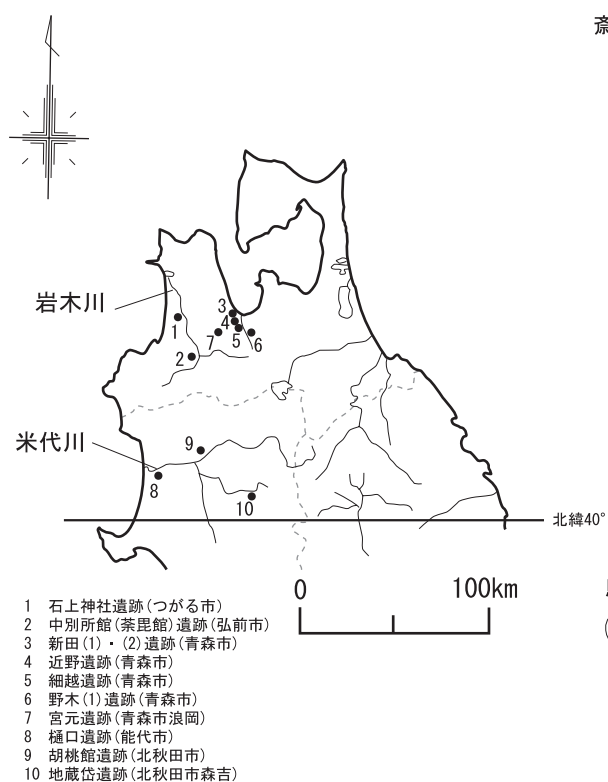


図1 木製祭祀具出土遺跡位置図

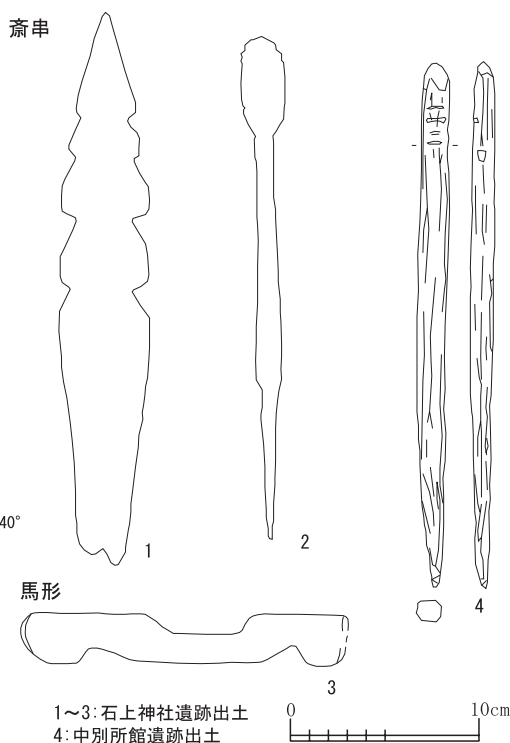


図2 石上神社遺跡・中別所館遺跡出土木製祭祀具

新田(1)遺跡
斎串

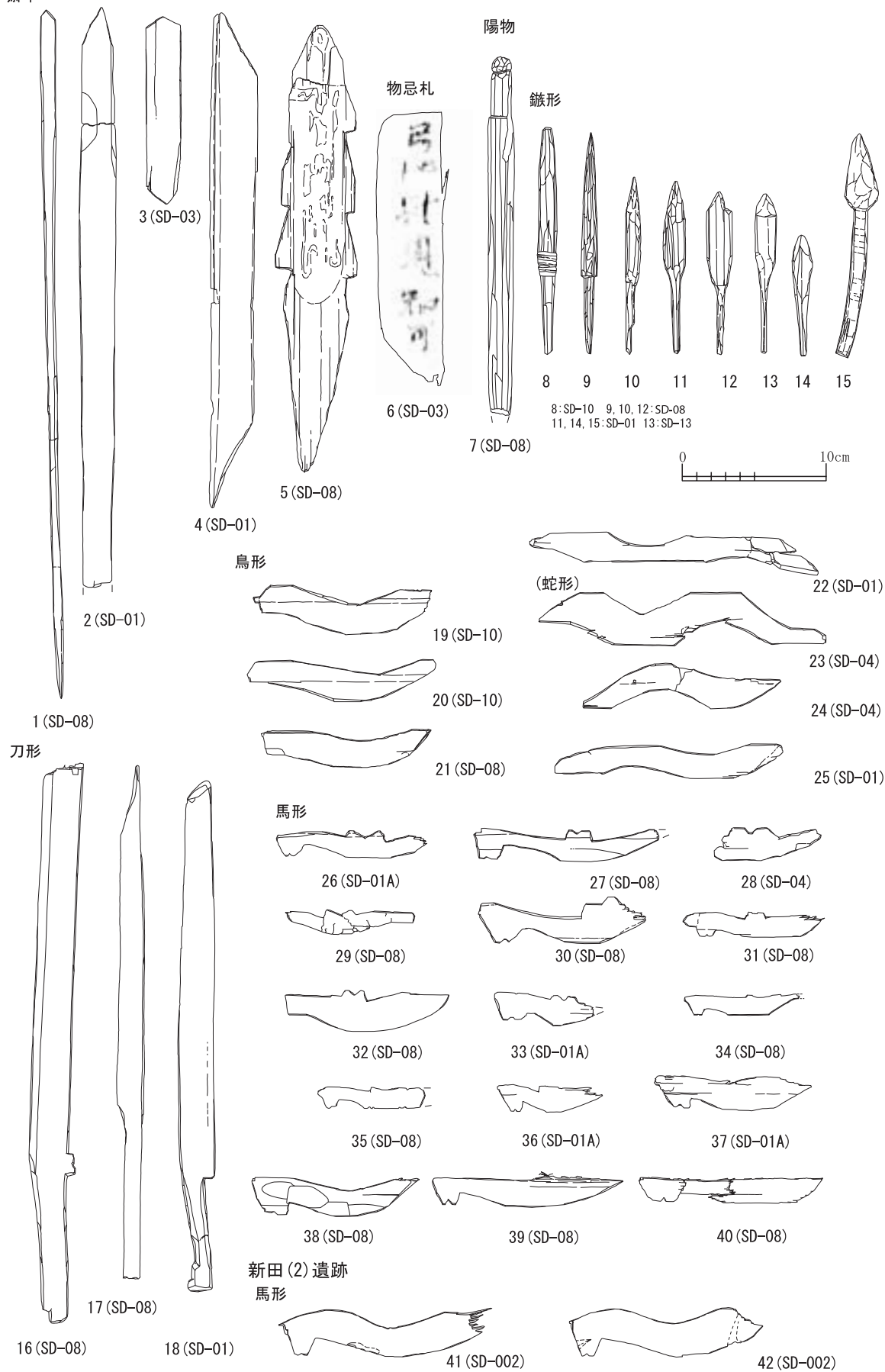


図3 新田(1)遺跡, 新田(2)遺跡出土木製祭祀具

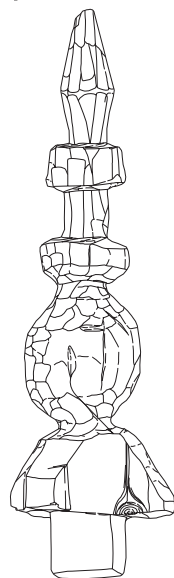
※カッコ内は出土遺構名

新田(1)遺跡

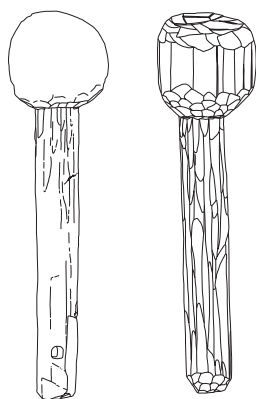
男性神像



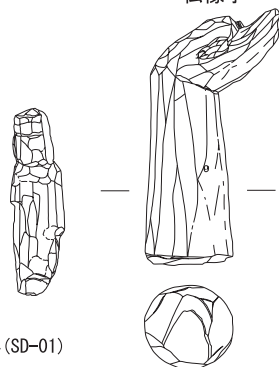
塔身



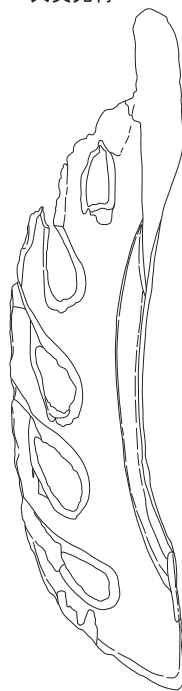
仏像持物



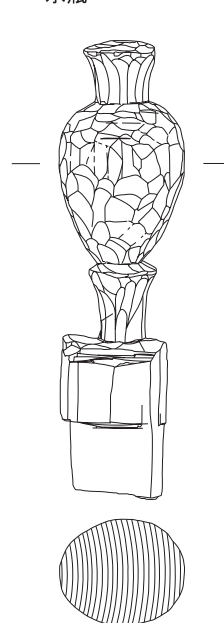
仏像手



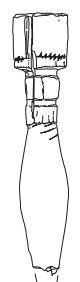
火炎光背



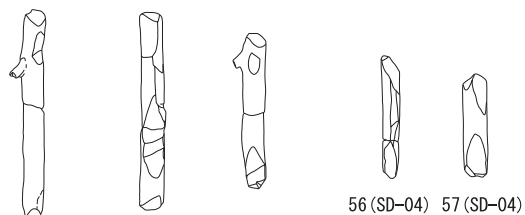
水瓶



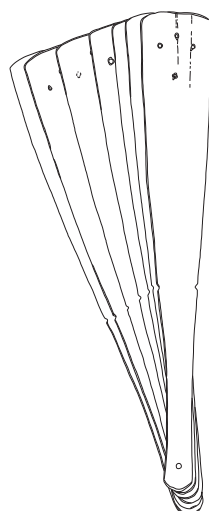
用途不明



広葉樹枝



桧扇



木筒形木製品

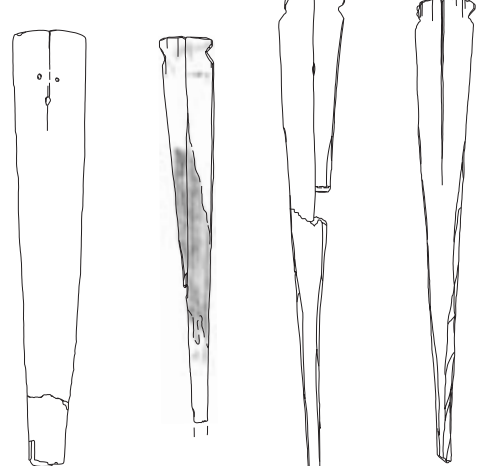


図4 新田(1)遺跡出土木製品(仏教系・その他)

斎串

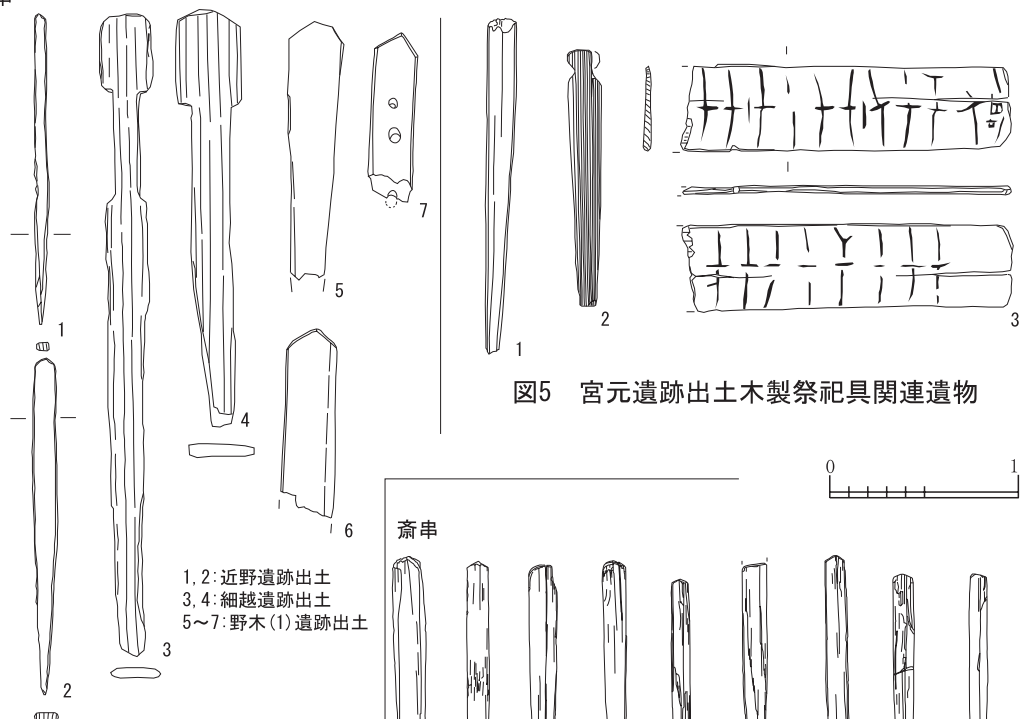


図5 宮元遺跡出土木製祭祀具関連遺物

図4 近野・細越・野木(1)遺跡出土木製祭祀具

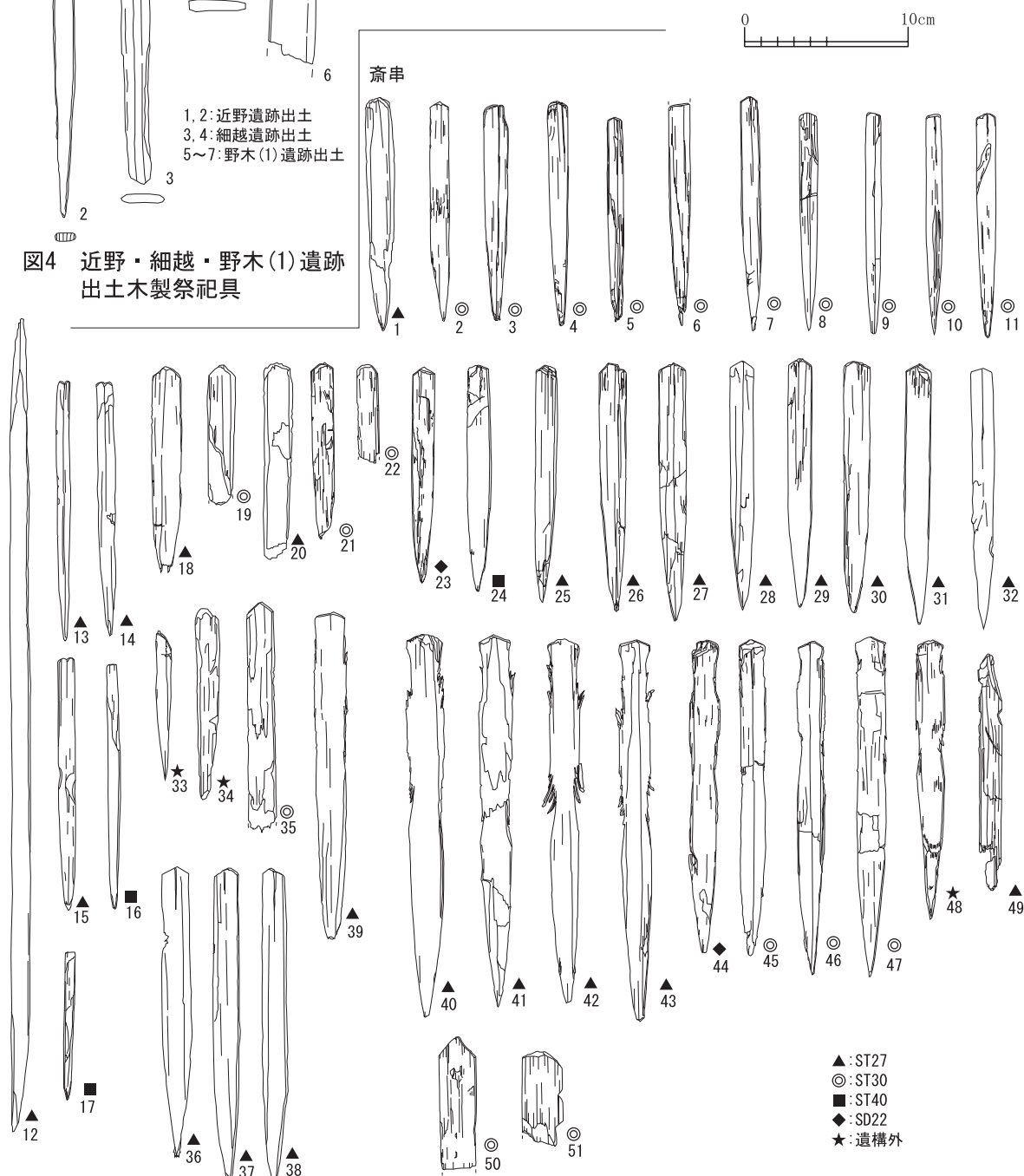


図6 樋口遺跡出土木製祭祀具

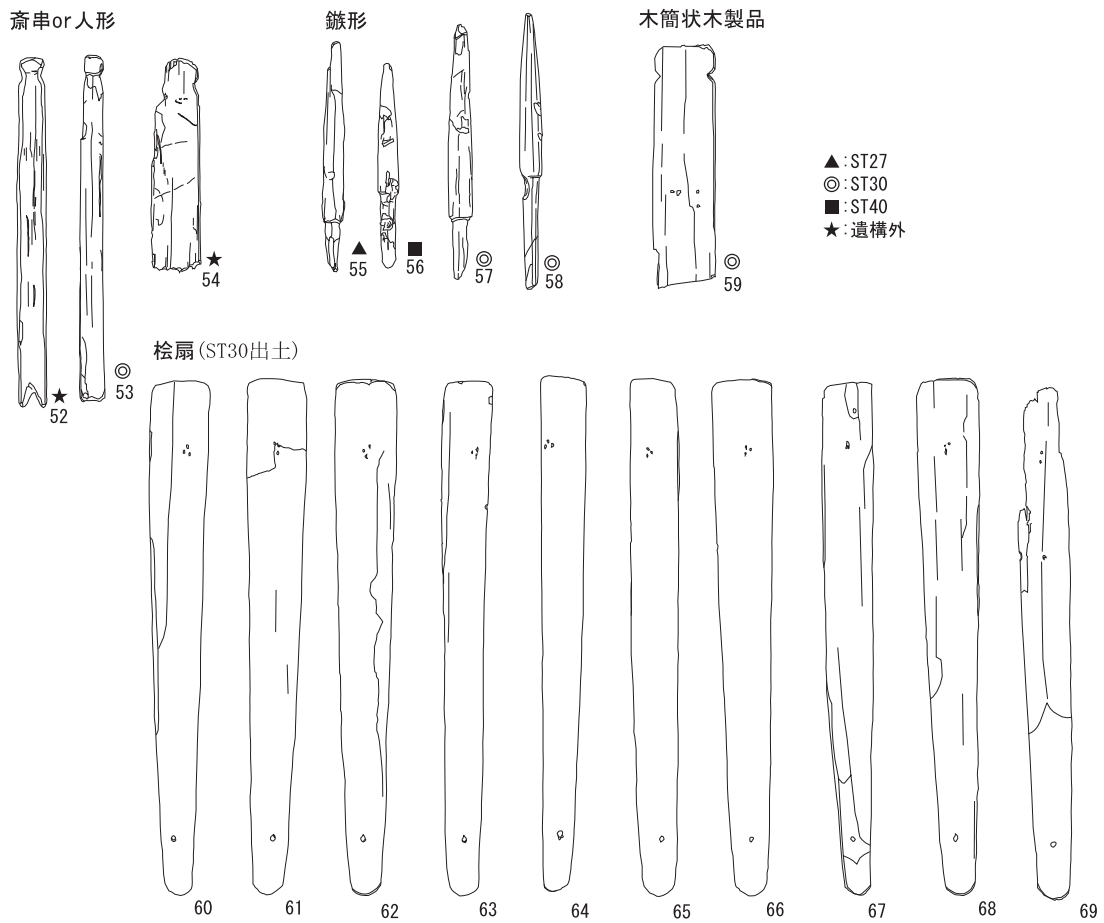


図7 樋口遺跡出土木製祭祀具等

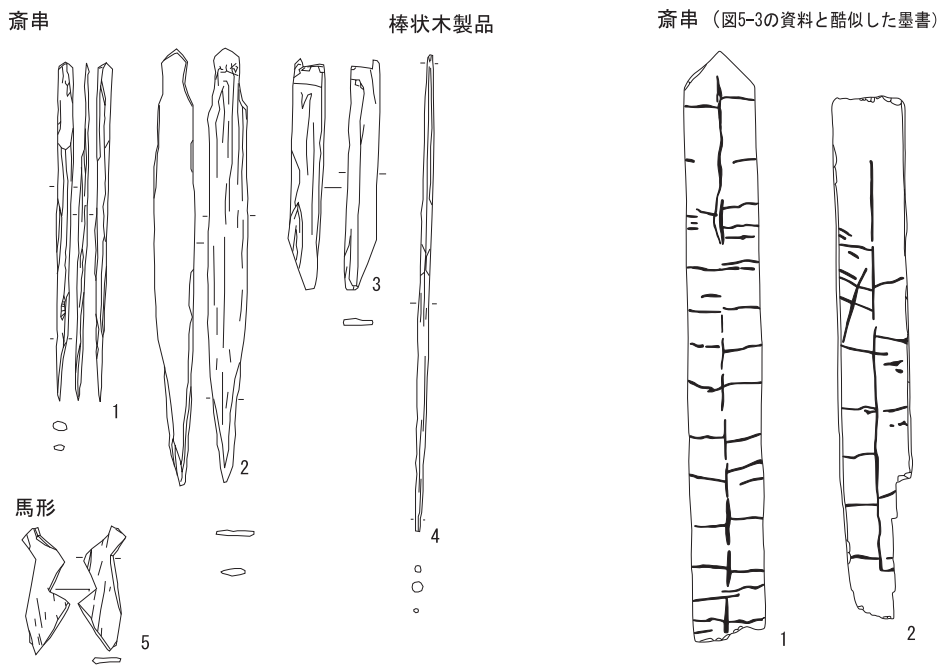


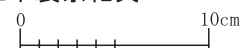
図8 胡桃館遺跡出土木製祭祀具等

斎串（図5-3の資料と酷似した墨書）



※秋田県埋蔵文化財センター所蔵
※本図は秋田県埋蔵文化財センターの原図複写図を再トレースして作成

図9 地蔵岱遺跡出土木製祭祀具



討論と展望

大西 顕（財団法人石川県埋蔵文化財センター）

今回の研究会は古代木製祭祀具をテーマに行われた。しかし、該期の木製祭祀具は基本的に中央から発信されるものであり、環日本海地域の枠組みで討論を行うことについては、当初より困難が予想された。しかし各地から参加していただいた発表者の方の尽力により、各地域の様相について多くを学ぶことができた。

まず、斎串・人形といった律令的祭祀遺物が用いられ始める開始時期の問題では、但馬地方が最も早く7世紀後半の砂入遺跡で確認される。西は九州太宰府周



辺、元岡・桑原遺跡群で8世紀前半に見られる。東では、越中が8世紀後半頃、越後が清水瀧周辺域で8世紀中頃、出羽地域で8世紀末であり、米代川流域から津軽地域を除けば、9世紀までにはほぼ伝播したことが伺える。

ただし、木製祭祀具が少ない地域も見られた。松尾氏は木製祭祀具の分布が希薄な地域として出雲地域をあげている。出雲地域は国造勢力により独自の祭祀体系が存在した可能性がある。これに対し、加賀、越中地域は、濃厚な木製祭祀具の分布地域であり、初期荘園の成立に伴い中央から直接伝わったものと推定される。また、全国レベルでは静岡県で特に多く出土しており、地方でもその伝播浸透には差が認められる。

また、祭祀遺跡のなかにも、木製祭祀具が少ない遺跡と、木製祭祀具が大量に出土する遺跡が認められた。前者は、石川県指江B遺跡や島根県青木遺跡であり、両者とも神社又は神社関連遺跡である。逆に、兵庫県砂入遺跡・袴狭遺跡、石川県小島西遺跡といった官衙に付随する祭祀遺跡では、大量に用いられている。祭祀の内容がそれぞれ大きく異なることが予想される。また、向井氏は、墨書土器、斎串、人形がそれぞれ異なる場所から出土する傾向があり、祭祀により使用する道具が異なっていたことを指摘している。古代祭祀の内容は多様であり、使用される道具、組み合わせも多様であったことが予想される。その意味で、元岡・桑原遺跡第15次出土木簡には祓い具が具体的に列挙されており極めて重要な資料である。ただ会場の吉岡先生から、斎串が記載されていない、との指摘があったとおり、大量に出土する斎串は使用法が依然不明確である。

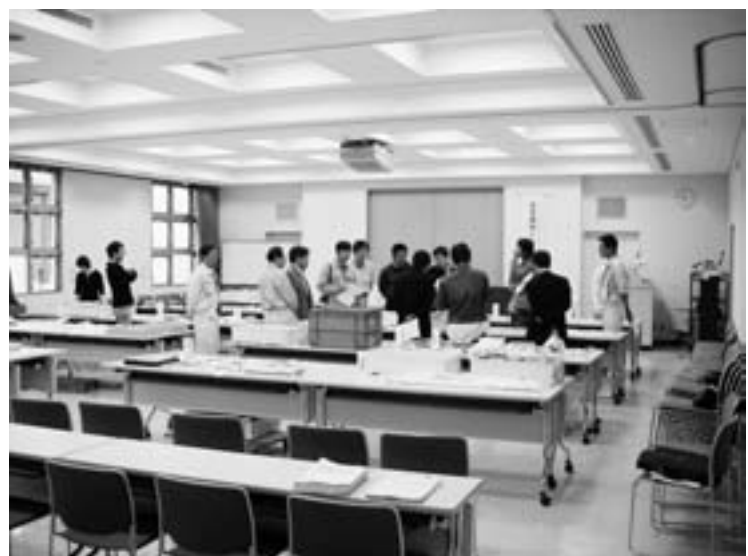
地域的に特徴的な遺物として、一本足の人形がある。越中や播磨などで限定的に出土している遺物で、地域的につながりを持つのか課題である。清水瀧周辺で多用される盤類や、九州の芯持ち材で製作される舟形も特徴的である。また、出羽地域は都からの距離に比して、濃厚に律令的祭祀遺物が分布することも驚かされた。また律令期から下った10世紀後半～11世紀にも青森市新田（Ⅰ）



遺跡から木製祭祀具(人形が欠落する)が出土しており、非常に興味深く聞かせていただいた。また、堀沢氏から発表のあった「顔がない人面墨書土器」の発表を聞き、墨書がない土師器煮炊具についても、今後注意を要する遺物であると認識した。

今回の研究会で各地域間の共通性も認識したが、古代祭祀も一様でなく、木製祭祀具の受け入れ方にも地域差が存在することも理解できた。

翌日の資料検討会では、七尾市小島西遺跡、羽咋市寺家遺跡、宝達志水町森本 C 遺跡、津幡町加茂遺跡、かほく市指江 B 遺跡、金沢市上荒屋遺跡、戸水 C 遺跡、畝田・寺中遺跡、畝田ナベタ遺跡、藤江 B 遺跡、小松市荒木田遺跡、加賀市松山 C 遺跡などの木製祭祀具、墨書土器等の祭祀具を見学し、検討を行った。木製祭祀具では斎串表面劣化の状態（地面に突き刺した時間）、人面墨書土器では都城のものとの形態差、盤類では焼き印・漆膜の有無など、検討を行った。



資料紹介

白江梯川遺跡の琴とかごについて —資料提示と問題提起—

久田正弘・中川律子・本田秀生・佐々木由香

1. はじめに

石川県小松市内では多量の木製品が出土する遺跡の調査が多く行われ、石川県埋蔵文化財センターは平成14年度に白江梯川遺跡の調査を行った。弥生時代後期の川跡から多くの木製品と共に、鳥取県青谷上寺地遺跡で製作されたと思われる高杯などが出土した。当センターではその希少性や重要性を鑑み、平成15年「いしかわの遺跡No.15」『石川県埋蔵文化財情報第10号』に写真資料を提示した。その後工業善通・高垣陽子氏による資料調査により重要な教示を得たので、平成17年『石川県埋蔵文化財情報第14号』で一部の資料紹介を行なった。ようやく平成19年度から遺物整理事業が開始され、木製品の実測や樹種同定作業などを始めたばかりであるが、今回も早期の資料化を行うこととし、琴を中川氏に、かごを本田・佐々木氏に資料提示と問題提起をお願いした。また放送大学の笠原潔教授には博士論文の提供や原稿指導を受けており、感謝しております。(久田・中川)

2. 概要

白江梯川遺跡は小松市白江町の北西側に位置し、発掘調査は河川改修事業に係わる堤防設置部分であり、現在の梯川の左岸にあたる(第1図)。当時の川跡は大きく蛇行しており、川幅は60m以上で、弥生後期前半～後半の土器を主体に、中期末と後期末の土器が若干出土した。木製品は東岸の肩部において、何層も自然堆積の状態で出土した。取上げ層位は大きく4層に分かれており、琴は最上層(－0.03m)から舟部材や建築部材などと出土(写真1～3)し、かごは最下層(－1.05m)から壊れた面を上にして出土(写真4)した。(久田)



写真1 木製品検出状況



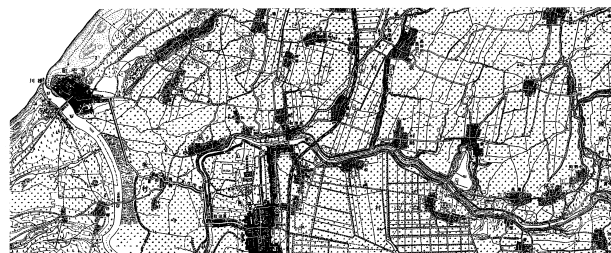
写真2 琴出土状況



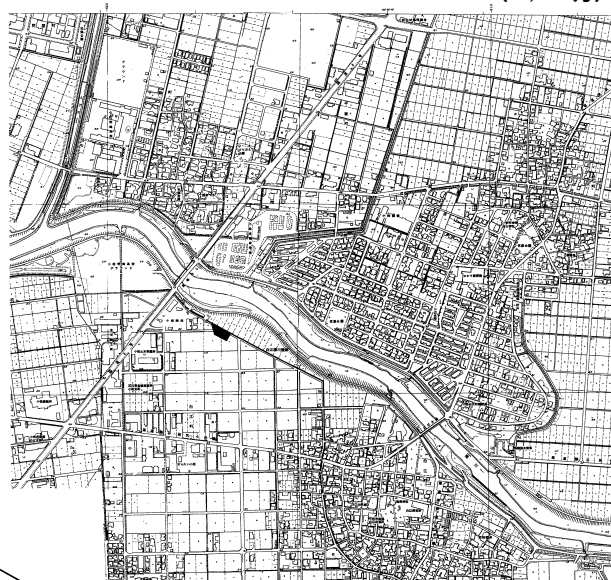
写真3 琴全景



写真4 かご出土状況



(1/2万)



— 54 —

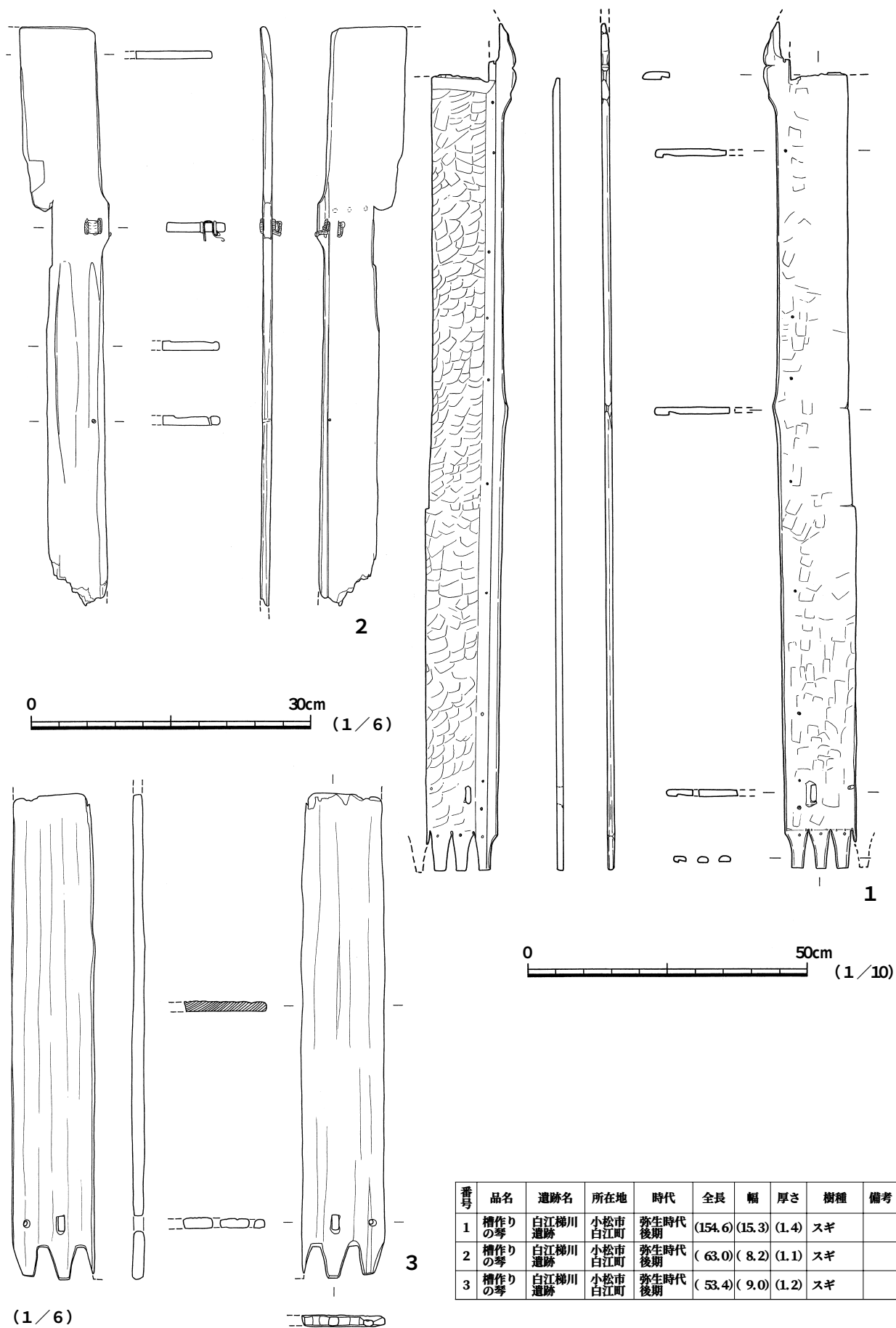
3. 出土琴について

白江梯川遺跡からの出土品のうち、確実に琴といえるものは3点ある（第2図1～3）。いずれも弥生時代後期の川跡から多量の木製品とともに出土した。周辺の遺跡から出土した琴との比較検討を交えながら問題を提起していくこととする。なお、本稿を執筆するにあたり、放送大学の笠原潔教授に原稿を読んでいただき指導していただいた。それらを今回の資料検討や考察にも反映している。

第2図1は槽作りの琴の上板である。響孔に沿って縦方向（木目方向）に約半分に折れ、琴頭の一部も破損している。本来の大きさは、全長は約160cm、幅25～27cmほどの大型の琴であったと推測される。材はスギの追柂目材で木目幅は広い。全体の形状は琴頭から琴尾までほぼ同一幅で推移し、概ね長方形をなすが、胴部中央側縁の一部に僅かに張り出した部分がある（写真5）。器体の表面は滑らかに磨かれているのに対し、裏面はほぼ全面に手斧痕がある。共鳴槽を装着する部分は斜めに切り込まれた溝状になっており、そこに磯板（槽の側板）をはめ込んでいたと思われる。磯板は木釘で固定され、右側面寄りに10箇所の木釘孔と木釘の残存が確認できる。琴尾側の小口板の装着痕は確認できなかった。

琴頭側は、側縁が雲のように波打つという、これまで出土した琴には見られない特異な形状を持つ（写真8）。残念ながら一部が欠損しているため、琴頭部全体の形状は把握できない。集弦孔は無く、弦は琴頭端部に残る突起に固定されていたと考えられる（注1）。胴部中央には他の琴には見られない形状の響孔（サウンドホール）がある。響孔はちょうどアルファベットの「I」の字のような形をしてスリット状に切り込まれていたと思われる（写真7）。琴尾には4本の突起が現存している。このうちの3本は完存しているが、残る1本は本体が縦に折れた結果、破損している。突起は板の表面に設計線を引いた後、その線に沿って小孔を穿ち、それを目印に削り出している（写真6）。本来の突起数は、響孔がスリット状で中心線上にあったと考えれば6突起であるが、響孔の幅が広ければ7突起であったことも考えられる。各突起の根元には弦を通した貫通孔がある。突起からわずかに離れたところに、長さ3.2cm、幅0.5cmの長方形の孔が貫通している（写真6）。孔の縁にはさらに浅く切り込まれた部分があり、上部から別材をはめ込む構造になっている。すぐ脇に小孔があることから、別材ははめ込まれた後、この孔を利用して固定されていたことも考えられる。しかしこうした別材部品をはめ込むための孔は、白江梯川遺跡出土のもう1点の琴（第2図3）以外には他に類例を見ないので、何の目的で使われたかは不明である。琴中央部の割れ目には補修孔がある。本体に亀裂が入ったか折れたために補修したと考えられる。これは、琴が補修後もしばらくの間、使用されていたことを示すものである。

第2図2・3も槽作りの琴の上板である。2は琴頭と集弦孔、側縁の一部が残る断片で、木目幅の細かいスギの板目材である。琴の胴部は直線的に伸びているが、集弦孔付近で側面が外側に張り出している。その後、琴頭に向かって僅かに幅が狭くなっていく。琴板中央寄りの折損箇所には集弦孔の一部が残る。集弦孔の形状は不明であるが、集弦孔の琴尾寄りの部分には浅く段状に彫り込まれた窪みがある。弦固定用のものか、装飾的なものか定かではないが、別部材をはめ込んでいた可能性もある。琴板表面は成形後に磨かれている。裏面は風化が進んで手斧痕は見えない。磯板の当たった痕跡や溝の掘り込みなどは無い。共鳴槽の装着には木釘留めと榫巻き・楔留めの双方を併用している。側面の膨らんだ部分では、琴の上板と槽の磯板とを榫巻きして固定した後、隙間を楔で充填する固定法が取られているが、そこから20cmほど離れた場所には直径0.3cm程の木釘が一箇所残存している。榫巻き・楔留め用の孔の間隔から、磯板の厚さは0.9～1.0cmほどであったと思われる。集弦孔の位置から推定すると、本来は琴頭側で幅15～16cm、琴尾側で幅20cm程の琴だったであろう。



第2図 石川県小松市白江梯川遺跡出土琴

3は琴尾側の断片で、突起が3本残る。スギの追柂目材で木目幅は細かい。側面は直線状である。琴尾突起の付け根に木釘孔が貫通していることから、槽の磯板は木釘で固定されていたであろう。琴板表面は風化が著しく成形痕は認められない。一方の面は明らかに丸みを持たせてあり、こちらが表面であると判断できる。これに対して、裏面は平坦で、手斧痕などは見えない。端から二番目の突起根元に1.9×1.1cmの長方形孔が貫通している。これに類した孔は第2図1の琴にもあるが、孔の用途は不明である。

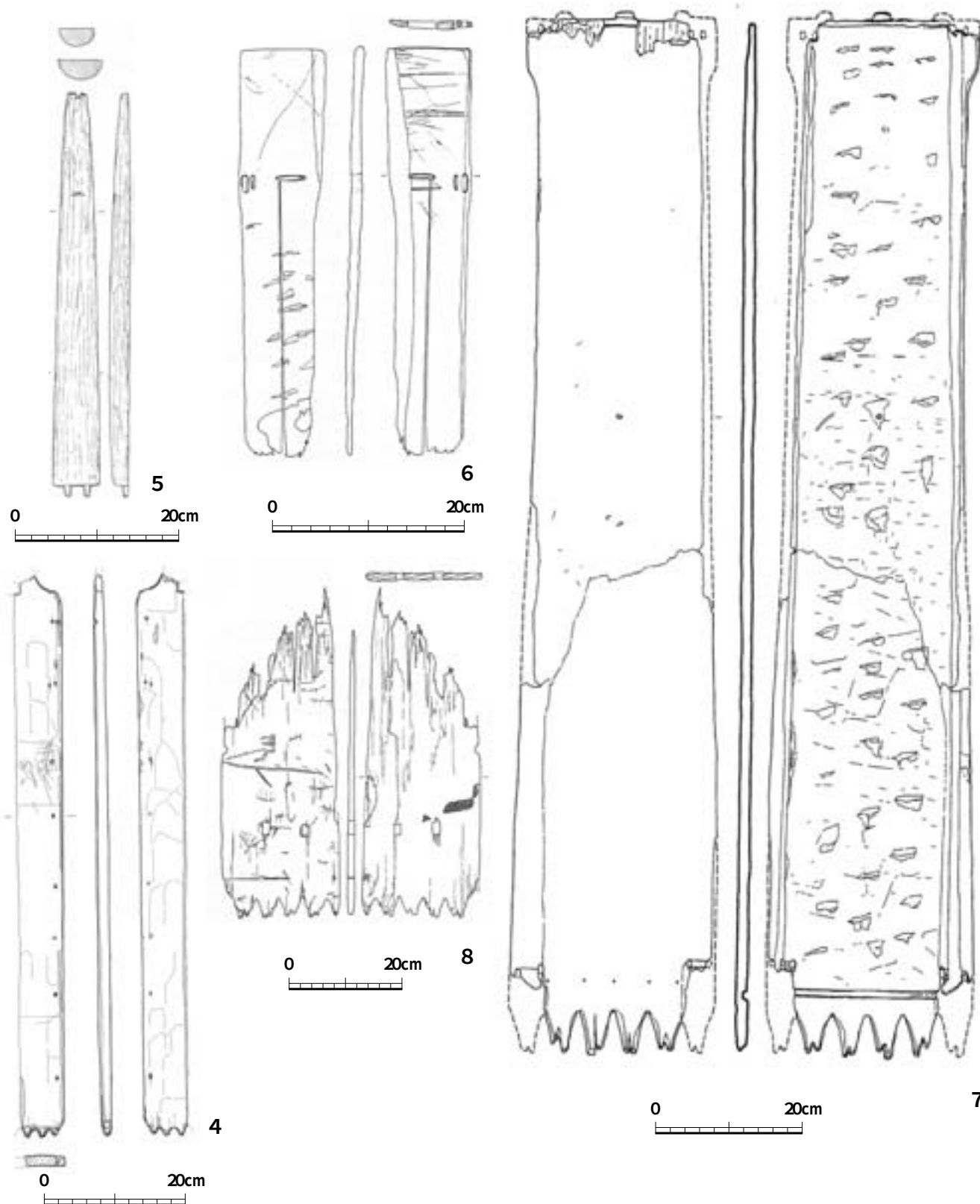
石川県内遺跡の出土例

今回、白江梯川遺跡の琴を資料紹介するにあたり、周辺の遺跡から出土した琴資料の調査も行った。これまでに、同じ小松市内の八日市地方遺跡から槽作りの琴が1点、金沢市の西念・南新保遺跡から2点の槽作りの琴と筑状弦楽器が1点、同市薬師堂遺跡でも槽作りの琴が1点出土した。その他、河北郡津幡町加茂遺跡でも琴が1点出土していることが新たに判った。

小松市八日市地方遺跡（橋本ほか2003）の槽作りの琴の上板（第3図4）は、弥生時代中期後半（Ⅳ期）のもので、石川県内では最も古い時期の琴である。残存長78.2cmのやや小型の琴で、木目に沿って縦にほぼ半分に折れている。側縁は直線的に伸びるが、琴頭部の集弦孔の脇で急に幅を減じるよう、削り込まれている。琴頭部が欠損しているため、琴頭の形態は不明である。琴尾突起は3本残り、突起付け根には設計線が引かれている。共鳴槽固定用の木釘が8箇所を観察される。上板表面には舟の線刻画がある。舟はゴンドラ型で櫂が描かれている。琴頭部に残る集弦孔が琴板中心線上にあったとすると、本来は幅12～13cm程で6突起を有する琴であったと推定できる。

金沢市西念・南新保遺跡では昭和59・60年度調査で筑状弦楽器（第3図5）と槽作りの琴の上板（第3図6）が各1点出土した（楠ほか1989）。その後、昭和62年度調査で大型の槽作りの琴の上板（第3図7）が1点出土した（楠ほか1992）。第3図5は、報告書では「琴状木製品」と掲載されているが、「筑状弦楽器」と呼ばれる弥生・古墳時代の弦楽器である。筑状弦楽器としては、奈良県橿原市四分遺跡（藤原京下層）や静岡県浜松市角江遺跡からの出土例と並ぶ、古い時期に属する資料である。6cm幅から徐々に細くなる棒状を呈し、断面が半月形の典型的な筑状弦楽器の形状を持つ。頭部は集弦孔部分で欠損している。集弦孔の切り込みは底面から入る。尾部には2突起が現存するが、同列上に突起痕があることから、本来は5突起であったと推定される（写真10）。器体表面の琴尾寄りの部分では、無数の細かい傷痕が2ヶ所に集中している。現段階ではこれが演奏時の接触による使用痕であるのか、腐食によるものかは判断できない。この製品には古墳時代の筑状弦楽器に見られるような突起下部の挟り込みは無い。第3図6は槽作りの琴の上板の琴頭側の断片である（注2）。本来は全長120cmを超える大型の琴の上板であったと思われる。側面の一部に膨らみを持つ点で、白江梯川遺跡の琴頭破片（第2図2）と良く似た形態を示す。この膨らみ部分のすぐ横には、槽固定用の結縛孔と集弦孔が並んでいる。側面には木釘孔もあることから、木釘留めと棒巻きの双方を併用していたことが分かる。集弦孔は横長のスリット状に開き、その琴尾寄りの部分は方形に浅く彫り込まれている。この部分には別材部品がはめ込まれ、木釘で固定されていたようで、小孔が3箇所にある（写真9）。この別材部品は、強く張った弦が集弦孔の縁に喰い込むのを防ぐためのものであろう（注3）。琴頭側の表面と裏面には線刻がある。また琴中央裏面には手斧ではつた痕跡が連続して刻まれている。堰材に転用した状態で見つっている。

薬師堂遺跡の琴（第3図8）は平成15年度の発掘調査で見つかった（出越ほか2006）。槽作りの琴の上板の琴尾側の断片で、琴央付近で折れている。針葉樹の木目幅が細かい板目材から作られている。琴尾突起寄りの側縁に、一箇所木釘孔が残る。突起は最側端のものは中央4突起の半分の形状である



番号	品名	遺跡名	所在地	時代	全長	幅	厚さ	樹種	備考
4	槽作りの琴	八日市地方遺跡	小松市日の出町	弥生時代中期後半	(78.2)	(6.5)	—	スギ	舟の線刻あり
5	筑状弦楽器	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	弥生時代後期	(50.2)	(6.6)	5.2	針葉樹胚目材	5突起
6	槽作りの琴	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	弥生時代後期	(62.4)	(13.2)	1.8	針葉樹追胚目材	
7	槽作りの琴	西念・南新保遺跡	金沢市西念町・南新保町	弥生時代後期	139.4	28.0	1.9	スギ	
8	槽作りの琴	薬師堂遺跡	金沢市薬師堂町	弥生時代後期～終末期	(40.2)	(20.7)	(1.15)	針葉樹板目材	

第3図 石川県内の出土琴



写真5 琴（第2図1）側縁部の張り出し



写真6 琴尾側の補修孔と方形孔

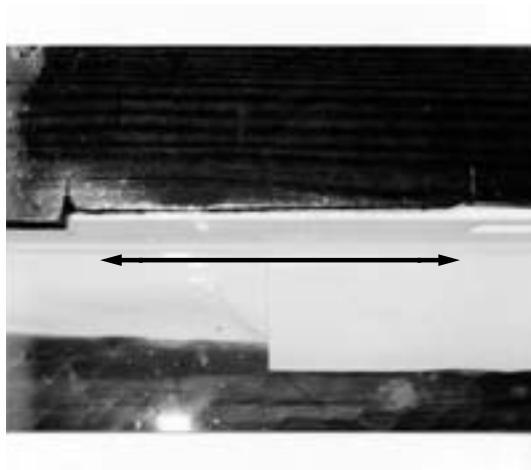


写真7 琴中央の響孔（サウンドホール）



写真8 琴頭側側縁の装飾



写真9 集弦孔と別部材装着箇所



写真10 琴尾側の突起欠損状況

写真5～8 白江梯川遺跡の槽作りの琴（第2図1）
 写真9 西念・南新保遺跡槽作りの琴（第3図6）
 写真10 西念・南新保遺跡筑状弦楽器（第3図5）

が、全部で6突起であったと思われる。中央の4突起頂は、西念・南新保遺跡の琴（第3図7）と同じように、頂部に切り込みが入っている。板面中央には1.9×1.3cmと2.5×1.3cmの二つの長方形の孔が並んで穿たれている。共鳴槽の小口板固定用の孔にしては琴中央側に寄り過ぎており、何のための孔か、用途は不明である。裏面に磯板や小口板の当たった痕跡は無く、設計線も見られなかった。ただ裏面には虫食いの痕や一部炭化したところがある。

考 察

以上、白江梯川遺跡から出土した琴を資料紹介するとともに、石川県内の遺跡から出土した琴の調査結果をまとめた。次にこれらの琴を比較検討することによって見えてきた特徴や類似性など考察を交えて見ていくこととする。

形状の特徴 白江梯川遺跡の槽作りの琴（第2図1）は、基本的な構造はこれまでに出土した他の琴と同じであるが、部分的には特異な形状を示す。特に雲のように弧を描く琴頭側縁の形状や、I字形の響孔の形状は、他に類を見ない（写真8・7）。また、側縁の一部が外に張り出す形状（写真5）は、同じ白江梯川遺跡から出土した琴頭破片（第2図2）や西念・南新保遺跡の琴頭片（第3図6）にも見られる。この地域の琴特有の形態といえよう。

上板裏面（共鳴側）の手斧痕 今回調査した資料のうち、白江梯川遺跡出土の1点と、西念・南新保遺跡出土の2点の琴の上板裏面には、手斧痕が見られた。同様の手斧痕は、新潟県刈羽村西谷遺跡出土の琴にも見られる。こうした手斧痕は、共鳴槽を装着する琴にしばしば見られるものである。一説には音響効果を高めるために意図的に施したものと いわれるが、西念・南新保遺跡の2点の琴に見られるような、手斧の刃を立てて粗い傷を連続して付けている例はほかにあまり見ない。

集弦方法 白江梯川遺跡の槽作りの琴（第2図1）は、西念・南新保遺跡の槽作りの琴（第3図7）と同じく、琴頭端に削り出された突起に弦を固定したと思われる。類似の弦固定法は、新潟県刈羽村の西谷遺跡出土琴にも見られる。出土地は離れているが、この時期、こうした琴製作上の「規範」が働いていたことが考えられる。また、西念・南新保遺跡の琴頭片（第3図6）は、集弦孔の手前に別部材を埋め込むための窪みが掘り込まれており、別部材が木釘で固定されていた痕跡がある。同様の掘り込みは、白江梯川遺跡の琴頭破片（第2図2）にも見られる。このように集弦孔の手前を浅く掘り込み、弦受け用の別材を埋め込む例は、これまで弥生時代後期末～古墳時代初頭ないしは古墳時代中期の近畿圏の例が知られていたが、今回、それに先立つ弥生時代後期に北陸地方でも既にこうした手法が取られていたことが明らかとなった。

共鳴槽の装着方法 金沢市西念・南新保遺跡の琴（第3図6）では、琴の上板と共鳴槽とを固定するのに、木釘留めと樺皮留め二種類の方法が併用されていた。西念・南新保遺跡から出土したもう1点の琴（第3図7）も同様であった。この手法は、白江梯川遺跡の琴頭破片（第2図2）でも取られている。この点は、この地域の琴の特徴の一つといえよう。木釘留めと樺巻きを併用する方法は、滋賀県の琵琶湖周辺（近江）の遺跡から出土する琴にも見られる。ただし、この装着法が近江の影響を受けたと考えるには更なる検討が必要であろう。时期的には石川県内の琴のほうが古いため、近江のほうが北陸の琴の影響を受けたことも考えられる。さらにいうならば、この種の装着方法については、二つの文化間の交流によるものだけでなく考えるよりも、もっと広い文化圏で考える必要があるかもしれない。

転用 西念・南新保遺跡の琴頭片（第2図6）は「堰材」へ転用されていた。類似の例としては、大阪府の亀井・城山遺跡出土の琴の上板（古墳時代中期）が堤補強用の杭列の横材に転用されていた例がある。

琴上板に残る方形孔 白江梯川遺跡出土の2点の琴(第2図1・3)は、上板の琴尾寄りの部分に、何かをはめ込むためのものであることを思わせる方形孔を持っている。同様の方形孔は、薬師堂遺跡出土の琴の上板にも二ヶ所ある。これらの孔、もしくはそこにはめ込まれた部材の意味は分からない。孔は、琴廃棄後、板を別な用途に転用した際に開けたことも考えられるが、弦を支えるための何か駒(ブリッジ)のようなものを立てるために開けたことも考えられる。後者であれば、北陸の琴の特徴といえよう。

破損の問題 西念・南新保遺跡の大型琴(第3図7)は、木目に直行するように、板中央で真二つに折れている。広義に見れば、白江梯川遺跡の琴(第2図2・3)や西念・南新保遺跡の琴(第3図6)、薬師堂遺跡の琴(第3図8)も胴央部で折れた例の部類に入るであろう。多くの出土琴が木目に沿って縦方向に折損しているのは自然であるが、他地域でも木目に直行するように琴央部分で折れている例が幾つか確認されている。これらの琴は不要になった時点で意図的に折られた可能性がある。琴が再び楽器として機能出来なくなるように、意図的な廃棄の仕方をしたのではなかろうか。

おわりに

石川県内では低湿地の遺跡調査例が増え、出土木製品の点数は近年飛躍的に増えており、出土琴もそれに伴い県内の出土例が一気に増えることとなった。今後も出土例は増えていくことが予測される。今回石川県内の琴の出土例を調査した結果、この地域独特の形状や構造上の特徴が明らかとなった。本稿は限られた地域の琴の検討に限定したが、今後は、他地域の出土琴との比較や琴製作上の交流関係の有無など、より広域の視点から見ていく必要がある。これからの資料整理と報告書作成に向けてさらに検討を重ねたい。末筆にあたり、助言をいただいた笠原潔教授(放送大学)、資料調査にご協力いただいた久田正弘・大西顕氏(石川県埋蔵文化財センター)、楠正勝氏(金沢市埋蔵文化財センター)に感謝申し上げる。(中川)

注1 笠原潔は「西念・南新保遺跡出土の「槽作り」琴の琴板のうちの1点は、集弦孔を持っておらず、代わりに琴頭端に三つの台形状の「山」を切り出している。琴尾突起から張られた弦は、この三つの山の間の窪みに二手に分かれて導かれ、その後、何らかの仕方で琴頭部に結わえて固定されたものと思われる。」と推察している。

注2 『考古資料大観』に「122-7. 線刻板(左:部分)長62.4cm 弥生時代後期~末(2~3世紀)石川県金沢市西念・南新保遺跡(金沢市教育委員会)」として掲載されている。資料実見の結果、琴と判明した。

注3 集弦孔の手前にこのような別材を埋め込む例は大阪府堺市下田遺跡や滋賀県守山市下長遺跡の槽作りの琴に見られ、兵庫県神戸市の玉津田中遺跡では弦受け用の別部材が単独で出土している。同じような弦受け用の部材を筑状弦楽器にはめ込んだ例は、大阪府茨木市溝咋遺跡、京都府向日市東土川西遺跡、滋賀県守山市古高・経田遺跡出土の筑状弦楽器に見られる。

参考文献

- 伊藤律子 2004 「筑状弦楽器—木製と土製の比較による形態の特徴—」『静岡県考古学研究36』 静岡県考古学会
笠原 潔 2004 『埋もれた楽器—音楽考古学の現場から—』春秋社
笠原 潔 2005 『出土琴と筑状弦楽器の研究』大阪芸術大学大学院芸術研究科平成17年度学位(博士)申請論文
楠 正勝ほか 1989 『金沢市西念・南新保遺跡Ⅱ(金沢市文化財紀要77)』金沢市教育委員会
楠 正勝ほか 1992 『金沢市西念・南新保遺跡Ⅲ(金沢市文化財紀要99)』金沢市教育委員会
出越茂和ほか 2006 『薬師堂遺跡Ⅰ(金沢市文化財紀要229)』金沢市埋蔵文化財センター
橋本正博ほか 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
山田昌久編 2003 『考古資料大観8 弥生・古墳時代木・繊維製品』小学館

4. かごの形状・素材・製作技術

遺跡から出土する編組製品は、全体の形状が不明なものが多く、また編組技法を部位ごとに観察可能な遺物は非常に少ないが、白江梯川遺跡から全体の形状が保存されていて製作技術の推定が可能なかごが出土した。供伴する土器型式から弥生時代後期と想定される。ここではかごの形状の観察と素材の部位別の同定を行い、製作技術について検討する。

カゴの状態 かごは、底部の対角線上、底部側上方から圧力を受けて潰れた状態で出土した(写真4)。クリーニングとポリエチレングリコール(PEG)による含侵・保存処理の後、シリコン型をベースとした展示台が製作され、残りの良い面を上にした状態(出土状態とは表裏が逆の状態)で石川県埋蔵文化財センターにおいて保管されている(写真11)。表面側を見ると、右側縁は裏面に連続しているものの、左側縁は欠損し裏面側には連続せず、また、巻縁部分が失われている。裏面側は、底部角から体部がV字状に欠落するとともに、右側体部は底部と分離した状態にある。現状で幅29.5cm、高さ14cm、最大厚4.5cm、内部には一部堆積物が残った状態である。

形状 本来の形状は変形や欠損のため正確には復元できないが、底部は一辺約10cmの正方形、体部は上方に開き、本体の器高は約12cm、口縁は径約25cmの円形を呈すると考えられる。かごは、底部を網代組み、体部を飛びご目組み、ご目組み、ヨコ添え振り組みで組み、口縁は巻縁で仕上げている。鳥取県青谷上寺地遺跡の出土品を基にした分類の、Ⅰ-A-1類にあたる(野田ほか2005)。『日本原始繊維工芸史 原始編』では籠型土器として、同様な形態のかごを型として製作された籠圧痕土器が紹介されている(杉山1942)。

底部の一辺には、幅0.8cm、厚さ1cm、長さ9.7cmの脚台が取り付けられている。一端は1cm程、もう一端は2cm程先端から入った部分に切欠きを設け、ここに組みひごと同じ材を巻きつけて底部の端付近に取り付けている。相対する脚台は失われている。青谷上寺地遺跡では、かごの上面から同様の部材が出土しており、類似したものとして底部を木材で補強するかごの民俗例が紹介されている(野田ほか2005)。

素材 ひごの樹種は、針葉樹のアスナロである。保存処理後、保管中に落ちた破片と、本体のタテ材、ヨコ材、ヨコ添え振り組み巻き材それぞれ2ヵ所から試料を採取して、横断面(木口と同義)、接線断面(板目)、放射断面(柃目)の徒手切片を作製してプレパラートにのせ、光学顕微鏡下で木材組織の同定をおこなった。その結果、これらはすべてアスナロであった(写真15)。アスナロはヒノキ科アスナロ属の常緑針葉樹で、やや軽軟な材であるが水湿に強い材である。ひごの切片はガムクロールで封入し、永久プレパラートとして、石川県埋蔵文化財センターで保管されている。

ひごの年輪数は3～5年輪程度で、木取りはすべて板目である。ひごの表面に小枝の残る節や段差が確認できることから、直径2～4cm程度の枝、あるいは小径木をへいでひごを製作していることが推定される。白江梯川遺跡と同様の形態や製作技法をもつ青谷上寺地遺跡のかごの素材はほとんどがマタビであり、形状や製作技法は類似していても用いられる樹種に差異が見られた(野田ほか2005)。

タテ材は、幅2～5mm、厚さ1mm以下で、ヨコ材に比べやや厚い。長さは36cm以上、節のある材がやや目立つ。ヨコ材は、幅1～3mm、厚さ1mm以下で、長さはひごの重ね部分から想定すると、短いもので40cm程と思われる。タテ材に比べ幅の狭いひごが使用される。また、体部中央のヨコ材はヨコ材の中でもやや細いひごが使用されている。小枝や節は、ほとんど確認できない。こうしたことから、みかん割りのアスナロ材を調整し、板目にひごをへぎ、樹皮側の幅広の部分をタテ材に、樹芯側の幅狭の部分をヨコ材に使用したとも考えられる。

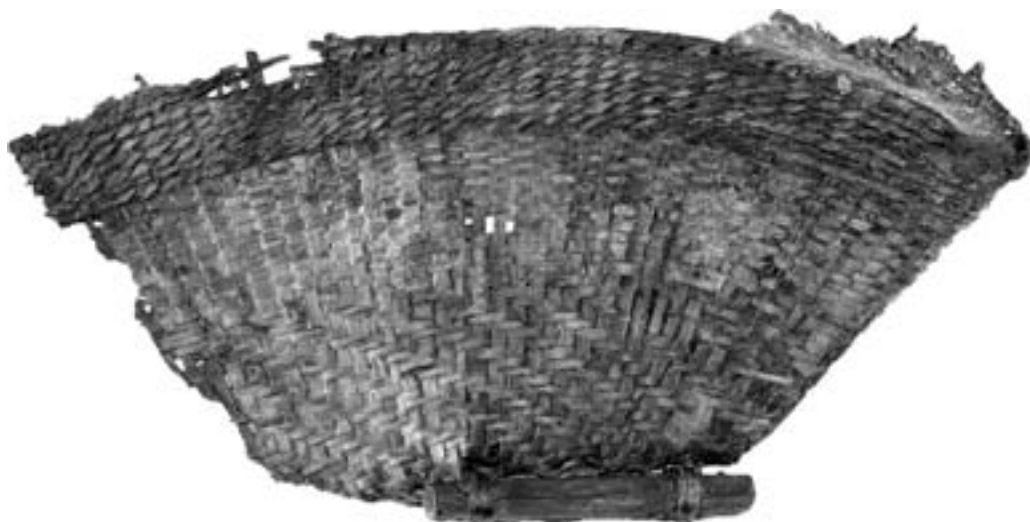


表 面



裏 面

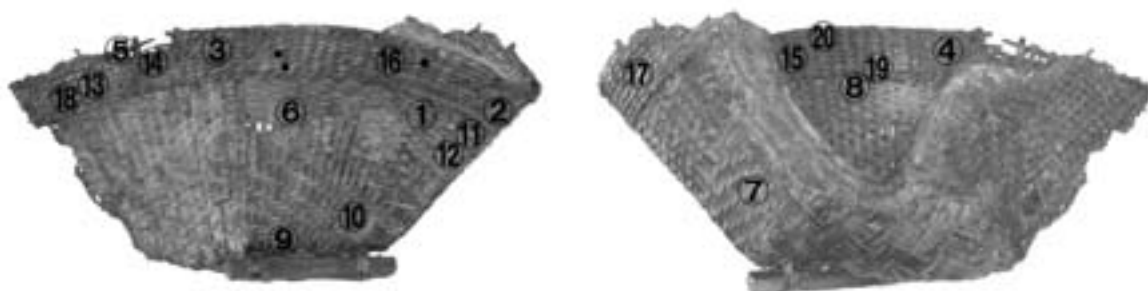
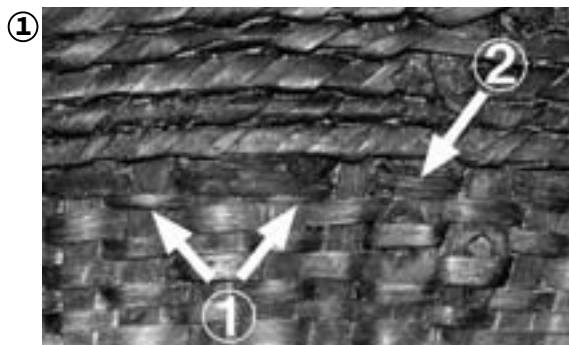


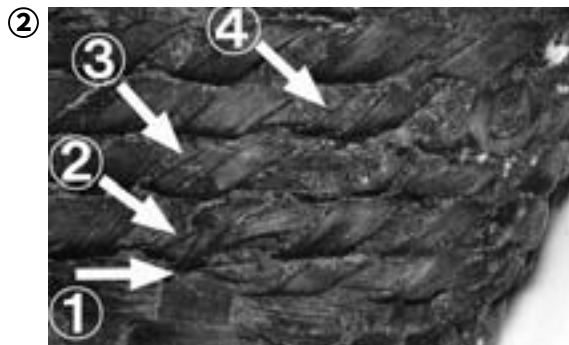
写真11 かごの状態（上・中）と細部写真の位置（下）

ヨコ添え振り組みの巻き材は幅2mm前後、厚さ1mm以下、ヨコ材と同じかやや薄いひごが用いられている。縁巻き材は幅4mm前後、節の有無を除けばタテ材とよく似ている。ヨコ添え振り組みの巻き材は、頻繁に継ぎ足しが行われているが、縁巻き材では確認できなかった。

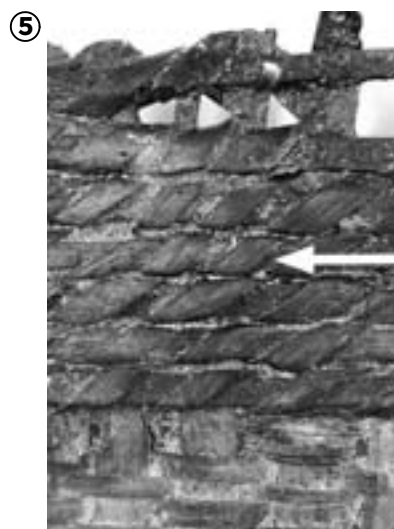
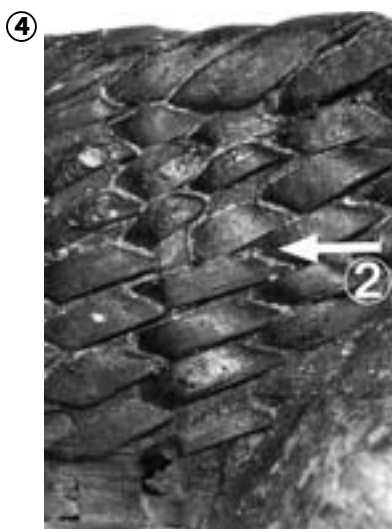
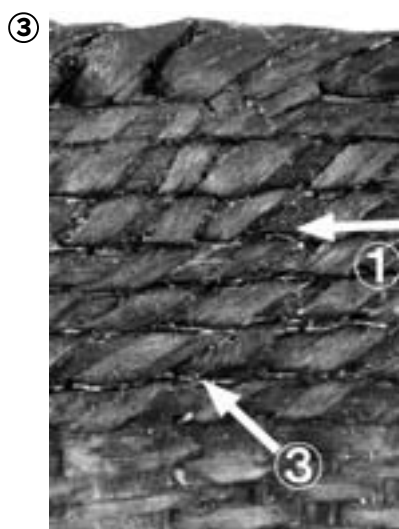
全体的に幅の狭い薄いひごを用いており華奢で繊細なつくりである。タテ材にはやや幅が広く若干



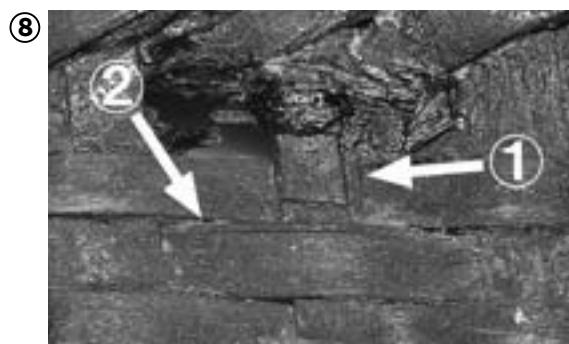
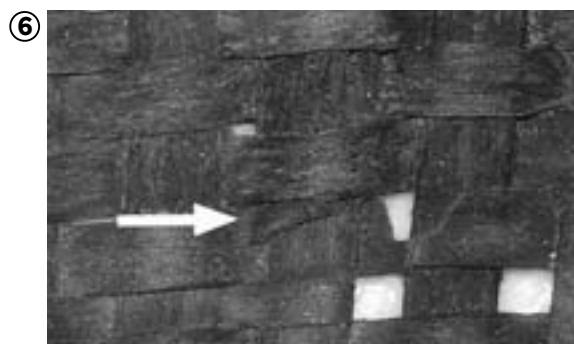
①で見えているヨコ材が②の位置では見えなくなる。巻き上げの終わり。また、②およびその右隣のタテ材には節が確認できる。



①の位置からヨコ添え振り組みが始まっている。②、③、④は重ねられた振り組み材が確認できる。

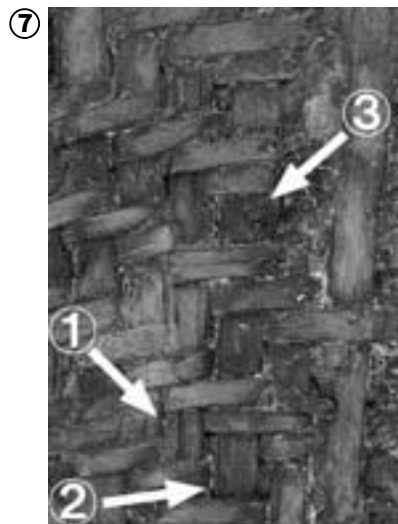


③では①の位置から振り組みが増えている。④は、その裏面で②の位置で振り組みが増える。巻き材の位置が少しずれている。隙間からタテ材が二股に分かれ、ひごを増やしていることが確認できる。また、③－④で振り組材の重ねを確認した。⑤は、別の増し材の状況。矢印の地点で振り組みが増えている。

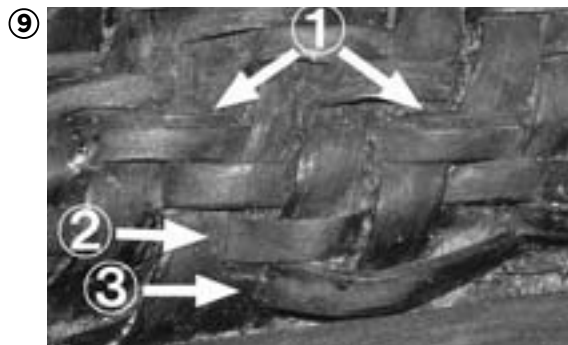


⑥は表面、⑧は裏面である。⑥では矢印の位置で、重ねられたタテ材の端が見える。⑧では①の位置で重ねられたタテ材の端が見える。また、②ではヨコ材が重ねられていることがわかる。

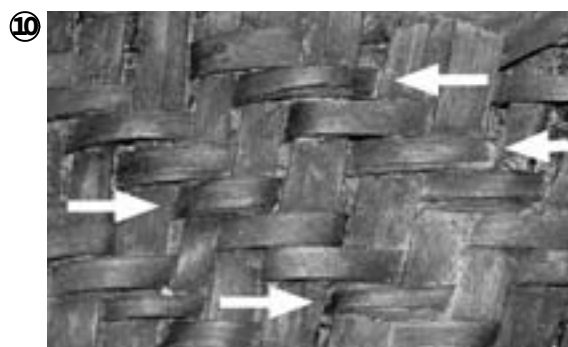
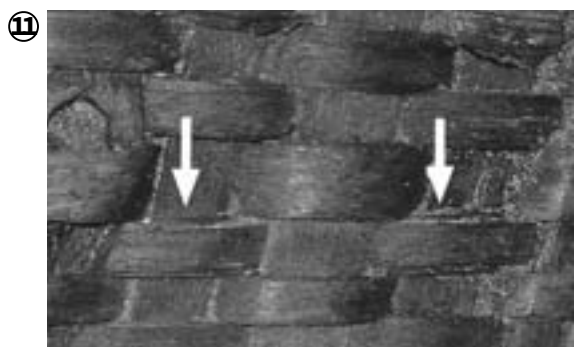
写真12 かごの細部1



①ではタテ材の重ねが確認できる。②ではタテ材に段差がみられ、へぎ材であることがわかる。③では節に小枝が残っている。



⑨の①の位置で重ねられたヨコ材が確認できる。②の列は2本越え、③の列は4本越えて、③の列が底部の一番外側となる。⑩の矢印の列で2越程度のヨコ材の重ねが確認できる。上下に連続、あるいは1段間を空けてヨコ材の継ぎ足しを行っている。



⑪、⑫も矢印の位置でヨコ材の重ねが確認できる。⑨、⑩は体部下部、⑪、⑫は体部中央

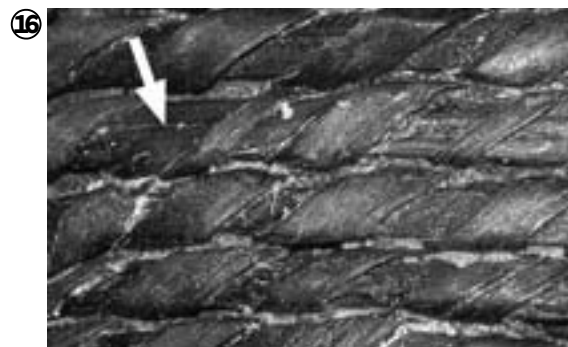
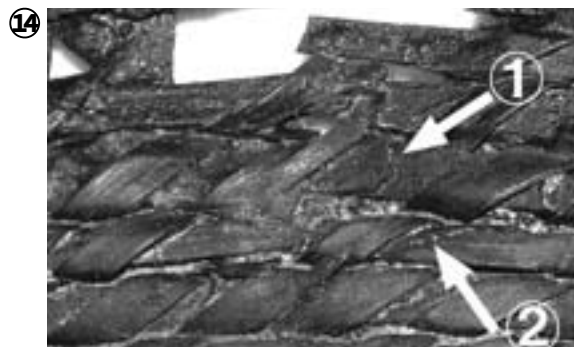
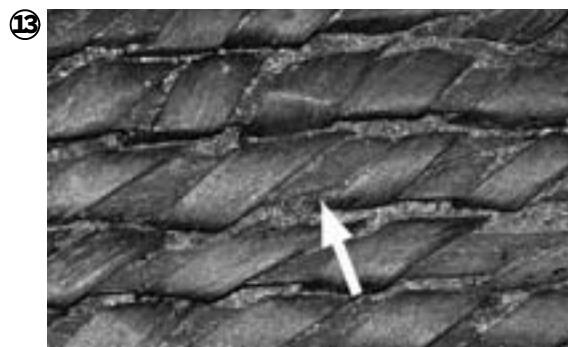
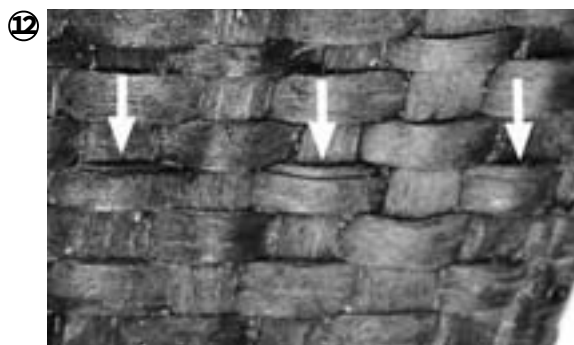
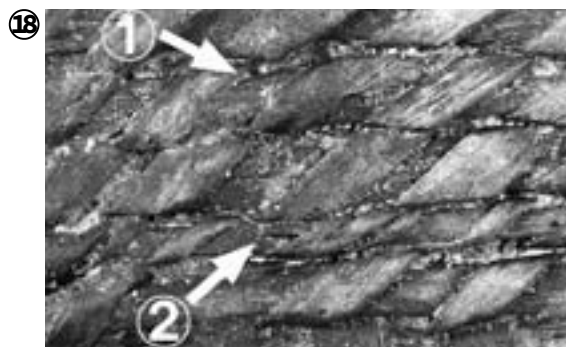
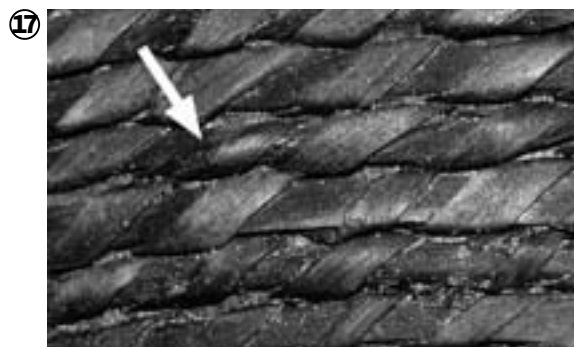


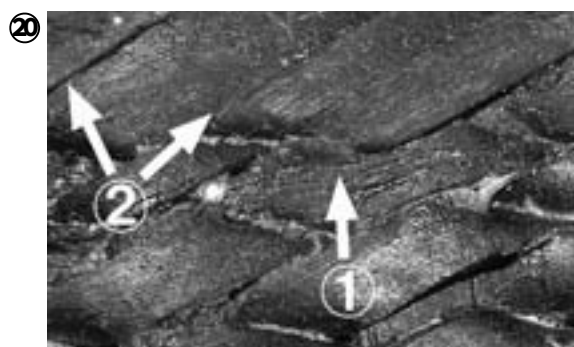
写真13 かごの細部2



⑬、⑭、⑯～⑱は、外面で確認できたヨコ添え振り組みの材を重ねた部分である。他に●の位置でも重ねを確認した。すでに巻かれた巻き材2～3巻きの下に斜めに走る材が確認できる部分と、二重に材が巻かれる部分が確認できる。⑭の②、⑱の②ではヨコ材を重ねている。材の重ね方が異なっている。



⑮、⑲は、内面で確認できた巻き材を重ねた部分である。
⑮は二重に巻かれた部分であるが、①は材が逆向きに折り返されている。
⑲は、本来の巻き材の上に逆方向に走る材が確認できる。



①はヨコ材の端とも考えられるが判然としない。②は縁巻き材であるが、中央が両側の下になっている。2本飛びで巻いていることがうかがえる。材の重ねはまだまだ見落としがあると思われる。

脚台は、底部端の材に縦材と同様な幅の材を3回共巻きし取り付けている。巻き材の端は巻いた材の間に差し込み止めている。脚台端部はやや丸みを持たせている様に見える。



写真14 かごの細部3

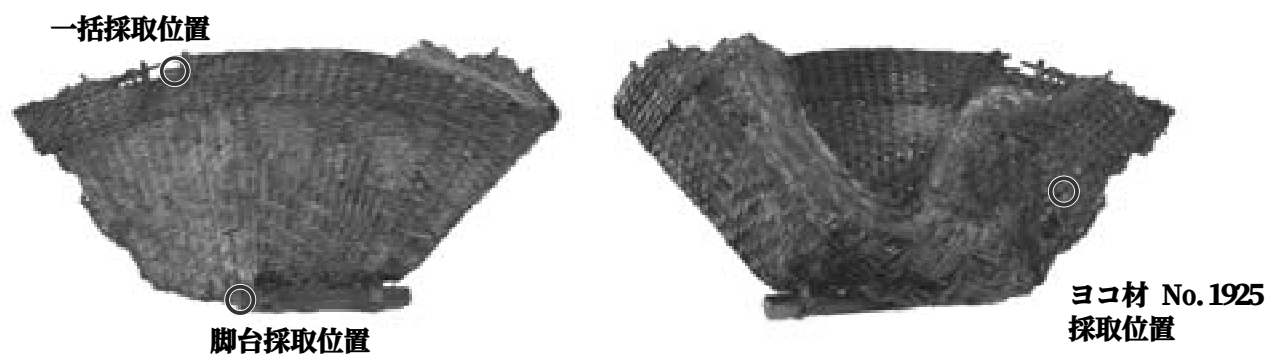
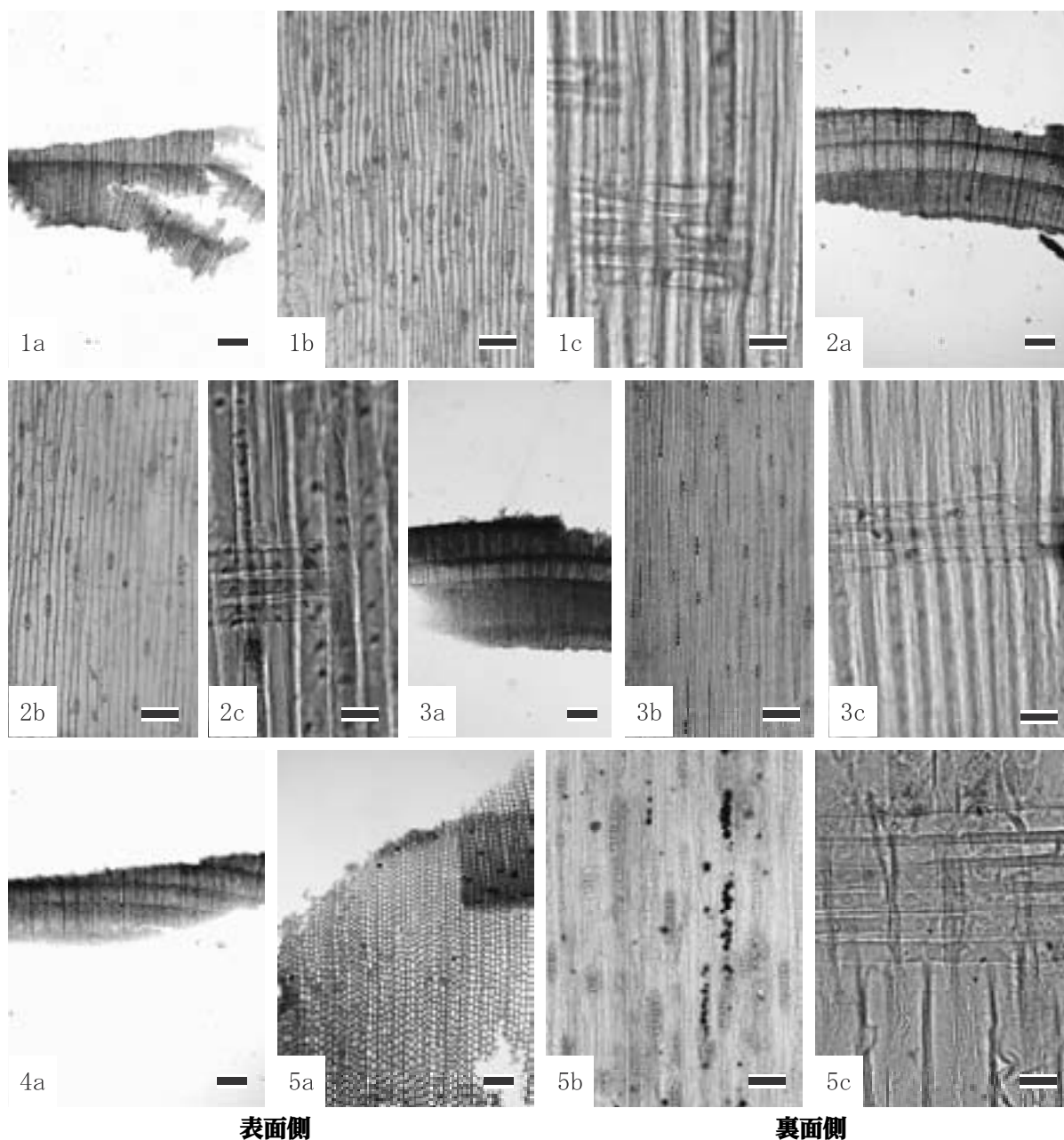


写真15 白江梯川遺跡出土編組製品の素材の光学顕微鏡写真

1a-1c: アスナロ (タテ材一括), 2a-2c: アスナロ (ヨコ材一括), 3a-3c: アスナロ (ヨコ添え振り組
みの巻き材一括材), 4a: アスナロ (ヨコ材, No.1925), 5a-5c: スギ (脚台, No.1928). a: 横断面 (スケール=200 μ m), b: 接線断面 (スケール=100 μ m), c: 放射断面 (スケール=25 μ m).

厚めのものを、ヨコ材や巻き材には幅の狭いものが使用されており、ござ目組み通有の使い分けがなされている。

ひごの長さは判断できなかったが、体部上部で頻繁な巻き材の継ぎ足しが確認されるのに対し、中央部と下部ではそれほどでもないことから、ある程度決まった長さのひごが使用されていると思われる。一方で、一定の長さのひごを継ぎ足したとは考えにくい部分もあり、臨機応変にひごを使用していると考えられる。

また、脚台は針葉樹のスギであった。木取りは芯なしの角材である。スギは木理が通直で、割裂性と加工性のよい材である。白江梯川遺跡で同時期の木製品にはスギが多用されており（未報告）、身近に資源が豊富で、板や角材を作りやすいスギが用いられたことが推定される。

製作技術 かごの底部はひごを2本一組とし、2本越え2本潜り1本送りの網代組みで組まれる。確認できるところで1辺22本11組が数えられ、さらに一番外側にひご1本を、4本越え4本潜りで組んでいる。タテ材は立ち上げ時で総数96本あるいは97本と考えられるが、ヨコ材の始まりや組み調整された部分は確認できず、どちらか判断できなかった。

体部は巻き上げで組まれる。下部は22段目まで、2本越え2本潜り1本送りの飛びござ目組みで組まれる。ヨコ材の重なりが何ヵ所かで確認でき、ひごを足していることがわかる。中央は、1本越え1本潜り1本送りのござ目組みで15段組まれる。ヨコ材の重なりは見つけられなかったが、巻き終わりを確認している。上部との境には別の素材が横方向に1周入れられているが、素材が非常に薄くて脆いため、同定できなかった。ひごに比べ薄く柔軟で、保存処理後の色調は黒みを帯び、表面には横方向の筋状の起伏が確認できることから、アスナロではない可能性が高い。

体部上部はヨコ添え振り組みで7段組まれる。タテ材を追加した部分が2ヵ所で確認できた。また、ヨコ材、巻き材とも材を重ねた部分を確認している。縁は、タテ材に幅2mm前後のヨコ材をあて、縁巻きの際にタテ材を表面側に折り曲げ共巻きしながら、2本飛びの巻縁で仕上げている。

底部を2本組みの網代とする民俗例はよく見られる。体部下半を2本飛びの飛びござ目、上部を1本飛びのござ目とする民俗例もよく見られる。タテ材の隙間があまり開かない（あるいは開けたくない）体部下半に2本飛びを、タテ材にある程度隙間の開いてくる体部上半に1本飛びを用い、ヨコ材に無理をかけない理にかなった組み方をしていると思われる。

体部上部にヨコ添え振り組みを用いる民俗例は見かけないが、材を重ね、強度を得ることが目的とすれば、民俗例では縁巻きにこの機能を持たせていると思われる。民俗例のかご素材に対し弥生時代では薄く細い素材を使用するところに、このヨコ添え振り組みの技法が関係していると思われる。同様な構成を持つかごは、県内では宝達志水町萩市遺跡からほとんど同じものが出土しているが（弥生時代後期後葉）、素材は未同定である。

おわりに 青谷上寺地遺跡出土のかごを復元されたバスケットリー作家の本間一恵氏が「弥生時代のかごを復元する」という文章の中で「(中略) 強度を落とさないように、かつ継いでいるところが目立たないよう工夫する。じっと見ているとこれを編んでいた人の心持が時を越えてこちらに伝わってくる(中略)」と書かれている(野田ほか2005)。つくり手とつくり手の対話である。今回報告するこのかごも、国立歴史民俗博物館の篠原徹氏の言う自然知と身体知を駆使し製作されたに違いないが(篠原1998)、それを捉えた本間氏のような観察はできなかった。

余談ではあるが、当センターが行っている体験講座用に、クラフトテープでこのかごをモチーフにしてかごを作製してみた。その際に感じたことだが、ヨコ添え振り組みの列が、縄文時代草創期土器の隆起線文様によく似ている。縄文土器はかごをモデルに生まれてきたのではないかと想像した。佐

賀県東名遺跡から縄文時代早期の多様なかごが発見され、また縄代圧痕を持つ草創期の土器がいくつかの遺跡で見ついている。底部から緩やかに立ち上がる形態や、四角い底、肥厚する口縁部など、かごと土器の類似点が多い。縄文施紋ですら、振り組み、縄目組みなどの斜めに走る材の様を縄文と置き換えたと考えることも可能である。ヨコ添え振り組みをもつかごの形状がほぼ同様でも、遺跡によって素材が異なる場合があるのと同じように、粘土と植物というように素材が異なっても、土器にかごの形状や文様を表したと考えられないだろうか。(本田・佐々木)

引用・参考文献

大分県別府産業工芸試験所編 1991 『竹編組技術資料 基礎技術編』

川畑 誠・沢辺利明ほか 1998 『萩市遺跡』 (社)石川県埋蔵文化財保存協会

佐賀市教育委員会文化財課編 2006 『東名遺跡』 国土交通省佐賀河川総合開発工事事務所・佐賀市教育委員会

佐々木由香 2006 「6-5 編組製品」下宅部遺跡調査団編『下宅部遺跡Ⅰ(1)』 東京都都市整備局西部住宅建設事務所・東京都東村山市遺跡調査会

篠原 徹 1998 「民俗の技術とはなにか」『民俗の技術』 朝倉書店

杉山寿栄男 1942 『日本原始繊維工芸史 原始編』 雄山閣

名久井文明 2004 「民俗的古式技法の存在とその意味」『国立歴史民俗博物館研究報告』第117集 国立歴史民俗博物館

野田真弓・本間一恵ほか 2005 「第5章 青谷上寺地遺跡出土のかご」『青谷上寺地遺跡出土品調査報告書1 木製容器・かご』鳥取県埋蔵文化財センター

5. おわりに

調査開始前から多量の木製品の出土が予想されており、大型の琴(第2図1)や船部材や桶などが纏まって出土した(写真1~3)。その中でも文様を持つ筒形容器や水銀朱塗りの盾・鉄剣の柄などの北陸地方では貴重な木製品があり、また装飾付き花卉高杯や容器の脚などは青谷上寺地遺跡で製作された可能性が高い木製品もある。調査終了以降に、工業善通・高垣陽子氏、笠原潔氏、山田昌久氏、野田真弓・本間一恵氏、出土木器研究会などの多くの方々から資料調査の際に多くのご教示を得たことで、重要な木製品が多いことが明らかとなった。そのことから早期に資料化を計るべきと判断し、高杯の資料提示と問題提起を石川ゆずは氏にお願いした。今回、中川・笠原氏により北陸地方の琴の独自性と特徴を明らかにしていただき、本田・佐々木氏にはかごの編み方と素材の紹介をお願いした。今回は筆者も一文を書く予定だったが、時間と力量の関係で無理であった。4氏に感謝して終わりたい。(久田)

石川県埋蔵文化財情報
第19号

発行日 2008(平成20)年3月31日

発行 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>
E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 株式会社 橋本礎文堂

© (財)石川県埋蔵文化財センター